

《第1部》

小学校 教員養成課程 外国語（英語）

第1章 コアカリキュラムに関する諸調査

1. コアカリキュラムの先行実施と妥当性・効果の検証

1.1 目的

2017年11月に文部科学省が公表した「教員養成・研修 外国語（英語）コアカリキュラム」の「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」（以下、コアカリキュラムとする）には、大学の教職課程で共通に習得すべき資質能力が示されている。コアカリキュラムは「外国語の指導法」（2単位程度を想定）と「外国語に関する専門的事項」（1単位程度を想定）で構成されている。2019年4月から、そのコアカリキュラムに基づいて、各大学の教職課程が編成され、単位認定が行われている。本調査は2018年度に実施されたが、その目的は、2019年4月に新しく教職課程に導入される予定の「外国語の指導法」の効果を検証するものである。

1.2 先行研究

コアカリキュラムに関する研究は近年活発に行われている（酒井・内野，2018；飯田・山口・奥切・青田・新井・鈴木・多田・辻・中竹・濱田・藤尾・米山・木村，2019；山口・飯田・多田・青田・新井・鈴木・木村，2019など）。これまでの研究は、教師アンケートを活用した研究（飯田他，2019；山口他，2019）と、学生アンケートを活用した研究（酒井・内野，2018など）に大別される。

教師アンケートを活用した山口他（2019）は、大学の英語教職課程担当者がコアカリキュラムの求める到達目標に対してどのような見解を持っているのかを検証している。中学校・高等学校教員（英語）の一種免許資格を通学課程によって取得可能な全国の306大学のうち、小学校の英語教職課程を有する70の大学が対象となった。調査内容は、各到達目標（26項目）について、履修生の多くが卒業までにどの程度到達すると見込めるかを5件法で尋ねるもので、自由記述欄に回答も求めている。アンケートの結果、9%の大学がそれぞれ到達目標を達成できると考えられていることが示された。このことは、コアカリキュラムが求める到達目標が高い可能性を示していると考えられる。

学生アンケートを活用した酒井・内野（2018）は、「外国語の指導法」の初等英語科指導法の受講生103名から得られたコアカリキュラムの項目の理解度及び英語力の自己評価、TOEICの得点を分析した。その結果、コアカリキュラムは全ての項目で自己評価が低く、さらに指導する必要性が示唆された。英語力の自己評価に関しては、コアカリキュラムで求めているCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）B1レベルに肯定的な自己評価をした学生の割合が、読むこと（59.2%）が最も高かったが、聞くこと、話すこと[やり取り]、書くこと、話すこと[発表]の順で少なくなり、話すこと[発表]が最も低かった（27.3%）。英語運用能力については、CEFR B1以上に達している学生は19人（18%）しかいなかった。これらの結果は、授業内容の改善・充実のための示唆を考察している。

これらの研究は、コアカリキュラムに基づく「外国語の指導法」や「外国語に関する専門的事項」の講義を実施・運営していく際に有用な情報を提供するものである。しかし、これらの講義を受講することで、学生にどのような資質能力が実際に身についたのかという情報は提供してくれない。そこで、本研究では、2019年度から開講予定の「外国語の指導法」の講義を受講することによって、どのような資質能

力が受講生に実際に身につくのかを検証することを目的としている。

1.3 研究方法

◆参加者

国立大学3校（A大学、B大学、C大学）及び私立大学1校（D大学）に在籍する学部学生255名が、同意をした上で本研究に参加した。後述する事前・事後テストを受け、かつ、データに欠損がない216名を分析対象とした。その内訳は、A大学103名、B大学31名、C大学78名、D大学6名であった。

◆研究デザインと手続き

「事前テスト—処遇—事後テスト」のデザインを用いた。事前テストは、2018年10月上旬に実施された。処遇期間は10月上旬から1月下旬もしくは2月上旬の15週間で（90分×15週）、コアカリキュラムに基づく「外国語の指導法」の講義が実施された（コアカリキュラム施行前年であるが、コアカリキュラムの内容を意識して試行的に実施してもらった）。事後テストは、2019年1月下旬もしくは2月上旬に、講義の最終日で実施された。

◆事前テスト・事後テスト

授業中にGoogle Formsを使用して行われた。テストで使われた項目はコアカリキュラムの「外国語の指導法」で育成する資質能力に関する35問である（当初は36問であったが、ミスがあった1問は分析から除外された）。テストの項目については、当該科目の専門家である大学教員4名で話し合った上で、作成した。予備調査を行い、その結果も踏まえながら、最終的な項目を作成した。具体的な内容や問題数については、以下の通りで、4つの「まとめり」で構成されている。

「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」は合計8問で、「学習指導要領」に関すること2問、「主教材」に関すること2問、「小中高等学校の連携と小学校の役割」に関すること2問、「児童や学校の多様性への対応」に関すること2問で構成されている。

「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」は合計11問で、「言語使用を通じた言語習得」に関すること2問、「音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセス」に関すること2問、「児童の発達段階の特徴を踏まえた音声によるインプットの在り方」に関すること2問、「コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら、伝え合うこと」に関すること1問（2問だったが、ミスがあったため1問）、「受信から発信、音声から文字へと進むプロセス」2問、「国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づき」2問で構成されている。

「指導技術」は合計6問で、「英語での語りかけ方」に関すること2問、「児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方」に関すること2問、「文字言語との出会わせ方、読む活動・書く活動への導き方」2問で構成されている。

「授業づくり」は合計10問で、「題材の選定、教材研究」に関すること2問、「学習到達目標、指導計画」に関すること2問、「ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方」に関すること2問、「ICT等の活用の仕方」2問、「学習状況の評価」2問で構成されている。

テスト形式は多肢選択法で「わからない」を含む4択の中から回答させた。「わからない」を含めた理由は、当該講義を受講する前に、コアカリキュラムで求められている資質能力について学ぶ機会はほとんどないと考えたからである。このことは、当該問題の事前テストの正答率は29%と低いことから、裏づけられていると考える。

以下で、「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」の「学習指導要領」に関する問題の例を示す。

問題文： 2020年度から使用される小学校5,6年生の主な教材はどれか？

選択肢： 1. 検定教科書 2. *Let's Try!* 3. *We Can!* 4. わからない

正答した場合のみ1点を与えた（上記の例では、1. 検定教科書）。「4. わからない」は0点とした。

まとめりごとの信頼性係数（Cronbach α ）を求めたところ、「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」のまとめりは、事前テストが0.45、事後テストが0.39であった。「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」のまとめりは、事前テストが0.70、事後テストが0.63であった。「指導技術」のまとめりは、事前テストが0.60、事後テストが0.62であった。「授業づくり」のまとめりは、事前テストが0.61、事後テストが0.63であった。これらの結果から、信頼性が高いとは言えず、結果の解釈には慎重を期す必要がある。

1.4 結果

事前テスト・事後テストの記述統計と推測統計の結果は以下の表1の通りである。

「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」（合計8問）のまとめりについては、事前テストの平均は2.29 ($SD = 1.58$)、事後テストの平均は3.09 ($SD = 1.59$)である。事前テストから事後テストへの差は統計的に優位であり ($p = .000$)、効果量は中であった ($\Delta = .51$)。

「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」（合計8問）のまとめりについては、事前テストの平均は4.53 ($SD = 2.58$)、事後テストの平均は6.45 ($SD = 2.37$)である。事前テストから事後テストへの差は統計的に優位であり ($p = .000$)、効果量は中であった ($\Delta = .69$)。

「指導技術」（合計6問）のまとめりについては、事前テストの平均は3.01 ($SD = 1.64$)、事後テストの平均は4.31 ($SD = 1.47$)である。事前テストから事後テストへの差は統計的に優位であり ($p = .000$)、効果量は大であった ($\Delta = .80$)。

「授業づくり」のまとめりについては、事前テストの平均は5.17 ($SD = 2.33$)、事後テストの平均は7.08 ($SD = 2.11$)である。事前テストから事後テストへの差は統計的に優位であり ($p = .000$)、効果量は大であった ($\Delta = .82$)。

表1 事前テスト・事後テストの記述統計

	#	事前平均 (標準偏差)	事後平均 (標準偏差)	効果量 Δ		p
「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」		2.29 (1.58)	3.09 (1.59)	.51	中	.000
学習指導要領	1	.29 (.453)	.23 (.420)	-.13	無	.096
	2	.47 (.500)	.60 (.491)	.27	小	.002
主教材	3	.23 (.423)	.49 (.501)	.61	中	.000
	4	.15 (.353)	.11 (.318)	-.09	無	.229
小中高等学校の連携と小学校の役割	5	.09 (.287)	.18 (.385)	.32	小	.001
	6	.36 (.481)	.58 (.494)	.47	小	.000
「児童や学校の多様性への対応」	7	.41 (.493)	.47 (.500)	.13	無	.120
	8	.29 (.457)	.42 (.494)	.28	小	.001

「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」		4.53 (2.58)	6.45 (2.37)	.69	中	.000
言語使用を通じた言語習得	1	.52 (.501)	.63 (.484)	.22	小	.005
	2	.35 (.476)	.45 (.499)	.23	小	.004
音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセス	3	.27 (.445)	.38 (.487)	.26	小	.004
	4	.60 (.491)	.79 (.407)	.39	小	.000
児童の発達段階の特徴を踏まえた音声によるインプットの在り方	5	.34 (.475)	.59 (.493)	.52	中	.000
	6	.27 (.447)	.45 (.499)	.40	小	.000
コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら、伝え合うこと	7	.72 (.451)	.83 (.373)	.25	小	.000
受信から発信、音声から文字へと進むプロセス	8	.56 (.498)	.82 (.389)	.52	中	.000
	9	.27 (.445)	.59 (.493)	.71	中	.000
国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づき	10	.40 (.491)	.48 (.501)	.16	無	.056
	11	.35 (.479)	.43 (.496)	.16	無	.072
「指導技術」		3.01 (1.64)	4.31 (1.47)	.80	大	.000
英語での語りかけ方	1	.73 (.447)	.81 (.392)	.19	無	.011
	2	.71 (.453)	.84 (.372)	.27	小	.000
児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方	3	.49 (.501)	.72 (.449)	.46	小	.000
	4	.43 (.496)	.76 (.425)	.68	中	.000
文字言語との出会わせ方、読む活動・書く活動への導き方	5	.37 (.483)	.54 (.499)	.36	小	.000
	6	.29 (.453)	.63 (.483)	.76	中	.000
「授業づくり」		5.17 (2.33)	7.08 (2.11)	.82	大	.000
題材の選定、教材研究	1	.87 (.341)	.96 (.204)	.27	小	.000
	2	.75 (.434)	.89 (.318)	.32	小	.000
学習到達目標、指導計画	3	.61 (.488)	.82 (.382)	.43	小	.000
	4	.47 (.500)	.55 (.498)	.17	無	.035
ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方	5	.48 (.501)	.84 (.368)	.72	中	.000
	6	.52 (.501)	.75 (.434)	.46	小	.000
ICT等の活用の仕方	7	.40 (.492)	.73 (.443)	.67	中	.000
	8	.27 (.447)	.40 (.490)	.27	小	.002
学習状況の評価	9	.26 (.441)	.48 (.501)	.50	小	.000
	10	.53 (.500)	.66 (.474)	.26	小	.001

1.5 議論

まず全体的な傾向について述べ、次いで事前と事後で有意に向上した項目、変化が見られなかった項目の順で議論する。

< 1 > 全体的な傾向

「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」「指導技術」「授業づくり」の各大項目において、事前テストと事後テストの間に有意な差が見られ、効果量も中～大であったことから、「外国語の指導法」により、コアカリキュラムが想定する身につけておくべき資質能力の習得につながったと考えられる。このことは、コアカリキュラムの項目の理解度の自己評価が総じて低かったと報告する酒井・内野(2018)とは異なる結果となった。正答率の点から見ると課題も見られる。「指導技術」と「授業づくり」の事後テストの正答率は、71.8% (6問中4.31)、70.8% (10問中7.08)であり、比較的高かった。一方、「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」の正答率はもっとも低く、事後テストの平均値が3.09 (8問中)で、正答率は38.6%にしか達しなかった。例え

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

ば、高学年の外国語科の目標がコミュニケーション能力の基礎であることを正しく選択できていないこと（事後正答率23%）、2020年度から使用される小学校5、6年生の主な教材が検定教科書であることを選択できないこと（事後正答率11%）、英語教育の到達目標に影響を及ぼしたのがCEFRであるということを選択できないこと（事後正答率11%）、これら3項目の正答率が極端に低いのが特徴的である。さらに、「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」の事後テストの正答率は58.6%（11問中 6.45点）であった。中でも低かったのは、音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセスの項目で、事後正答率は38%であった。

<2>向上した内容

統計的に有意に向上し、さらに効果量が中であったのは次の8項目であった。これらの項目は「外国語の指導法」の中で、知識が身についたと考えられる。

児童の発達段階の特徴を踏まえた音声によるインプットの在り方

発達段階を踏まえた音声インプットの在り方として適当でないのはどれか。

1. 学習初期段階の学習者に音声を与えるときは、あまり長すぎないインプットを与えるべきである
2. 発達段階を考慮し、児童の興味関心にあった音声インプットを与えることが重要である
3. 高学年の児童には音声インプットを中心とした指導をするべきではない
4. わからない

→教科外国語には文字指導や読み書きが入ってくるが、あくまでその指導の中心は音声であることを理解することができたと考えられる。

受信から発信、音声から文字へと進むプロセス

第二言語を身につけていくことの記述として最も適当なものはどれか。

1. 音声を十分に聞かせてから、文字を提示する
2. 音声を聞かせる際は、文字を読ませる
3. 文字を提示し、安心感を与えた後、音声を聞かせる
4. わからない

→児童の第二言語習得が音声重視であること、文字はあくまで音声の補助であること、小学校英語教育における読み書きの目標が慣れ親しみであることが理解されたのかもしれない。

主教材

2020年度から使用される予定の小学校3、4年生の主な教材はどれか？

1. 検定教科書
2. *Let's Try!*
3. *We Can!*
4. わからない

→外国語活動で使用される教材については理解しているようである。

ICT等の活用の仕方

新学習指導要領で、ICTを利用する目的に含まれないのは以下のどれか。

1. 児童の興味・関心をより高めるため
2. 指導の効率化や言語活動の更なる充実をはかるため
3. 評価・測定の更なる効率化と正確さの向上をはかるため
4. わからない

→デジタル教科書、ネイティブ・スピーカーの音声で作成されたCDなどの様々なICTの活用について、整理され、その効果に関する理解が深まったと考えられる。

受信から発信、音声から文字へと進むプロセス

第二言語を身につけていくことの記述として最も適当なものはどれか。

1. 音声を十分に聞かせてから、文字を提示する
2. 音声を聞かせる際は、文字を読ませる
3. 文字を提示し、安心感を与えた後、音声を聞かせる
4. わからない

→第二言語を学んでいく過程で「聞くこと」が「読むこと」に先行すること、段階的に文字を提示していくことが求められていることを理解していると考えられる。

ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方

ALTとのTTの在り方（業務委託の場合を除く）に関する記述で最も適当なものを1つ選べ。

1. 活動のやり方の説明は英語で行うよりALTとのデモで見せるとよい
2. 十分に相談をしておればALTが指導案を作成することには問題がない
3. TTにおいて児童の評価をALT主導で行っても問題はない
4. わからない

→学級担任などとALTなどの特性や役割分担、打ち合わせの手順などを理解していると考えられる。

文字言語との出会わせ方、読む活動・書く活動への導き方

文字を書く指導について、最も適当なものを選べ。

1. アルファベットは4線上で何度も練習し、お手本を見なくても単語や文を書けるようにする
2. 国語の授業でローマ字を習っているので、5年生はヘボン式で名前が書ける状態にある
3. 文字への興味を持たせつつ、4線上でお手本を見て書けるようにする
4. わからない

→高学年の外国語における「読むこと」や「書くこと」の目標が慣れ親しみであることを理解していると考えられる。

<3>向上しない内容

変わらなかった項目について、低いままで推移した項目と、高いところで推移した項目に分けられる。まず、効果量が無かった項目のうち、平均値が低いままで維持したものは次の6項目であった。

学習指導要領

外国語科の目標として最も適当なものを1つ選べ。

1. コミュニケーション能力の素地

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

2. コミュニケーション能力の基礎
3. コミュニケーション能力の慣れ親しみ
4. わからない

→コミュニケーション能力の慣れ親しみ、素地、基礎について、それぞれ十分に理解していないことが考えられる。高学年における外国語（教科）の目標について十分な理解に至っていないのではないだろうか。

主教材

2020年度から使用される小学校5、6年生の主な教材はどれか。

1. 検定教科書
2. Let's Try!
3. We Can!
4. わからない

→Let's Try!とは異なり、We Can! 移行期用のためだけに作成されたことを理解していないことが原因と考えられる。

児童や学校の多様性への対応

多様な児童生徒への対応に関する記述のうち、適当でないものを選び。

1. 高学年では、体験的にとどまらず、分析的な活動も取り入れる
2. 英語科の場合、特別支援を要する児童の中には、外国籍の児童は含まれない
3. 映像や音声を見せる際に、事前に音声のスク립トを渡すなどの配慮をする場合がある
4. わからない

→特別支援のコンセプトであるインクルーシブ教育やユニバーサルデザインに関する基礎的な理解が十分ではないのではないだろうか。

国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づき

(1) 国語教育との連携に関する記述として適当でないものを選び。

1. 英語教育を行うことで、国語力も向上する
2. 両科目の学習を通して言語の多様性を尊重する態度を身につける
3. 英語教育は国語力低下の一因である
4. わからない

→英語力と国語力の関係への誤解が根強いと考えられる。

(2) コトバの面白さや豊かさへの気づきの指導に関する記述として適当でないものはどれか。

1. 複数言語を学ぶより、まず英語を学んだほうが、言語に関する意識が高まる
2. 英語の読み聞かせを通して、ライム (cat, pat, hat の-atの音など) に気づかせる
3. baker, teacherのように-erがつく例として、医師、教師のように師がつく例を挙げる
4. わからない

→日本語とは異なる言語の1つである英語に触れることにより、言語の面白さや豊かさなどに気づかせたり、言語そのものに対する関心を高めたり、これを尊重する態度を育成することが重要であることを再度意識させたい。

一方、効果量が無かった項目のうち、平均値が比較的高いところで維持したものは次の2項目であった。

学習到達目標、指導計画

指導計画を立てる際の説明として、最も適当なものを選び。

1. 学年ごとに最終のゴールを設定し、そこに到達するように各授業の到達目標を立てるのがよい
2. 毎時間の授業のたびに到達目標を立てていくのがよい
3. 授業では必ず到達目標を達成するように授業計画通りに進める方がよい
4. わからない

→他教科(国語, 算数など)の講義・演習などでも扱っている可能性が高い内容であり, 指導に力点を入れなくてもよいのかもしれない。

英語での語りかけ方

教師の児童への語りかける英語について、最も適当なものを選び。

1. 授業では教師は常に英語で児童に語りかけるべきである
2. 既習の英語表現をできるだけ多く用い、児童にわかりやすい英語で語りかけるのがよい
3. その日に習う英語表現を中心に英語で語りかければよい
4. わからない

→他の英語教育関係の講義・演習などでも扱っている可能性も高く, 指導に力点を入れなくてもよいのかもしれない。しかし, 理解していることが技能として身につけているとは限らないことには注意が必要であろう。

1.6 まとめ

上述したように、2019年4月から英語コアカリキュラムに基づいて教職課程が編成され、単位認定が行われている。本稿では、2018年度に4大学で試験的に導入された「外国語の指導法」の効果について報告した。全体的な傾向として、外国語の指導法の授業によって、コアカリキュラムによって想定されている知識の向上は見られた。しかし、「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」や「子どもの第二言語習得についての知識とその応用」に関する項目については、期待したほどの向上は見られなかった。今後はシラバス内容の検討などが必要であろう。また、「指導技術」と「授業づくり」に関する項目については向上は見られたものの、技能として活用できるようになっているかは、模擬授業や教育実習などを通して別途検証する必要があるだろう。

【引用文献】

- 酒井英樹・内野駿介(2018). 「小学校教員養成において必要される知識・能力に関する大学生の自己評価—小学校教員養成課程(英語)コア・カリキュラムの点から—」JES Journal, 第18号, 100-115.
- 飯田敦史・山口高嶺・奥切恵・青田庄真・新井巧磨・鈴木健太郎・多田豪・辻りこ・中竹真依子・濱田彰・米山明日香・木村松雄(2019). *Investigating teacher educators' perceptions of the core curriculum in teacher education programs at Japanese universities*, JACET-Kanto Journal, 第6号, 23-41.
- 山口高嶺・飯田敦史・多田豪・青田庄真・新井巧磨・鈴木健太郎・木村松雄(2019). 「JACET関東支部特別研究プロジェクトB:大学における英語教員養成コアカリキュラムの実態調査」JACET Proceedings, 第1号, 57-64.

2. 大学教員対象のアンケート調査

2.1 調査の概要

本調査の主な目的は次の2点である。

- ①初等教員養成課程の外国語に関する授業科目（外国語の指導法，外国語に関する専門的事項）における授業運営や指導上の工夫及び問題点・課題に関する情報を収集すること
- ②初等教員養成課程におけるカリキュラム構成や，上記以外の科目における外国語に関する内容の取扱いなどに関する情報を収集すること

これらの情報を収集するため，次の3種類の調査用紙を作成した。

- (1) 英語教員養成課程コアカリキュラムに関するアンケート
【初等教員養成課程の概要について】（以下，概要調査）
- (2) 英語教員養成課程コアカリキュラムに関するアンケート
【初等教員養成課程「外国語の指導法」または同等の科目について】
（以下，指導法調査）
- (3) 英語教員養成課程コアカリキュラムに関するアンケート
【初等教員養成課程「外国語に関する専門的事項」または同等の科目について】
（以下，専門的事項調査）

2.2 調査項目

概要調査は6項目で構成されており，その全てが「はい」「いいえ」の2件法（Q2のみ「わからない」を加えた3件法）及び「はい」の場合に具体的な記述を求める設問であった。Q1とQ2は課程のカリキュラムに関するもの，Q3とQ4は教育実習に関するもの，Q5は「教職実践演習」に関するもの，Q6は学生の英語力向上の取り組みに関するものであった。調査項目を表2にまとめる。

表2 概要調査の調査項目

調査項目	自由記述の内容
Q1 初等教員養成課程に英語に特化したコースを設けているか	そのコースならではの特徴
Q2 教科指導と教科専門の融合科目を設けているか	科目名と大まかな内容
Q3 教育実習校との連携で工夫していることはあるか	工夫の具体的な内容
Q4 「教育実習の事前事後の指導」の授業で英語教育や英語に関する専門的事項を扱っているか	時間数及び内容
Q5 「教職実践演習」の授業で英語教育や英語に関する専門的事項を扱っているか	時間数及び内容
Q6 小学校教員免許取得を目指す学生の英語力向上のための取り組みをしているか	取り組みの具体的内容

指導法調査は7項目，専門的事項調査は6項目で構成されており，Q1からQ4は「はい」「いいえ」の2件法（Q3，Q4は「該当なし」を加えた3件法）及び「はい」の場合に具体的な記述を求めるもの（Q2は自由記述なし），Q5からQ7は自由記述式の設問であった（表3）。

Q1，Q3，Q4では，コアカリキュラムに基づいた授業を行う際に課題となるであろう事柄（Q1. 限られた授業時間，Q3. 複数教員間での連携，Q4. 大人数クラスでの授業）に対応するための工夫を問うた。Q2は指導法調査にのみ含まれていた項目で，文部科学省から東京学芸大学が委託を受けて実施した「英語教員

の英語力・指導力強化のための調査研究授業」(東京学芸大学, 2017)で作成・頒布した『小学校英語実践事例DVD』を活用しているかを問うた。

Q5では、コアカリキュラムの各学習内容(小学校外国語教育についての基本的な知識・理解, 子どもの第二言語習得についての知識とその応用, 指導技術, 授業づくり, 授業実践に必要な英語力, 英語に関する背景的な知識)と各学習形態(授業観察, 授業体験, 模擬授業)について、授業担当者が実施、運営上課題であると感じていることを問うた。またQ6では各学習内容を授業で扱う際に工夫していること及び各学習形態を授業で行う回数や方法、内容について問うた。Q7はコアカリキュラム全体に対するコメントを求めるものであった。

表3 指導法調査, 専門的事項調査の調査項目

調査項目	自由記述の内容
Q1 限られた授業時間で学習項目を網羅するために工夫していることはあるか	工夫の具体的な内容
Q2 ^a 「文部科学省委託 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究授業『小学校英語実践事例DVD』」を活用しているか	
Q3 同一科目を担当する複数の教員間で連携を図っているか	連携の具体的な内容・方法
Q4 大人数クラス(50名程度以上)での指導方法, 宿題, 課題, 評価等で工夫していることはあるか	工夫の具体的な内容
Q5 ^b 各学習内容・学習形態について, 授業の実施・運営における問題点・課題	問題点・課題の具体的な内容
Q6 ^b 各学習内容について, 授業の実施・運営における工夫 各学習形態について, 回数や実施方法・内容	工夫の具体的な内容 回数や実施方法・内容
Q7 コアカリキュラムの学習項目についてのコメント	コメント

注: ^a指導法調査のみで, 自由記述はなし。^b学習形態に関する項目は指導法調査のみ。

また, 上記以外に指導法調査と専門的事項調査では担当科目名と履修学生数を, 3つの調査用紙全てで大学名, 回答者名(任意), 回答者の連絡先(任意)を尋ねた。

2.3 調査方法

◆参加者

小学校教員養成課程を持つ, 延べ92大学の105名の教員から回答を得ることができた。

◆研究デザインと手続き

各大学の教職課程の授業担当者を対象に, 授業運営や指導上の工夫及び問題点・課題に関する情報を収集する目的で, アンケート調査(Google Formsを利用したウェブアンケート)を実施した。

初等教員養成課程が設置されている大学宛てに, アンケートのURL及びQRコードが掲載された依頼文書を郵送し, 協力を依頼した。当初, 回答期間は1ヶ月程度を想定していたが, より多くの回答を得るために期間をさらに1ヶ月ほど延長した。

2.4 分析

概要調査は全てが2件法または3件法による調査項目であるため, 各回答の度数を算出した。また回答が「はい」の場合の具体的な記述については, 研究者らが回答を分類してまとめた。

指導法調査及び専門的事項調査について, Q1からQ4は概要調査と同様の分析を行った(Q2は度数の算出のみ)。Q5及びQ6の学習内容に関する項目についてはKH Coder(樋口, 2014)を用いて計量テキスト

分析を行い、各学習内容及び学習形態を扱う際の課題や工夫に特徴的な語を抽出した。Q6の学習形態に関する項目及びQ7は自由記述の内容を研究者らが分類してまとめた。

2.5 結果と考察

概要調査、指導法調査、専門的事項調査における回答者の延べ数はそれぞれ41名、37名、27名であった。また大学数でみるとそれぞれ37校、33校、22校であり、大学数ベースの回収率はそれぞれ15.6%、13.8%、9.2%であった。

<1>初等教員養成課程全般について（概要調査）

初等教員養成課程全般に関して、概要調査の結果をまとめる。Q1からQ6における回答の度数分布を表4に示す。

表4 概要調査における回答の度数分布

	Q1		Q2		Q3		Q4		Q5		Q6	
はい	12	(29.3)	7	(17.1)	3	(7.3)	6	(14.6)	10	(24.4)	27	(65.9)
いいえ	29	(70.7)	25	(61.0)	38	(92.7)	35	(85.4)	31	(75.6)	14	(34.1)
わからない	—		9	(22.2)	—		—		—		—	

注：（ ）内の数値は割合（%）。「わからない」の選択肢はQ2のみ。

Q1は「英語に特化したコースを設けているかどうか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは12名であり、全体の29.3%であった。大学数ベースでみると37校中11校（29.7%）であり、初等教員養成課程の約3割で英語に特化したコースを設けていることが明らかになった。コースの特徴として最も多かったのは、中・高等学校教諭免許状（外国語（英語））を取得できること（8校）であった。英語教育専攻の中に小学校教員を目指すためのコースを設定している大学も2校あった。また、小学校での教育実習を含む10科目21単位からなる「小学校英語オプション」を設け、修了者に対して大学が修了証を発行している大学もあった（ただし選択制であり学科の全学生が履修するものではない）。

Q2は「教科指導と教科専門の融合科目を設けているかどうか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは7名で全体の17.1%であったが、「わからない」と回答した9名を除いた場合の割合は28.0%であり、3割弱の課程で教科指導と教科専門の融合科目を設けていることが明らかになった。

Q3は「英語教育に関することで教育実習校との連携で工夫していることがあるかどうか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは3名（7.3%）のみであり、教育実習校との連携における工夫はほとんどの課程で行われていないことが明らかになった。「はい」と回答した3名からは、具体的な工夫の内容として1年次から附属小・中学校に観察実習に赴いていること、実習期間中に外国語の授業を観察してレポートを課していること、実習中の外国語の授業においてやり取りが活発に行われるように工夫していることが挙げられていた。

Q4は「教育実習の事前・事後指導において英語教育や英語に関する専門的事項についての内容を扱っているか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは6名で全体の14.6%であり、大部分の課程で教育実習の事前・事後指導では英語に関する内容を扱っていないことが明らかになった。教育実習の事前・事後指導の内容は担当者や実施形態に依る部分が大きいと考えられる。例えば教員養成課程の学生全体を対象に一律のカリキュラムで実施する場合には、各教科などに関する内容を扱うこ

とは難しいだろう。一方で、ピーク制の大学において各教科分野の教員が自コースの学生の事前・事後指導を担当する場合は、その教科の指導法などについて扱う余地がある。いずれにしても、英語専攻以外の学生に対して教育実習の事前・事後指導において英語教育や英語に関する専門的事項についての内容を扱うケースは稀であると考えられる。具体的な内容としては附属小学校で外国語授業に関する実践指導を受講すること、事後指導において附属小学校教員を招いて講義・演習を行うこと、下級生に向けた実習報告会で報告することなどが挙げられていた。

Q5は「教育実践演習」の科目で英語教育や英語に関する専門的事項についての内容を扱っているかを問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは10名で全体の24.4%であった。「教職実践演習」も教育実習の事前・事後指導と同様に、担当者や実施形態によって英語に関する内容を扱うかどうかは左右されると考えられる。扱いの具体的な内容として、15コマのうち1コマ程度を割り当てて小学校英語教育の基本的な内容を扱うこと、小・中学校教員を招聘して講演やワークショップ、模擬授業を行うこと、附属小学校の公開研究授業を参観した後に討論を行うことなどが挙げられていた。

Q6は「学生の英語力向上のための取り組みを行っているか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは27名で全体の65.9%であった。取り組みの具体的な内容は多岐にわたるが、概ね次の4つに分類できる。第1に、教養英語科目や外国語の指導法の科目、外国語に関する専門的事項の科目において、英検やTOEICなどの英語資格検定試験の受験を促す取り組みである。資格検定試験の受験を必須としている例、科目ごとに目標スコアを設けている例、既定の級やスコアを取得した学生に奨励金を支給する例などがあった。第2に、授業外の講座である。ネイティブ・スピーカーとの英会話ラウンジや資格試験対策講座の他、小学校英語に特化したものとして絵本の読み聞かせを扱う講座の例があった。第3に、海外研修プログラムである。海外の教育連携校などへの短期留学の他、2週間程度の比較的短期間の語学研修の例が挙げられていた。中には、派遣先での小学校の授業参観をプログラムに取り入れている例も報告されていた。第4に、英語力向上のための科目設定である。具体的な科目名として、*English Pronunciation, Listening Comprehension*、「外国語活動のための実践英語」などが挙げられていた。

<2>外国語の指導法・外国語に関する専門的事項について(指導法調査・専門的事項調査)

外国語の指導法及び外国語に関する専門的事項の科目に関して、指導法調査及び専門的事項調査の結果をまとめる。各調査のQ1からQ4における回答の度数分布を表5に示す。

表5 指導法調査, 専門的事項調査における回答の度数分布

	Q1		Q2		Q3		Q4	
はい								
指導法調査	30	(81.1)	22	(59.5)	16	(43.2)	10	(27.0)
専門的事項調査	18	(66.7)	—		13	(48.1)	8	(29.6)
いいえ								
指導法調査	7	(18.9)	15	(40.5)	4	(10.8)	4	(10.8)
専門的事項調査	9	(33.3)	—		1	(3.7)	5	(18.5)
該当なし								
指導法調査	—		—		17	(45.9)	23	(62.2)
専門的事項調査	—		—		13	(48.1)	14	(51.9)

注：()内の数値は割合(%)。Q2は指導法調査のみ。「該当なし」の選択肢はQ3, Q4のみ。

Q1は「限られた授業時間で学習項目を網羅するために工夫していることがあるか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは指導法調査で30名（81.1%）、専門的事項調査で18名（66.7%）であり、どちらの科目でも大部分の担当者が時間的な制約を感じており、コアカリキュラムの学習項目を網羅するために何らかの工夫を講じていることが明らかになった。具体的な工夫として最も多かったのは、内容に軽重をつけて扱うことであった。特に重点的に扱っている内容として、実際の指導で活用できる実践的な内容や教室英語、小学生に教えるための音韻論などの内容が挙げられていた。また、指導案作成や模擬授業をグループ単位で行うことで時間を削減している例や、模擬授業の振り返りをオンラインでの動画共有で行っている例、特に英語力の向上に関してはe-learningシステムなどを用いて授業外で行う例などがあつた。一方で、各項目に十分な時間を充てるために小学校英語教育関連の科目を複数設定している大学があることもわかつた。

Q2は『『小学校英語実践事例DVD』を活用しているかどうか』を問う設問であり、指導法調査にのみ含まれる調査項目であった。この調査項目で「はい」と回答したのは22名（59.5%）であり、半数上の教員がこのDVDを活用していることがわかつた。

Q3は「同一科目を担当する複数の教員間で連携を図っているか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは指導法調査で16名（43.2%）、専門的事項調査で13名（48.1%）であった。一方で、「該当なし」、すなわち複数の教員で担当する科目はないという回答がいずれの調査においても半数弱に上つた。「該当なし」を除くと指導法調査で80.0%、専門的事項調査92.9%が「連携を図っている」という回答であり、複数教員で同一科目を担当する場合には多くのケースで何らかの連携が図られていることが明らかになった。特に専門的事項の科目では1名を除いて全ての回答者が「連携を図っている」と回答した。その理由の1つとして、この科目では異なる専門分野（例えば、英語学と英語文学、英語教育と英語学など）の教員がクラスを分担したり、オムニバス形式で授業を行ったりしているケースが多いことが考えられる。具体的には、どちらの科目においても理論的な内容と実践的な内容で担当者を分けている例が多く報告されていた。

Q4は「大人数クラスでの指導方法、宿題、課題、評価等で工夫していることがあるか」を問う設問であった。この調査項目で「はい」と回答したのは指導法調査で10名（27.0%）、専門的事項調査で8名（29.6%）であった。一方この項目においても、「該当なし」、すなわち大人数クラスは担当していないという回答が多く、いずれの調査においても半数以上であった。「該当なし」を除くと指導法調査で71.4%、専門的事項調査61.5%が「工夫していることがある」という回答であり、大人数クラスを担当する場合には多くのケースで何らかの工夫がなされていることが明らかになった。具体的な工夫では、ICTを活用したりグループ学習を多く取り入れたりしている例が多かつた。また予習課題を課してその内容について授業内でディスカッションを行う反転授業を行っている例や、授業開始時に前回の復習テストを行うことで授業外での学習を促している例があつた。一方、受講生の増加に対応するため元々1クラスだったものを2クラス開講とした大学もあつた。

Q5は授業担当教員が各学習内容、学習形態を指導する際に感じる課題についての自由記述設問であった。各学習内容、学習形態に特徴的な課題を明らかにするため、指導法調査及び専門的事項調査におけるQ5の全回答（ $k = 214$ ）を対象として計量テキスト分析を行った。分析対象のデータは285文、総語数6,613語、総異なり語数964語、このうち分析に使用されたのは2,747語（異なり語数は753）であった。全データ中で最も多く出現した語は「学生」（80回）であり、次いで「授業」（79回）、「時間」（71回）の順で頻度が多かつた。出現頻度が10以上の語は計35語、5以上の語は81語であった（表6）。

表6 各学習内容、学習形態を扱う際の課題(Q5)における頻出語(頻度5以上)

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	学生	80	22	感じる	14	39	実施	8	62	工夫	6
2	授業	79		教育	14		取れる	8		自分	6
3	時間	71	24	活動	13		受講	8		身	6
4	英語	56		考える	13		場合	8		説明	6
5	指導	48		児童	13		評価	8		読む	6
6	多い	39		問題	13		訪問	8		不足	6
7	難しい	29	28	扱う	12	49	音声	7	70	ALT	5
8	十分	26		教える	12		課題	7		サイズ	5
	人数	26		体験	12		機会	7		扱える	5
10	特に	23		知識	12		具体	7		解説	5
	模擬	23	32	外国	11		言語	7		活かす	5
12	理解	22		教材	11		限る	7		観察	5
13	小学校	20		行う	11		細か	7		気づく	5
14	実践	18		書く	11		自信	7		研究	5
	内容	18	36	教員	9		出る	7		見せる	5
16	思う	16		持つ	9		専門	7		現在	5
	足りる	16		少ない	9		大きい	7		現場	5
	必要	16	39	科目	8		段階	7		向上	5
19	クラス	15		学校	8		連携	7			
	学習	15		講義	8	62	グループ	6			
	実際	15		作成	8		経験	6			

頻度5以上の81語を用いて、各語と学習内容との共起ネットワークを描画した(図1)。共起ネットワークにおいて、各学習内容と直接線で結ばれているのがその学習内容の課題において特徴的な語である。

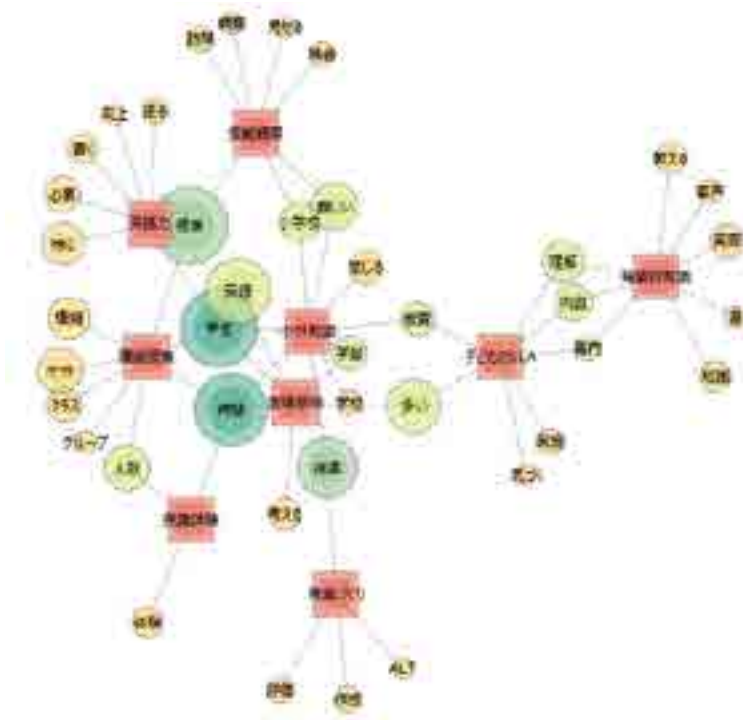


図1 各学習内容、学習形態を扱う際の課題(Q5)の共起ネットワーク

※小外知識…小学校外国語教育に関する基本的な知識・理解，子どものSLA…子供の第二言語習得についての知識とその活用，英語力…授業実践に必要な英語力，背景的知識…英語に関する背景的知識。描画はJaccard距離に基づく。

「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」における特徴語として、「学習」「学生」「学校」「感じる」「教育」「時間」「指導」「小学校」「難しい」の9語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で17文あった。まず、「これだけの内容を扱うのに少し時間が足りないと感じる」ともかく学生が現場に出て授業ができるようにとの思いから実践的なことを重視すると，全ての項目についてじっくり学習させる時間的余裕がないと感じる」（太字・下線は筆者，以下同様）といった記述に代表されるように，多岐にわたる学習内容に対して割くことのできる時間数が不足していることが課題として挙げられていた。「時間の都合上，説明が表面的になってしまい，学生の十分な理解が望めない」「学習指導要領の言葉遣いをかみ砕いて理解するのに時間がかかる，または難しい」のように，特に「(1) 学習指導要領」に関して時間数の不足や扱いづらさを指摘する意見が多かった。また「(4) 児童や学校の多様性への対応」について、「説明にとどまっているので，対応への難しさを感じる学生が多い」「2年次後期の科目なので学生が教育実習に行っておらず，講義で扱っても具体的なイメージを持たせることが難しい」のように講義のみで学生に理解を求めることの難しさや、「自分の経験から話をするしかできず，総論として，一般論として語ることは難しく，識字困難などについても触れることは触れるが，網羅的に専門的に指導できている自信がない」のように，担当教員が専門的な知見を持っていないことを危惧する回答が見られた。

「子どもの第二言語習得についての知識とその活用」における特徴語として、「多い」「気づく」「教育」「実施」「専門」「内容」「理解」の7語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で8文あった。「児童とのふれあい経験が少ないため，「児童の発達段階に応じた指導法」と言ってもなかなか理解できない学生が多い」「受講者のほとんどが英語教育専門ではないため，コミュニケーション性を重視した授業内容までは発展できない」のように，この学習内容の項目を扱う上で，学生のレディネスが整っていない点

が課題として挙げられていた。特に「(5) 受信から発信、音声から文字へと進むプロセス」に関して、「書くこと＝書写程度の**内容**であることを**理解**させるのに苦勞している。単語のスペルアウトまでさせてしまう習慣を打破するには、時間がかかる」「文章を書かなければ(原稿がなければ)話せないという学生が**多く**、「音声から文字へと進むプロセス」を**理解**させることが難しい」というように、学生自身が経験してきた英語学習方略からの脱却が特に難しいという指摘があった。

「指導技術」における特徴語として、「英語」「学習」「学生」「学校」「考える」「時間」「指導」の7語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で12文あった。課題として最も多く挙げられていたのは、学生の英語力が不足していることであった。例えば「**学生の英語力が低い**ので、取り上げたことだけはある程度できるようになるが、自律して使えたり、応用できたりはしない」「**学生の英語力が高い**とは言えず、**英語**で児童に語りかける方法を教えることはできても、いざ教壇に立った時には話せないと思われる」といった意見があった。また「限られた**時間**内で、**学生**が十分にやり取りを体験する、練習をすることに限界がある」「語りかけの場面で発音に自信のない**学生**が多く、クラスルームイングリッシュだけでも自信を持って言えるよう、練習**時間**を取りたい」「現在はTOEICの試験を学生に課しているが、**小学生**の授業に必要な**英語力**の養成をする体系的な**指導**が必要だと考える」といった記述があり、外国語の指導法や外国語に関する専門的事項の科目のみで学生の英語力を向上させるのは困難であり、他の科目や科目外の学習を合わせて体系的に学生の英語力を向上させる取り組みが必要であることが示唆された。

「授業づくり」における特徴語として、「ALT」「作成」「指導」「評価」の4語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で4文あり、「(2) 学習到達目標、指導計画」と「(5) 学習状況の評価」に関してそれぞれ2文ずつであった。まず前者に関して「年間**指導**計画を学生が**作成**することができるまでの**指導**はできていない」という課題が指摘されていた。コアカリキュラムでは単元計画や年間指導計画の作成に関しても扱うこととされているが、実際には1時間の授業をする力を学生に身につけさせるのが先決であり、これらについては十分な学習時間を取ることができていない現状が明らかになった。また「**指導案作成**には時間がかかる」ことも課題として指摘されていた。また後者に関して「評価の指導は表面的な知識のみに終始している」「評価については現段階で私自身が十分な理解ができていない(発表がまだない)ため指導ができていない」ことが課題として指摘されていた。本調査の実施時点では新学習指導要領における評価の在り方について十分な資料が提示されていなかったため、この内容については十分扱うことができなかったことが明らかになった。

「授業観察」における特徴語として、「観察」「機会」「授業」「小学校」「難しい」「訪問」「見せる」の7語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で14文あった。第1に、「DVDなどを視聴させるより、実際に**小学校**を**訪問**して**授業**参観をさせたいが、校長にお許しを得るのが**難しい**」「近隣の**小学校**を**訪問**したいが、**授業**時間内の実施が**難しい**ため、なかなか実現しない」のように、授業担当教員は実際に小学校を訪問して外国語の授業を参観させたいと考えているが、実際には難しいという現状が明らかになった。また授業映像に関しても「**授業**の映像については、個人情報保護の観点から、簡単に撮影、**見せる**ことができなくなってしまっている」という課題も挙げられていた。一方で、「ほとんどの学生がボランティアなどで近隣の**小学校**を**訪問**する体験を日常的にしている、そこで外国語活動の**授業**に触れてくることもある」「学校支援ボランティアとして参加する**機会**に、英語の**授業**を参観するよう促している」のように、授業外に外国語の授業を参観する機会がある大学もあることがわかった。また授業観察自体に関して、「**授業観察**の技法や観点に対する理解が十分でないため、印象的な評価、振り返りで終わってしまう」という課題も指摘されていた。

「授業体験」における特徴語として、「時間」「体験」「人数」の3語が抽出された。これらの語を2つ以上

含む文は全部で4文あり、全てが時間の確保が難しいという課題に関するものであった（例えば「体験授業の時間数の確保が課題」「授業体験のあとに説明したり考える時間をもちたいので、思っている以上に時間がかかる」）。

「模擬授業」における特徴語として、「学生」「クラス」「グループ」「時間」「十分」「授業」「人数」「模擬」の8語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で21文あった。受講生の人数に対して模擬授業に割くことのできる時間が少ないことが課題であり、効果的な模擬授業を行うためにはクラスサイズを小さくする必要があることがわかった（「講義時間の関係で模擬授業ばかりをさせるわけにはいかない」「現在の学生数と時間数では限界がある」）。具体的には「1クラスの人数を25人程度までにすると、模擬授業や体験授業を充実させることができる」という意見があった。また大人数クラスでの課題として、「学生が1人で模擬授業をする時間がとれない」「時間が足りずグループでの立案・実施にせざるを得ないため、実際に授業を体験することのない学生がどうしても生まれてしまう」「十分なフィードバックの時間が取れない」などが挙げられていた。また「学生達も模擬授業が一番勉強になると言っている通り、講義で学習したことを実際に行ってみることで理解も深まり、問題点も浮き彫りになるので、講座数を増やしてなんとかひとクラスの人数を制限して欲しい」という声もあった。

「授業実践に必要な英語力」における特徴語として、「英語」「限る」「書く」「学生」「向上」「特に」「必要」の7語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で9文あり、このうち多くの回答で授業内の取り組みで学生の英語力を向上させることの困難さが指摘されていた（「4技能を高める時間がなく、英語が苦手な学生へのケアができていない」「授業中にペアなどで練習させたとしても、大人数のため1人ひとりの把握は難しく、さらに、不安定な英語でのやり取りとなるため学生の英語力の向上につながっていきにくい」）。技能別では読むこと、書くことを授業内で扱うことの難しさが指摘されていた（「授業内でも「聞くこと」、「話すこと」については実践しやすいが、学生自身の「読むこと」、「書くこと」の向上のための取り組みがあまりできていない」「書くことの指導で、学生に授業で使えるようなスリー・ヒント・クイズを宿題として作成させたが、その英語の添削にとっても時間がかかるので、学生に課題として「書くこと」を与えるのに躊躇する」）。また、「特に、音声については全員がすぐに上達するものではないため、継続的指導が必要だと感じる」という意見もあった。

「英語に関する背景的な知識」における特徴語として、「教える」「音声」「実際」「専門」「知識」「内容」「身」「理解」の8語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で10文あった。まず、各学習項目が指し示す範囲が広い、または具体的にどのような内容を扱うべきかが判然としないという意見があった（「『小学校』教員に焦点をしばって授業しているが、教える側としてはその内容をある程度の深さまできちんと理解しておきたい」「音声指導に関する知識は、多く、絞り込むことが困難である上に、身につけるには、時間がかかる」「異文化理解で指導すべき具体的な内容が知りたい」など）。また「知識をもっている、実際の授業の中で活かすことができるかどうかは別問題なので、授業観察や模擬授業で体験した際に、再度押さえておく必要があります」「『1度教えたから』で終わらずに、体験を通して体で理解させたいのですが、学生の英語力が低いこともあり、時間的に厳しいです」といったように、小学校の授業の中で実際に使えるようになるためには、知識として扱うだけでなく授業体験などと関連させて扱う必要があること、またその困難さが指摘されていた。

Q6は授業担当教員が各学習内容を指導する際に講じている工夫、及び各学習形態を扱う回数や実施方法、内容についての自由記述設問であった。学習内容については、各内容に特徴的な工夫を明らかにするため、指導法調査及び専門的事項調査におけるQ6の学習内容に関する全回答（k = 144）を対象として計量テキスト分析を行った。分析対象のデータは235文、総語数6,050語、総異なり語数893語、このう

ち分析に使用されたのは2,430語（異なり語数は681）であった。全データ中で最も多く出現した語は「授業」（94回）であり、次いで「指導」（74回）、「英語」（46回）の順で頻度が多かった。出現頻度が10以上の語は計41語、5以上の語は100語であった（表7）。

表7 各学習内容を扱う際の工夫（Q6）における頻出語（頻度5以上）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	授業	94	22	要領	12	42	特に	9	64	理論	6
2	指導	74		話す	12	52	レベル	8	77	We	5
3	英語	46	28	グループ	11		意識	8		テキスト	5
4	学生	43		経験	11		解説	8		レポート	5
5	実際	35		計画	11		活用	8		歌	5
6	行う	29		使う	11		実施	8		回	5
	模擬	29		習得	11		実践	8		苦手	5
8	学習	28		読む	11	58	教科書	7		研究	5
9	活動	24		聞く	11		工夫	7		語りかける	5
10	具体	20	35	音声	10		作成	7		語彙	5
	小学校	20		視聴	10		児童	7		講師	5
12	教材	17		示す	10		単元	7		参加	5
	理解	17		実演	10		文字	7		資料	5
	例	17		書く	10	64	Let	6		自分	5
	練習	17		紹介	10		イングリッシュ	6		場面	5
16	言語	16		説明	10		クラス	6		触れる	5
17	扱う	15	42	インプット	9		デジタル	6		振り返る	5
	見せる	15		ビデオ	9		ペア	6		設ける	5
	時間	15		映像	9		ルーム	6		全て	5
20	内容	14		学ぶ	9		課題	6		中学校	5
	必要	14		機会	9		教える	6		通す	5
22	絵本	12		教育	9		教師	6		表現	5
	考える	12		教員	9		項目	6		文	5
	使用	12		取り上げる	9		発音	6		毎回	5
	知識	12		多い	9		部分	6		用いる	5

頻度5以上の100語を用いて、各語と学習内容との共起ネットワークを描画した（図2）。共起ネットワークにおいて、各学習内容と直接線で結ばれているのがその学習内容の課題において特徴的な語である。

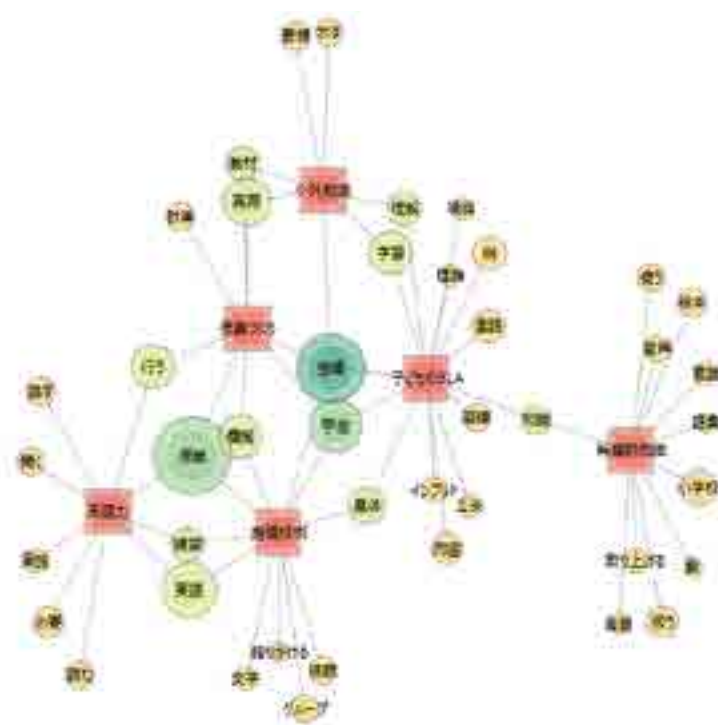


図2 各学習内容を扱う際の工夫 (Q6) の共起ネットワーク

※小外知識…小学校外国語教育に関する基本的な知識・理解，子どものSLA…子供の第二言語習得についての知識とその活用，英語力…授業実践に必要な英語力，背景的知識…英語に関する背景的知識。描画はJaccard距離に基づく。

「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」における特徴語として、「学習」「教材」「実際」「指導」「示す」「要領」「理解」の7語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で19文あった。(1)「学習指導要領」に関しては、「**学習指導要領**の要点を取り上げ，第二言語習得理論や外国語教育の先行研究などを関連づけながら説明をしている」「**実際の指導**を見せる時にその都度これは**学習指導要領**のどれに当てはまるかなどを示唆することがある」「**学習指導要領**で示された資質・能力や領域ごとに設定する目標について**理解**し，後のビデオ観察につながるようにしている」のように，単なる文言の解説や暗記にとどまることなく，実際の指導や指導に関わる先行研究などと関連させて扱うという工夫が挙げられていた。同様に，(2)「主教材」についても実際の指導における主教材の活用という視点での工夫が挙げられていた（「**実際の授業ビデオ**を見せて，**指導者**の動き，児童の動き，それぞれの特徴に気づけるよう工夫している」「グループ毎に単元を選ばせて45分の**指導案**を作成し，模擬授業を行わせ，全体で討議して振り返りを行う中で，**教材**の趣旨，構成，特徴などについても**理解**を深めるように**指導**している」「**実地講師**に依頼し，**実際の活用例**について示してもらっている」）。また，*Let's Try!* や *We Can!* のデジタル教材を学生が実際に操作する機会を設けている例もあった。(3)「小・中・高等学校の連携と小学校の役割」については，小学校と中学校での外国語教育の違いに焦点を当てること（「中高の英語と小学校が特に異なる部分を中心に，**実際の授業映像**や活動例を**示**しながら扱っている」「中学校から英語を始めた学生がほとんどで小学校ではどのようなことをどこまでやってから中学校へ橋渡しをするのかを**実際に**体験させながら**理解**させている」）や，中学校の学習指導要領についても扱う例が挙げられていた。(4)「児童や学校の多様性への対応」についての工夫は見られなかった。

「子どもの第二言語習得についての知識とその活用」における特徴語として、「インプット」「学習」「学生」「具体」「工夫」「言語」「項目」「指導」「習得」「知識」「内容」「理解」「理論」「例」の14語が抽出された。

これらの語を2つ以上含む文は全部で21文あった。まず「学生にまずどのように言語習得をしてきたか考えてもらい、学生個人の学習感覚と実は近いことが、こうした理論としてあることを説明している」「学生自身に具体的に活動を経験してもらって、言語使用を通した言語習得を実感してもらうようにしている」「毎時間、授業開始時に5分間のSmall Talkをし、やり取りを通した言語習得のプロセスを実感できるような工夫している」のように、学生自身の母語習得の経験と比較したり、教師による活動を体験したりすることを通して、子どもの第二言語習得について学生が体験的に理解できるようにする工夫が挙げられていた。また、第二言語習得理論と小学校英語の授業における実践を関連づけて扱う例もあった（「全項目に共通して、理論的な説明と、理論を実践にどう落とし込むかの両方の内容が授業に入るように配慮する」「最低限理解しておいて欲しい理論的側面について扱った後、実際の活動例を示している」）。また特に(4)「コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら、伝え合うこと」に関して、「大学生が知っている英文や単語の知識をそのまま使うのではなく、小学生が理解できるレベルの短い文、フレーズ、単語を身振り手振りを駆使して小学生に合わせていつでもパラフレーズできるように訓練している」という例があった。また全体に関して、学習指導要領の記述と関連づけて扱っている指導例や、学生が模擬授業を行った際に具体的な工夫をフィードバックしている例があった。

「指導技術」における特徴語として、「英語」「学生」「語りかける」「具体」「グループ」「視聴」「授業」「指導」「模擬」「文字」「練習」の11語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で29文あった。まず、「教員が実演して見せ、その後学生がグループで練習をする」「授業映像の視聴のほか、授業者が実際にやって見せる機会を多くとっている」「学生が体験的に学べるよう、ロールプレイや観察した内容、DVDで視聴したことなどを話し合わせたりしながら、授業を行っている」のように、授業映像の視聴や授業担当教員による授業実演を通して学生に指導技術を体験的に身につけさせようとする工夫が多く見られた。また「具体的に教材を使いながら、学生が優しい英語を通して、子どもとやり取りしていく経験を積ませるようにしている」「英語の簡単な言い換えの練習をすることもある」のように、学生自身が実際に英語でのやり取りを体験する中で指導技術を身につけさせようとする工夫もあった。また、学生が模擬授業を行う際にもこれらの指導を行っている例があった（「模擬授業、活動の実践練習を通して繰り返し具体的に練習し指導している」「模擬授業の講評場面を活用して、具体的な児童への投げかけ方を例示している」）。また特に(3)「文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方」について、小学校段階での読むこと、書くことの指導の在り方について時間を割いて具体的に扱っている例があった（「15回中1回を「文字指導」の指導にあて、文字指導＝書くことではないこと、どのように文字と出合わせ、徐々に読めるようにしていくか、ということをも具体例を添えて指導している」）。

「授業づくり」における特徴語として、「行う」「学生」「教材」「計画」「実際」「指導」「授業」「模擬」の8語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で31文あった。まず、(1)「題材の選定、教材研究」と(2)「学習到達目標、指導計画」について、模擬授業の計画と合わせて実施している例が多数見られた（「実際に学生が活動を考えて実施するマイクロティーチングの機会を設けている」「1時間の授業づくりに関しては、一通り解説を行ってから、学生自ら授業をデザインするという課題を与えている」）。また(3)「ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方」についても同様に、模擬授業の場面などで学生にチーム・ティーチングを体験させている例があった（「実際に2人1組になって、担任役とALT役になってもらい、どのように授業を進めるかを考える機会を与えることで、実際に経験してもらう」「模擬授業はチーム・ティーチング形式を取り、それぞれ役割分担をしてもらっている」）。(4)「ICT等の活用の仕方」については、デジタル教材を学生に示したり、模擬授業で実際に活用させたりしている例があった（「電子黒板でデジタル教材を提示して、学生にも使わせている」）。(5)「学習状況の評価」に

については、「授業のねらいを具体的にすることが**指導**と評価の一体化と言語活動の充実につながることをバックワードデザインの観点から説明している」という工夫が挙げられていた。

「授業実践に必要な英語力」における特徴語として、「英語」「行く」「聞く」「実施」「授業」「話す」「必要」「読む」「練習」の9語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で15文あった。まず、毎回の授業で学生の英語力向上のための取り組みを行っている例があった（「毎回の**授業**で、日常の出来事について**話し**、日記を書く」「**授業**の最初に**英語活動**として、spot the differenceを**行い**、information gapがある活動**を行い**、**英語**を使い必然性と小学校**英語**に必要な**英語表現**などを教えている」）。また「TOEICスコアを科目の評価の20%とし、**授業**内でリスニングパートの学修方法について演習を行っている」という例もあった。個別の技能の向上のための工夫としては、「**話す**ことでは、**模擬授業**でSmall Talkや、**英語**によるゲームの説明に積極的に取り組ませるようにしている」「どのように音を出すのか、口の形なども含めた音声指導が**必要**であり、**授業**では毎回少しずつ扱って音訓練をしている」「クラスルームイングリッシュをもとに、ペアでのやり取りや、日本語を**英語**にして書く**練習**、テストをしている」という例があった。一方で、「各授業回でメインで扱う英単語や英文は事前チェックをするなど、指導に**必要**な準備は何かを伝えている（**必要**な**英語力**は1、2年で簡単に上達するものではないため、どんな準備をしたらいいのか、今後どのようなことができるようになるよいか、ということを取り上げている）」という指導例も見られた。

「英語に関する背景的な知識」における特徴語として、「扱う」「意識」「歌」「絵本」「音声」「語彙」「小学校」「知識」「使う」「取り上げる」「発音」の11語が抽出された。これらの語を2つ以上含む文は全部で17文あった。まず(1)「英語に関する基本的な知識」について、学習指導要領などと組み合わせ、小学校で実際に扱われている内容に焦点を当てて扱うという工夫が見られた（「具体的に、各学年の目次とその言語材料を確認しながら、**知識**（音声・**語彙**・文構造・文法・正書法など）を指導している」「学習指導要領について取り扱う際に、併せて**音声**や**語彙知識**について触れ、学生が興味・関心をもって自らの**知識**を高めようとするきっかけを与えている」）。また(3)「児童文学」については絵本や歌、マザーグースなどについて、小学校英語の授業での活用と関連させて扱っている例が多かった（「特に**歌**（マザーグースや手遊びがあるもの）を数多く**取り上げている**」「**実地**講師に依頼し、**絵本**とナーサリーライムを中心に**小学校**での授業での**扱い**方の事例を紹介してもらった」「授業で**使用**できる**絵本**の紹介や**絵本**を使った読み聞かせの練習など、実際の授業場面を想定したものも**行っている**」）。

次に、Q6の各学習形態に関する項目について、項目ごとに回答を分類した。

「授業観察」の回数や実施方法・内容に関する回答は全部で28個あった。実施方法は概ね次の3つのカテゴリに分かれた。第1に、授業映像の視聴である。「DVDなどの映像をもとに、討議している」「授業で扱った内容と対応する授業映像を見せる」といった回答があった。また頻度は学期に1回から5回程度であった。第2に、小学校での授業参観である。「学期に1回程度、公立、私立の小学校の授業見学を行っている」「学期に1回附属小学校で授業参観をしている」という回答があった。頻度は全ての回答で学期に1回程度であった。一方で、以前は小学校に授業観察に行っていたが、履修者が増えたことで行くことができなくなったという声もあった。第3に、授業外における小学校での授業参観である。「学期に2回程度、別科目の中で近隣小学校を訪問する」「大学の取り組みとして学期に1回程度、近隣の小学校や附属小学校を訪問し、授業見学をしている」という回答があった。この形態の場合、授業内での小学校訪問よりも多くの授業を観察できる一方で、場合によっては外国語の授業を参観できない場合もあることが指摘されていた。

「授業体験」の回数や実施方法・内容に関する回答は全部で26個あった。ほとんどすべての回答で授業

担当教員が学生を児童に見立てた授業実演を行っている一方で、「実施していない」「授業ビデオを見せて、ディスカッションを行う」という回答もあった。頻度は様々で、少ないもので学期に1回、多いものでは毎回の授業で行っているという回答が複数あった。また、「児童役として参加するだけでは面白かったで終わってしまうので、学生にも必ず指導者役も体験してもらうようにしている」「具体的な指導技術について体験が必要な場合は、学生を児童役にして担当教員がやってみせるよりは、学生自身が指導者の役割を担当できるような活動にしている」といったように、学生が教師の実演に参加するだけではなく模擬授業と組み合わせて実施している例もあった。

「模擬授業」の回数や実施方法・内容に関する回答は全部で30個あった。実施形態は多様であり、学生1人ひとりが模擬授業を行う例とグループで模擬授業を行う例が概ね半数程度ずつであった。模擬授業の長さや回数も多岐にわたり、長さとお回数を掛け合わせると、最も少ない例で10分間（5分×2回）、長い例で45分間（15分+30分）程度であり、最も多いのは15分から20分程度であった。また、グループで実施している場合は1グループあたりの授業時間が長い傾向が見られた。このように、模擬授業の形態や時間はクラスサイズに大きく左右される部分であると考えられる。大人数のクラスで模擬授業を行う際の工夫として、学生をペアにしてHRTとALTのティーム・ティーチングによる模擬授業を行うこと、1活動単位の模擬授業（マイクロ・ティーチング）は全学生が実施し、45分の模擬授業はグループで行うこと、5回分の授業を集中講義として模擬授業を行うことなどが挙げられていた。45分間の指導案を作成した上でその一部（15分間程度）の模擬授業を行っている例も複数あった。また模擬授業後にディスカッションや振り返りを行っている例が多く見られた。この点の工夫として、映像を撮影してインターネット上にアップロードすることで学生が自身の授業を見直すことができるようにすること、小学校での指導経験のある実地講師に参観してもらってコメントをもらうこと、クリッカーを用いてリアルタイムに評価できるようにすることなどが挙げられていた。

Q5及びQ6の主な結果を、学習内容ごとに表8にまとめる。

表8 各学習内容を扱う際の課題と工夫

学習内容	扱う際の課題 (Q5)	扱う上での工夫 (Q6) ^a
小学校外国語教育についての基本的な知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・多岐にわたる学習内容に対して割くことのできる時間数が不足している ・講義のみで学生に理解を求めることが難しい ・担当教員が専門的な知見を持っていない 	<ul style="list-style-type: none"> (1)「学習指導要領」 ・実際の指導や指導に関わる先行研究等と関連させて扱う (2)「主教材」 ・実際の指導における教材の活用に焦点を当てる (3)「小・中・高等学校の連携と小学校の役割」 ・小学校と中学校での外国語教育の違いに焦点を当てる
子どもの第二言語習得についての知識とその活用	<ul style="list-style-type: none"> ・学生のレディネスが整っていない ・学生自身が経験してきた英語学習方略からの脱却が難しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生自身の母語習得の経験と比較する ・教師による活動の体験や学生の模擬授業と組み合わせて扱う ・学習指導要領と組み合わせて扱う
指導技術	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の英語力が不足している ・他の科目や科目外の学習を合わせて体系的に学生の英語力を向上させる取り組みが必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業映像の視聴や授業担当教員による授業実演を通して体験的に身につけさせる ・学生自身が英語でのやり取りを体験することを通して身につけさせる ・学生の模擬授業と組み合わせて扱う
授業づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画の内容まで扱うことができない ・指導案の作成に時間がかかる ・評価について十分に扱うことができない 	<ul style="list-style-type: none"> (1)「題材の選定、教材研究」 (2)「学習到達目標、指導計画」 ・模擬授業の計画と組み合わせて扱う (3)「ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方」 ・模擬授業をチーム・ティーチングで行う (4)「ICT等の活用の仕方」 ・デジタル教材を用いて模擬授業を行う
授業実践に必要な英語力	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内の取り組みで学生の英語力を向上させることは困難 ・読むこと、書くことを授業内で扱いつらい ・音声面については継続的な指導が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業で学生の英語力向上のための取り組みを行う ・資格検定試験のための学習を促す ・授業を行う準備段階で必要なことを学生に伝える
英語に関する背景的な知識	<ul style="list-style-type: none"> ・各学習項目が指し示す範囲が広く、具体的にどのような内容を扱うべきかが判然としない ・知識を小学校の授業の中で実際に使えるようにすることは困難 	<ul style="list-style-type: none"> (1)「英語に関する基本的な知識」 ・学習指導要領などと組み合わせて扱う ・小学校で実際に扱われている内容に焦点を当てて扱う (3)「児童文学」 ・絵本や歌、マザーグースなどについて、小学校英語の授業での活用と関連させて扱う
授業観察	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に小学校を訪問して外国語の授業を参観させるのは難しい ・授業映像の撮影や活用も制限される場合がある ・授業観察の技法や観点に関する学生の理解が不十分 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業映像の視聴を行う ・授業内で小学校での授業参観を行う ・授業外で小学校の授業参観を行う
授業体験	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の確保が難しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生を児童に見立てて授業担当教員が授業を行う ・教師の実演後に学生も教師役を行う

模擬授業	<ul style="list-style-type: none"> ・大人数クラスの場合十分な時間を割くことができない ・グループで実施すると実際に授業を体験しない学生が生まれてしまう ・十分なフィードバックの時間がとれない 	<p><実施形態に関して></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生がペアになりティーム・ティーチングを行う ・1活動単位のマイクロ・ティーチングは全員、45分の模擬授業はグループで行う <p><振り返りにに関して></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業映像をインターネット上で視聴できるようにする ・小学校での指導経験のある実地講師にコメントをもらう ・クリッカーを用いてリアルタイムに評価できるようにする
------	--	---

注：^a 授業観察，授業体験，模擬授業については，回数や実施方法・内容の主な記述をまとめた。

Q7はコアカリキュラム全体に対するコメントを求める自由記述式設問であった。計7件（指導法調査5件，専門的事項調査2件）の回答があり，時間数に対して学習内容が多すぎるといった意見が多く回答者から寄せられた。全ての回答を表9に示す。

表9 コアカリキュラムに対するコメント (Q7)

調査	回答
指導法調査	<ul style="list-style-type: none"> ・コアカリは，そもそもそういった性質のものだと理解していますが，開設科目の中で満たさなければならない項目・内容が細かすぎて，柔軟性を欠いているように感じています。このような調査をされる中で，どの項目が必須なのか，あるいは，どの項目は大学の実情に合わせて対応しても良いのかなど，柔軟でかつ質の高い授業づくりが可能となるような枠組みづくりを検討していただけるとありがたいです。一方で，本学では，初等教員養成課程の学生が全員履修する外国語活動・外国語科の指導法，専門的内容の科目は最低限度の開設数なので，実習や現場に出たときに必要な力量を十分につけることができていないのが実情です。また，1クラスの履修者数が大きいということも効果的な授業ができていない原因です。大学の教員配置と密接に関係しますが，今後は，小学校の外国語担当の専科教員の養成も必要になってくると考えられますので，教員配置も含め，教職課程が充実するような制度作りが必要かと思えます。 ・学習項目はどれも大事なことではあるが，扱う量がやはり多い。中高の教員免許では授業が複数あってできることであるが，小学校では半期の授業2種となっており非常に厳しい。(英語教科は新しい言語習得のため，教科教育法や英語の授業は他教科〔算数や社会〕と比べても指導時間が必要だと感じる) ・内容が盛りだくさんなので，やはり一科目としてではなく，一定のプログラム（授業群）として，実施出来ればよいと思います。 ・私が関わっている小免取得希望者は外国語が苦手と思っている学生が多いようです。そのためか，自分の苦手意識が積極的な発想やワクワクさせる発想を乏しくさせている様子があります。 ・今年度は「小学校外国語活動指導法」という似た授業を通して，来年度の開講に向けて準備をしているが，コアカリキュラムの学習項目の全てを入れ込むのは，現段階ではなかなか難しいと感じている。また，コアカリキュラムの意図を正確に解釈することも容易ではないことがあるので，もう少し情報や資料があったらよいと思う。
専門的事項調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ここでテーマにしている「外国語に関する専門的事項」に対応する科目は令和2年度入学生から受講する科目であり，現在のところ当該科目は開講されていない。 ・限られた時間内で実施するものなので，「小学校に教えるための英語運用力」，「授業に直結する英語運用練習」などといった観点からもっと絞り込みがなされたらよいと思います。

2.6 まとめ

本節では大学教員を対象に実施した3つの調査の結果をまとめた。調査の主な目的は、(1) 外国語の指導法や外国語に関する専門的事項の科目を実施する上での課題を明らかにし、また課題を解決するための工夫についての情報を収集すること、(2) 学生の英語力や外国語指導力を向上させるための、上記の教科の枠を超えた取り組みについての情報を収集すること、の2点であった。(1)に関しては、課題と感じていることは多くの大学教員で共通していることが明らかになった。特に、コアカリキュラムの内容に対する指導時間の不足と、コアカリキュラムの内容を扱うための学生の英語力の不足について多くの意見があった。またこのような課題に対して、各大学教員がそれぞれに指導上の工夫を行っていることもわかった。(2)に関しては、学生の英語力向上のための取り組みについては、指導法及び専門的事項以外の科目や授業外での取り組みを行っている大学がある程度見られる一方で、教育実習や教職実践演習をはじめとする他の教職科目との連携を行っている大学はわずかであることが明らかになった。

3. 大学教員対象の聞き取り調査

3.1 調査の概要

本節では、モデルプログラム形成のための参考資料として、初等外国語（英語）指導法について収集した具体的事例についてまとめる。

なお2019年夏～2020年夏に行われた本調査においては、コアカリキュラムに基づいて課程認定された初等外国語の指導法の科目がいまだ開設されていない大学も多く、調査対象は、2020年度以降に開設された科目に加え、以前より先行的に試行されていた授業科目の事例も含めて、資料として供することとした。なお今回は、教科専門科目の事例は本調査の対象とせず、ニーズがより高いと判断される教科指導法にかかわる具体的な事例を調査した。

本調査では、事例収集のためにアンケートと聞き取り調査を行った。2度にわたって調査を行い、一次調査は2019年7月（7名）、二次調査は、2020年7～8月（6名）に行った。以下においては、両者の結果を統合し、コアカリキュラムに基づく科目実施上の課題を解決するうえで有用な事例と思われるものを整理して報告する。

本調査においては、まずアンケートにより基本的事項を回答いただき、さらに詳細情報を得るために、聞き取り調査も行った。調査項目は、網羅的にコアカリキュラムの項目すべてを盛り込まず、中等英語科教育法のチームと歩調を合わせ、教科教育法を实践するうえで特に課題となりそうなトピックに絞り、事例を収集した。

3.2 調査からの事例報告

<1>大人数のクラスでの指導方法

クラスサイズは40～50名程度のクラスを実施している大学もあったが、ある大学では170人、130人程度の学生が受講しているケースもみられた。当該大学で、そのような大人数クラスの厳しい状況において、実践的能力をつけるために、2つの方法で授業展開を工夫した事例がみられた。1つの工夫は、1つの会場で、班で模擬授業をする際に、できるだけ「時間節約」をすることである。できるかぎり多くの学生が模擬授業ができるよう、授業後の討議を省き、学生に生徒役を行った学生からのコメント・質問をWeb上に提出させ、授業実施した班の学生が後刻コメントを読むという方法を工夫されている。もう1つの工夫は、クラスを2つに分けて並行して模擬授業を行い、学生同士でコメントしあい、教員は2会場を巡回し、コメントをWeb上にアップロードし学生が読むという方法であった。

このような実践の演習を継続する中で、当該教員は「模擬授業を繰り返す中で、授業を見る視点や、単元の流れ、評価場面の適切さなど学生の視点が変わったり、深まったりするため、議論や指導のポイントは変えていった」と述べ、そうしたたゆまぬ工夫と努力が、着実に学生の授業を観る目が育ってゆくことにつながっていることが伺われた。

講義型の授業では、大人数のクラスでも運営できるが、実践的能力をつけるための指導法科目にとって、学生が実際に教える実践体験の量をどのように保障するかは、きわめて重要な課題である。厳しい状況の中で、少しでも実践的能力をつけようと努力される教員の工夫から学ぶことは多い。

<2>学習指導案の作成

指導案作成の工夫は、実際の指導案を提示し、限られた部分の指導案作成から始めたり、NHKの英語番組を組み込んだ指導案を作るという課題設定にする事例がみられた。これは、ゼロから作るのではな

く、トピックや言語材料とコアの活動が既にあるので作りやすくなる。また、実際の授業を視聴してそれに対する指導案の書き方を示してから、各自指導案を作り、その部分を模擬授業でやってみるという事例もあった。授業をしたことがない学生は指導案から授業のイメージを想起することが難しいと思われるが、逆に授業が指導案に収まる経験をすることで授業と指導案がつながってくるのだろう。自分で作った指導案を模擬授業でやってみることで自分の指導案の検証ができる。

さらに個人ではなくグループで作成させる事例が多かったが、グループで取り組むことで授業のイメージをより膨らませることができる。また単元全体の指導案をグループで作成させ、模擬授業をさせたという事例もあった。これはお互いのつながりを意識して各自の指導案を作るので、より難易度は上がるが、お互いに関連があるので、模擬授業でもより深い学び合いができると思われる。フィードバックでは、提出された指導案にコメントをつけて返却し、オンラインで各グループに10～15分のコメント時間を設けたという事例もあった。また、全体へのフィードバック文書を作成し、その中でよい授業案を取り上げ解説したという事例があった。

<3> 模擬授業の形態・工夫

模擬授業の形態は、学び合いを目的としたり、あるいは大人数のためにやむなく、グループで15～20分を3～4回とした事例と、個人で5分程度、1～2回という事例に分かれた。

フィードバックの方法は、教員のみから学生相互評価、動画記録、評価シート、ループリック利用、現場教師の招聘までいろいろな形がみられた。模擬授業では子ども役を設けて子どもの立場からの発話を考え、授業者はその対応をするという指示を入れることで、模擬授業がより現実的になり相互に深い学びになる。対面授業で模擬授業をする際は学生に2色の付箋紙を数枚ずつ渡し、良かった点と改善の提案を記入してもらい、活動ごとに分けて台紙に貼りそれに基づいて振り返り、ディスカッションを行うという丁寧な模擬授業研究を行っているという事例もあった。しかし、今年はオンライン授業のためにグループ活動ができなかったり、録画での振り返りができなかったり、ディスカッションができなかったりなどのさまざま制約があったようである。

なお、上記のように大学の授業内での模擬授業を行う例が多いが、実際に小学校に出向いて学生が授業を行う事例も見られた。S大学では、「児童英語指導法ワークショップ」という科目において、出張授業型の実習を取り入れている。またK大学やH大学でも、前期において小学校での授業を毎週観察し、後期において小学校に実際に学生が授業を行っている。

<4> 模擬授業の評価観点

さて、模擬授業においては、単に実践させるだけではなく、授業の質を高める視点を学生に持たせることも重要であり、評価規準の工夫や評価シートの工夫が多く見られた。以下に具体的な評価観点を挙げる。また節の末尾に、資料1・2に具体的な評価シートの例を示すので、参照いただきたい。

◇評価の観点例1

児童の興味関心を起こす工夫／児童が聞いてわかるような語り掛けや教具の工夫／ターゲット表現を繰り返し聞かせる工夫／適切なりキャスト／英語の正確さ／英語の語りの自然さ／インプットからアウトプットへの無理のない流れ／授業のねらいと活動の選択の合致／時間配分 など

◇評価の観点例2

授業デザイン／児童のひきつけ方／インプットの与え方／指示のわかりやすさ／インタラクションの進め方／発音／教材とその使い方 など

◇評価の観点例3

単元目標に沿って活動が展開されているか／個々の活動は目標達成のため適正か／教師の指示は簡潔でわかりやすいか／児童の興味・関心に沿った内容や活動の進め方ができているか など

◇評価の観点例4

気持ちを込めて子どもに語り掛けられたか（発音，リズム，イントネーション，情感，声高さ）／わかりやすい英語表現だったか（文法，語彙）／十分なインプットが与えられているか／子どもたちの不完全な発話を受け取って，しっかりと正確な文にして返せるか（リキャスト）／内容を理解させる工夫をしているか（視覚補助，ジェスチャー，表情） など

<5> 模擬授業における「学生が克服すべき課題」

模擬授業を通して出てきた「学生が克服すべき課題」として挙げられたのは，小学校外国語の授業が「遊び」ではないという意識改革や，中学以降の授業のイメージで表現を覚えさせ，文字を見せ読ませるのではなく，語りかけて自然なやり取りを展開すること，言語活動を通して外国語を身につけることを実感させること，文字がない言葉の世界をイメージすること，教え込むのではなく，子どもが気づきやすいように授業をすること，英語の正確さ（特に単複，冠詞，動詞の一致）などであった。

とりわけ指導法科目において，指導方法を教える中で痛感させられるのは，前提となる学生の「英語力の不十分さ」である。そのために教員ができることとして，本調査では，以下の2点について事例が見られた。

- ① 個別の専門的事項・指導法科目あるいは教養科目などで英語力の基準を決めること
- ② 指導法科目での模擬授業などで指導しながら英語力を高める工夫

前者①の事例としては，H大学において，1年前期教養英語ⅠにおいてTOEIC対策授業を行い，終了時目標点数を450点以上とし，1年後期教養英語Ⅱ終了時の目標点数を480点以上としている。それらの目標が達成できない場合，単位が付与されなかったり，補いとしてeラーニング課題を課すことになっている。同様に，2年前期「初等英語」の終了時の目標点数を490点以上とし，2年後期の「初等英語科教育法」終了時においては，目標点数530点以上が基準となっている。

②の授業内における模擬授業など，「実践演習をさせる中で」英語力を伸ばす工夫の事例として，例えば，以下のようなものが見られた。

- ・ 指導法の授業の中で，自己紹介から始め，学生が英語を話す機会を多くする。
- ・ 教員がモデルを見せ，児童の反応を含めた事例を紹介する。
- ・ 指導案に教師の話す英語を書くように指示し添削し，注意すべき点は全体的にコメントし，共有する。
- ・ 英語のリズムに親しめるように歌やチャンツを毎回紹介する。
- ・ 教員がモデルを示した後，グループで指導者役，児童役を分けて活動体験させる。

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

- ・教室英語を授業の中で練習させる。
- ・模擬授業が始まる前には、Classroom English / Small Talkの例の一覧表を渡し、実際に学生同士でやり取りをさせてから模擬授業を行うようにしている。
- ・授業で扱う英語表現を学生が正しく運用して自己表現できるようにする。
- ・タスク中心の演習（information gap, dictogloss など）
- ・授業で必要となりそうな疑問文（発問）の演習
- ・新教材の語彙リスト（研修ガイドブック）による課題
- ・マザーグースを練習し、録音して提出する課題
- ・模擬授業中に学生が使った表現で発音の修正が必要な場合は、その都度取り上げる。

なお、上記のような指導法科目における英語力の向上に関連して、コアカリキュラムの項目でもある「児童の発話の引き出し方、児童とのやり取り」の指導での工夫として、以下のような事例も見られた。

- ・授業の映像の中で該当する場面を提示する。
- ・意味のあるやり取り通して児童が自分にとって「本当のこと」を発話できるようにするために、児童の発話を引き出す教師の発問を学生に考えさせる。
- ・指導者役と児童役に分かれて、児童の不完全な発話に対する応じ方を繰り返し練習する。
- ・模擬授業中に学生が使った表現で発音の修正が必要な場合はその都度取り上げる。

なお指導法の授業の中で英語力向上を目指す視点からは、以下のような模擬授業での英語使用の徹底も、きわめて重要な工夫である。S大学の担当教員は、以下のように述べており、示唆的である。

「英語運用能力テストのスコアではなく、『授業を実施するための英語力』を目標とするという観点に立ち、プログラム科目の『子どもに教えるための英語Ⅱ』は、あえて全部英語で模擬授業を実施することをゴールとする科目設定にしています。」

上記の①のように、一般的な英語力基準を設定して英語力を高める努力ももちろん意義があることであるが、②のように、小学校外国語を指導するにあたっての英語力は、質的に異なる英語運用力が必要とされる。そうした運用力をつけるためには、やはり教室の指導の場面と脈絡に身を置いて、指導者として具体的に英語を使おうとする体験が、おそらく最も真正性が高く、学生にとっても有効な学習法なのではないかと考えられる。

コアカリキュラムにもとづいた教科の指導法においては、教室で実際に教えることを模擬的に体験する中で、「正確な英語」「児童が吸収しやすい英語」「児童と意味のやり取りをするための英語」を身につけさせる努力は、今後とも続ける必要があるであろう。

<6>その他のコアカリキュラム項目についての事例

その他のいくつかのコアカリキュラムの項目の工夫を以下に箇条書きで挙げる。

◇児童や学校の多様性への対応

- ・小学校教育全体として考慮すべき多様性に学生の意識を向けるとともに、外国語学習独自の問題と

して外国語学習歴の違いや帰国性の存在，外国籍・外国にルーツを持つ児童の母語・日本語・英語の関係などの問題にも気づかせ対応を考えるようにした。

- ・配慮を要する児童への対応と，発達段階に応じた指導ということで，低学年・中学年・高学年児童の様子，対応について具体的な活動例などを示しながら解説した。
- ・少人数学級での授業の難しさと楽しさ，学びには個人差があることを解説した。

◇絵本や児童文学の教材を使った指導

- ・単に絵本の読み聞かせをするだけでなく，絵本を使って子どもたちと活発にやり取りを行う方法を実演している。
- ・和書の絵本を使った活動例を示し，絵本を使って子どもとやり取りしながらねらいとする表現を聞かせていくこともできることを示した。
- ・和書の絵本も含めて小学校で扱う英語表現を使ってやり取りできそうな絵本を紹介し，学生にも探させた。
- ・絵本の定義やジャンル，目的に応じた読み方を説明し，それに適した絵本を紹介。絵本リストを配布する。
- ・歌やチャンツは扱うことができたが，絵本や児童文学は遠隔授業のためほとんど扱うことができなかった。
- ・実際に絵本を使ってやって見せ，それをグループに分けた学生にやってもらう。

◇他教科との連携を意識した指導法

- ・社会科を意識して What it this? で地図記号を使った活動を，Where do you want to go? で地図帳を使ったりする活動を，家庭科を意識して，料理の材料を I want potatoes, carrots, onions and pork. などと言って料理名を当てる活動などを紹介している。
- ・簡単な算数，国語の感じを厚あったやり取り，社会や理科の知識を活用して英語の授業内容を膨らませることができることを示すようにした。
- ・他教科に限らず，言葉には内容が必ず含まれていることを伝え，その表現を聞きたくなる，言いたくなる「目的・場面・状況」を考えさせる。単に音声暗記に陥らないようにする。
- ・実際に指導した例を示す。

◇様々な国・地域の生活習慣の相違点や共通点を指導する方法

- ・多様性を受け入れ世界の一員として生きる人材を育てるために，教師自身が世界に目を向けることを意識させた。また，ポリティカル・コレクトネスの視点の重要性を紹介した。
- ・教科書などにどのように示されているか，そこからどのように指導できるか学生と考える。
- ・英語表現の中で，うまく扱う題材として考えさせる。

◇ALT等とのチーム・ティーチング

- ・研修ガイドブックのクリプトや独自に作ったやり取りを使って体験させる。
- ・ALT役と役割分担をし，児童役もおいてやり取りをし，児童の受け答えの手本となるよう練習する。
- ・契約の形態が多様であること，T1はあくまでも教員であること，ALT等と教員の役割分担などについて説明する。

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

- ・具体的な活動のところで、ティーム・ティーチングでのALTと担任の役割について自分の経験なども含めて解説した。

◇小中連携

- ・小学校と中学校の教師が一緒になって研究授業を持つようにしているという事例（経験）を伝えたり、小学生と中学生との外国語の授業での交流の在り方について簡単に解説した。
- ・10年間の英語教育の中で小学校が果たす役割、小学校で音声をしっかり押さえ文字に慣れ親しませること、中学校での文法指導の障害になるような音声を身につけさせてはいけないことを解説した。

◇使用のデジタル教材／映像資料／その他の教材

- ・ *We Can!* 1・2 デジタル版
- ・ コア・カリキュラム「小学校英語実践事例映像」
- ・ えいごリアン
- ・ NHK for school
- ・ mextchannel (YouTube 文科省チャンネル)
- ・ *WORD BOOK* (久埜百合著, ぽーぐなん出版) など

<7> コロナ禍のもとにおける授業の課題や工夫の事例

終わりに、コロナ禍のもとにおける授業の悩みや工夫についても、事例調査の中で声が聞かれた。今後、課題への対応と克服に向けた努力を続ける必要がある。

- ・ 指導方法が限られ一方通行の授業になりがちである。
- ・ 教材も著作権のためやデータ通信量の制限などのため使えないものがある。
- ・ 学生の生の様子が見えない。
- ・ 学生側はカメラオフで一度も会ったことのない学生と授業を進めるのが苦しい。
- ・ 実践的練習やグループディスカッションを円滑に行うことが難しい。
- ・ 通信環境の悪い学生への対応

また具体的な課題解決の方法として、

- ・ オンデマンド授業ビデオを作成する。
- ・ 全員が毎回教室に来るのではなく、各授業回で対面授業に参加する人数を制限して実施する。残りの学生は、自宅で、大学で対面授業を行ったグループの記録動画と教員のコメント動画をWeb上で視聴する。自宅学習の学生はWebにコメントを書き、授業実施グループが読む。

などが挙げられた。

また、デジタル教材活用の指導の際に課題となることとして、

- ・ YouTubeなどの動画を学生が教材として使用する際に適切かどうかの判断
- ・ 検定教科書のデジタル版が入手しづらい（あっても見せる時間が少ない）。
- ・ 学生に見せるだけで1人ひとり触ってみる機会が持てない。

などが挙げられていた。

3.3 まとめ

前節の大学教員対象アンケートでは見えてこない詳細な情報を得るために、本稿では13名の教員に聞き取りを行い、大人数クラスでの指導法、指導案作成、模擬授業の方法や評価観点と模擬授業するにあたって課題となる英語力不足、その他コアカリ項目に関することについて具体的事例を得た。さらに2020年前期の授業を行った後の調査ではコロナ禍における授業についても課題や工夫が出てきた。これらを特殊なこととして片づけるのではなく、ICT活用が進むこれからのこととして取り上げた。

これらの事例を見ていくと、どの教員も限られた時間の中で、クラスサイズや学生の英語力や小学校英語に対する背景の知識や経験知の差などに戸惑いながら、学生の実態に合わせて最大限の指導効果が得られるよう知恵を絞っていることがわかる。

これらの具体的事例をもとに次章のモデルプログラムを作成することにする。

資料1 模擬授業の評価シート例1

T大学

模擬授業

Date (/) Today's instructor() Your name()

What was the lesson topic? Please summarize (どんな内容でしたか? 簡潔にまとめましょう。)

/40

Peer evaluation: 評価しましょう。(別紙: 評価の観点と評価基準を参考にしましょう。)

	Need much improvement	Satisfactory	
1. 授業デザイン	1 — 3 — 5	()
2. 児童のひきつけ方	1 — 3 — 5	()
3. Input の与え方	1 — 3 — 5	()
4. 指示の分かりやすさ	1 — 3 — 5	()
5. Interaction の進め方	1 — 3 — 5	()
6. 発音	1 — 3 — 5	()
7. 教材とその使い方	1 — 3 — 5	()
8. その他 ()	1 — 3 — 5	()

Overall comments (今後の授業に役立つようなコメントをしましょう。)※必ず書こう。

外国語 模擬授業コメントシート【ペンで記入】

この相互評価は成績評価とは関係ありません。授業振り返りと授業改善のための資料です。
 模擬授業の実施週や対象学年によって、授業は大きく変わります。資料や出来栄との比較ではなく、
 観修者全体でよりしっかりと授業づくりを理解するための資料として活用してください。

氏名は授業者が直接、コメントをした人に意図を尋ねたい場合の連絡用として活用します。
 コメントの意味がなくなりますので、名前の記入によって、過度な連絡コメントにならないことを望みます。

コメント記入者の情報	クラス内番号	氏名	
------------	--------	----	--

模擬授業者の情報	日付	順番	グループ番号	
----------	----	----	--------	--

指導案・授業計画						
1	単元計画から前時からの流れ、次時への繋がりが読み取れた。	4	3	2	1	無
2	単元目標は明確だった（この単元で目指すことが具体的に書かれていた）	4	3	2	1	無
3	評価計画は無理のないものになっていた。	4	3	2	1	無
4	本時の目標と本時の学習活動には一貫性があった。	4	3	2	1	無

授業者の発話・表情・英語使用						
5	授業者の声の大きさや話し方は適切だった。	4	3	2	1	無
6	授業者の英語の使用量・使用場面は適切だった。	4	3	2	1	無
7	英語は伝わるように話されていた（Teacher Talk は適切だった）。	4	3	2	1	無

チーム・ティーチング						
8	ALT（役）との役割分担はよく計画されていた。	4	3	2	1	無
9	ALT（役）を適切に活用していた。	4	3	2	1	無

教材・教具・資料						
10	教材や資料は（提示方法・活用方法を含めて）適切だった。	4	3	2	1	無
11	板書は児童の理解を助けるものであった。	4	3	2	1	無

活動（練習活動・習熟活動）						
12	活動は児童全員が理解して、取り組めるものであった（複雑すぎない）。	4	3	2	1	無
13	授業は児童にとって面白い・取り組み甲斐があるものであった。	4	3	2	1	無
14	単調な練習に異色しない工夫が見られた。	4	3	2	1	無
15	コミュニケーション場面では目的・場面・状況の適切な設定があった。	4	3	2	1	無

コメント（項目番号と共にノ項目外も可）

質問（項目番号と共にノ項目外も可）

4. 授業シラバスの分析

4.1 分析対象と分析方法

初等英語教員養成に資する授業として、①外国語の指導法、②外国語に関する専門的事項を取り上げる。これら以外のより専門的な授業を開講している場合もあったが、今回の分析対象からは外している。分析対象としたのは小学校教諭一種免許状の取得が可能な246大学(資料1)のうち、①については82大学・83科目、②については65大学68科目である。調査時(2020年9-10月)は、初等英語教員養成のカリキュラムが移行期にある大学が多かったが、コアカリキュラムの内容が反映されていると考えられる2020年度のカリキュラムを分析対象とした。ただし、2020年度にコロナ感染防止対策として遠隔授業を中心に行っている授業で、明らかに授業内容の変更が見られる場合には分析対象から外している。

公開されているシラバスの目標・概要・授業内容・テキスト・参考資料・担当者などから、A) コアカリキュラムに挙げられている項目が授業全体の中でどのくらいの割合で扱われているか(図4・5)、B) 全体としてどのような傾向があるか(図4・5考察)、C) コアカリキュラム以外の内容(図4・5の「その他」に該当する内容)はどのようなものが扱われているかを概観する。次に、D) 工夫がみられる授業や授業外で行っている取り組みなどの例をみていく。また、これら分析結果は、第2章のモデルプログラム提案のための基礎資料の一部とした。

4.2 外国語の指導法

外国語の指導法の授業は、授業は「初等英語科指導法」「小学校英語教育」「外国語(英語)教育法」といった名称で開講されている。2年生を対象に2単位が配当されている場合が多い。図4は各科目の中で、コアカリキュラムの各項目(図3)にどのくらいの割合で各項目が扱われているかを%で表した平均値をまとめたものである。ただし、1授業に複数の項目が含まれている場合は、各項目が均等に扱われたと仮定して分析した。コアカリキュラムの文言と完全に一致しない授業内容は以下のような方法で分析を行った。

◇「子どもの第二言語習得(について)」とだけ書かれていて、その詳細についてわからない場合は、「子どもの第二言語習得についての知識・理解」の下位項目のうち、「国語教育との連携」を除く5項目に数値を分散して分析した(例:「子どもの第二言語習得」を1授業で扱っている場合は、5項目の各項目に0.2を割りあてた)。ただし、「子どもの第二言語習得と母語習得(の比較)」などと明記されていた場合には、「その他」に分類した。

◇「4技能(5領域)の指導法」とだけ書かれていた場合には、同様に「指導技術」の下位項目の3つに均等に割り当てた(例:「4技能(5領域)の指導法」を1授業で扱っている場合は、各項目に0.3を割り当てた)。

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

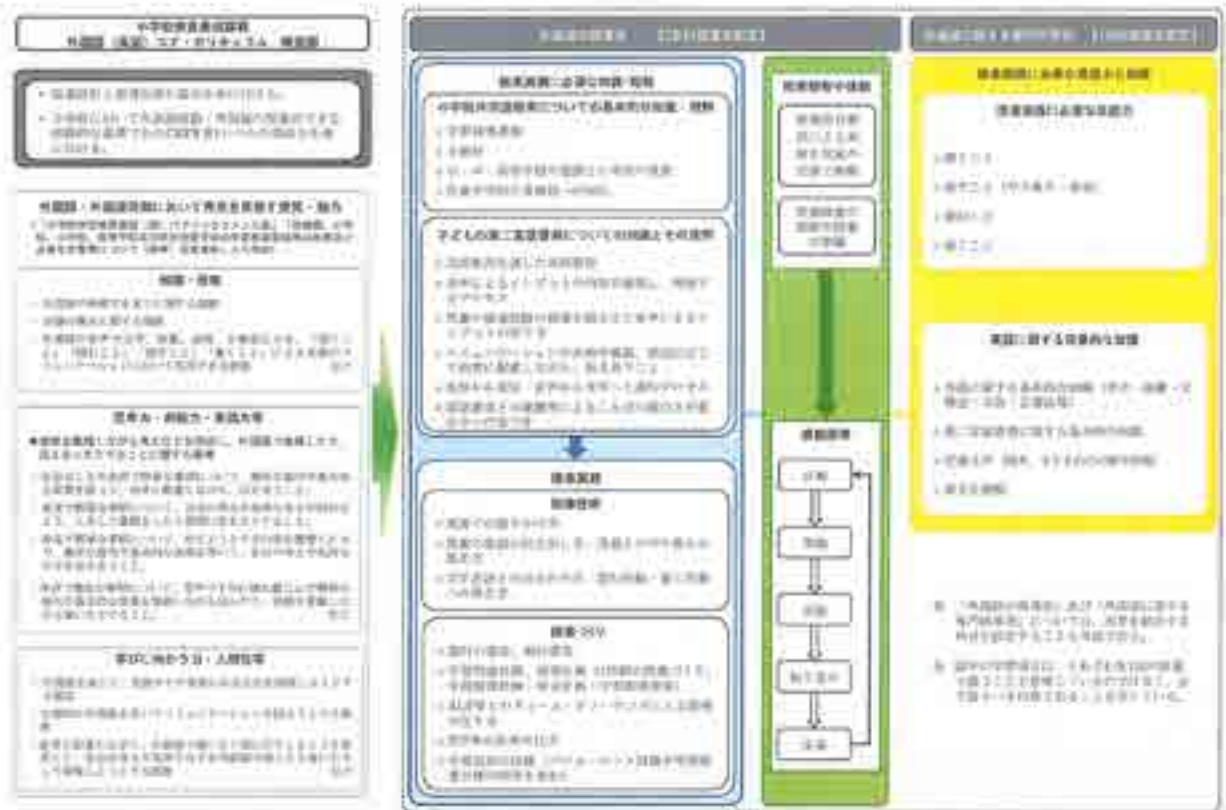


図3 小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム 構造図

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html> より, 2020年9月23日取得

A) コアカリキュラムの各項目が授業の中で扱われている割合

コアカリキュラムの各項目の授業の中で扱われている割合は、図4の通りである。

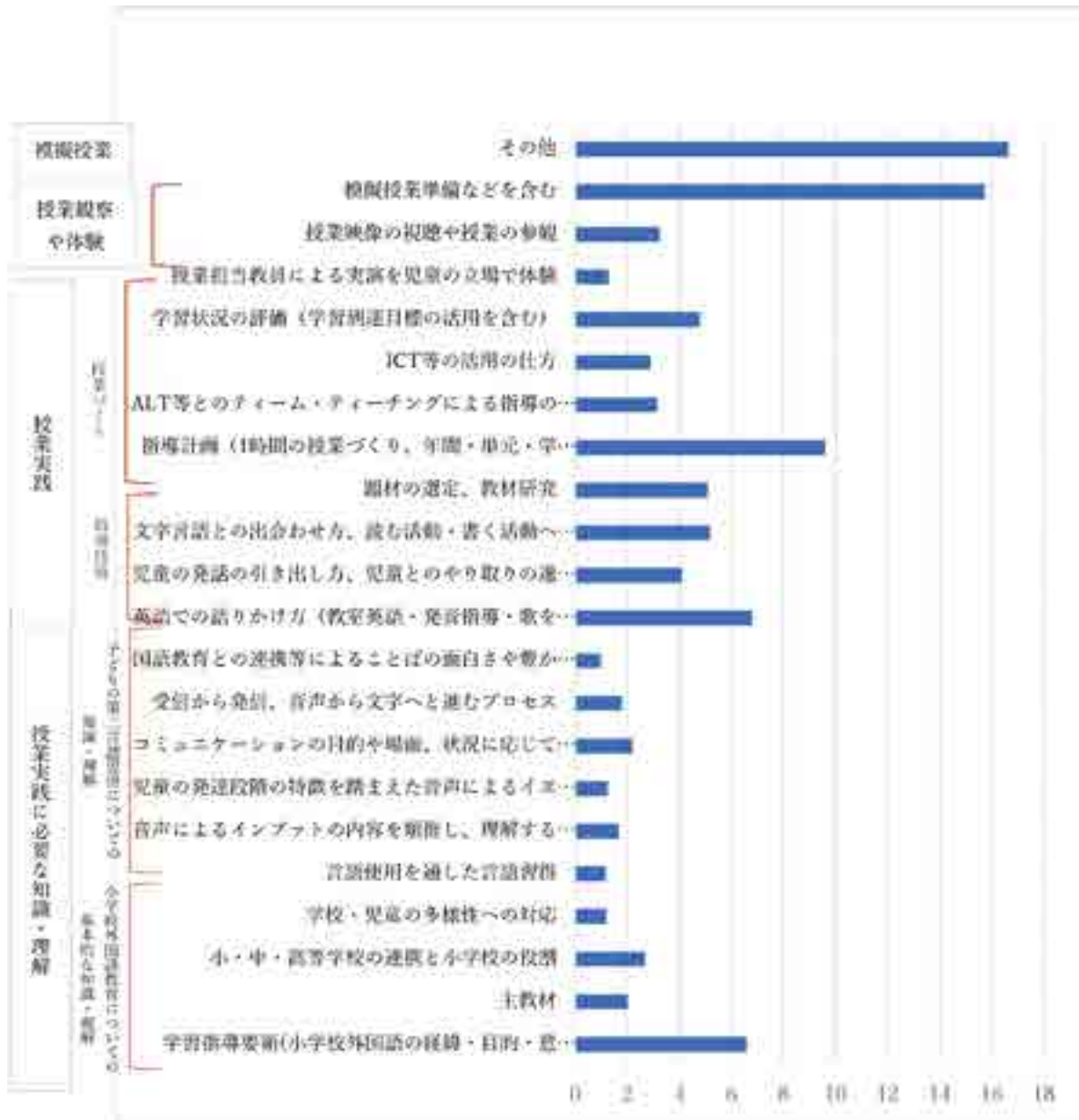


図4 外国語の指導法 シラバス分析結果 *数値は%

B) 全体的な傾向

図4から以下のようなことが示唆される。

- ・「模擬授業」の授業時数が高いことから、実践的な指導力を身につけることが重視され、そのための「指導技術」の習得(特に語りかけ方)、指導計画(特に指導案の作成)に時間を割いている。「担当教員による実演」の配當時数は低いが、学生同士が模擬授業をしあうことで、実践力を身につけさせようという意図がうかがえる。
- ・一方、「子どもの第二言語の習得についての知識・理解」に関する項目は、全体的に配当時間が低い。

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

背景として、これらの項目は「指導技術」の体験を通して理解が深まると考えられ、明示的に知識の理解が必要な項目として、シラバスに明記されない可能性がある。また、②外国語に関する専門的事項でも第二言語習得の基本的な内容を扱うので、そのことが影響しているかもしれない。

- ・「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」の下位項目の「学習指導要領」はその内容（経緯・目的・意義）の詳細も記載されていることが多く、重視して扱われている。主教材については、*Let's Try!*や検定教科書をテキストとして明記している事例も多く、シラバスには学習項目として明記されないものの、「授業実践」を通して理解を深めている可能性は高い。

このように授業実践力の向上が重視されていることから、授業を行う英語力向上のための工夫として、発音練習や「教室英語」を毎授業時間に行うまたは事前事後の課題とする、資格試験を活用して英語力向上を促すなどの事例が散見された。

C) コアカリキュラムに含まれていない内容：「その他」について

「その他」に含まれている内容は、授業概要の説明やテストなども含まれているが、コアカリキュラムに含まれていない項目として、事例が多い順に以下のようなものが見られた。

- ◎特定の指導法（CLIL/PBL/TPR/CBLなど）
- ◎異文化理解・異文化コミュニケーション・国際教育
- ◎指導者の資質や求められている能力
 - ・ゲームや活動について
 - ・他教科連携
 - ・諸外国の小学校外国語教育
 - ・母語獲得と第二言語習得の比較・臨界期仮説・動機づけ
- ◎発表の指導
 - ・主体的な学び

これらの内容から、いくつかの示唆が得られる。「特定の指導法」特にCLILやPBLの有効性を指摘している事例があることから、指導技術としてより具体的な指導法（例：他教科の内容を取り入れた言語活動・プロジェクトの達成を目指した4技能統合型の活動など）を項目立てすることも可能である。次いで多いのが異文化理解や異文化コミュニケーションだが、これは「外国語に関する専門的な事項」の「背景知識」としてではなく、具体的な指導法に言及しているシラバスもあったことから、授業づくりの項目に入れることも可能だろう。3番目に多い指導者の資質や能力については、授業の初めに「求められている英語力・資質」を示して、目標を明確にし動機づけをする目的がうかがえるシラバスも散見された。また、コアカリキュラムには児童へのインプットやアウトプットを促すやり取りの仕方について項目として明記されているが、検定教科書の多くに見られる「発表活動」がコアカリキュラムの項目に入っていないことから、指導技術や授業づくりの中に入れていないシラバスがあった。

D) 指導の工夫

指導の工夫として以下の事例が挙げられる。

- ・模擬授業の際に「授業実践」の下位項目に関連づけたテーマを設定し、授業後の振り返りでテーマに

沿って解説を行う。

- ・各授業を講義と演習で構成する（解説→授業体験またはビデオ視聴→解説など）。
- ・ビデオの視聴を最初の授業で行い、「小学校英語のイメージ」を受講者に持たせる。

これら以外にも、観察実習や実際に小学校で外国語の授業をする機会を（教育実習以外に）授業内外で提供している大学や、「授業コンテスト」といったイベントの形で履修生の意欲を喚起するような工夫も見られた。

以上、分析結果を見てきたが、この分析方法の課題は主に2つある。

◇履修人数を把握することができず、どのような形式で模擬授業や授業体験を行っているのかわからない。履修人数によっては、実際に模擬授業をする学生がクラスの一部かもしれないという可能性や、指導案は1単元・1授業分作成するが、模擬授業はその一部だけ行うということもあり得る。もう少し詳細な情報が必要だ。

◇「模擬授業」や「授業観察や体験」の中で、「指導技術」「授業づくり」の下位項目が扱われていることが予想されるが、その詳細まではシラバスに記載されていない場合が多いため、数値としてあらわれてこない。模擬授業が授業全体の16%弱（15授業数のうちの2.4授業分）扱われていることを考えると、その中で総合的に「授業実践」の下位項目が扱われていることが予想できる。これについても、模擬授業の内容に関する詳細な情報が必要だ。

4.3 外国語に関する専門的事項

この分析も同様に、公開されているシラバスの目標・概要・授業内容・テキスト・参考資料・担当者などから、A) コアカリキュラムに挙げられている項目が授業全体の中でどのくらいの割合で扱われているか（図5）、B) 全体としてどのような傾向があるか（図5の考察）、C) コアカリキュラム以外の内容（図5の「その他」に該当する内容）はどのようなものが扱われているか、D) 授業の工夫について考察する。名称は「小学校（初等）英語概論（概説）」「小学校（初等）英語」などがあつた。この科目は「1単位以上」という扱いではあるが、調査対象の65大学のうち、授業回数を10回以下に設定している事例は9大学のみ（14%）だった。また、複数の教員で担当し、専門分野を生かした指導を行っていると思われる事例は22大学（34%）と、上記の指導法の授業よりも多かった（13大学：16%）。外国語の指導法の調査対象は82大学だったのに対し、専門的事項が65大学と調査対象が少ない理由は、調査時にまだこの授業が開講されていない可能性があるからだと考えられる。

A) コアカリキュラムの各項目が授業の中で扱われている割合

コアカリキュラムの各項目の授業の中で扱われている割合は、以下の図5の通りである。

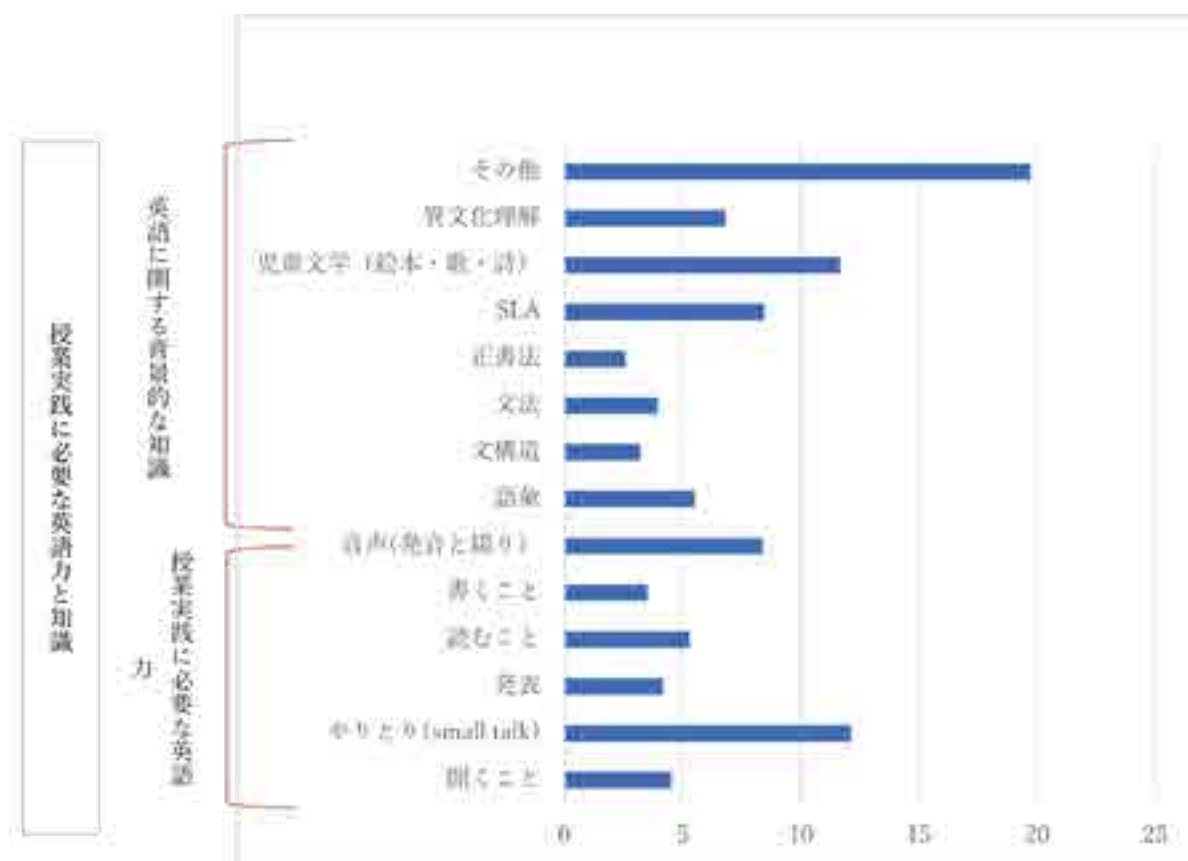


図5 外国語の指導法 シラバス分析結果 *数値は%

B) 全体的な傾向

「話す」ことに関わる項目、つまり「やり取り」「音声（発音と綴りを含む）」「児童文学」（特に絵本・歌やチャンツ）を扱う割合が多い。特に、児童の前で効果的なインプットややり取りができるように、Small Talkや教室英語の練習、絵本の読み聞かせ、歌やチャンツの練習、ALTとの会話といった内容を中心に扱う事例が多い。このことから「音声インプットを重視した授業実践」を前提としていることがうかがえる。次いで多いSLA（第二言語習得）については、臨界期仮説・関連する教授法・動機づけ・学習者要因・コミュニケーション能力など内容は多岐にわたる。異文化理解については、「背景的知识」として異文化コミュニケーションや国際語としての英語などのトピックを扱う事例もあるが、異文化交流・（児童になったつもりで）異文化について紹介するなどの授業実践と結びつけた扱い方も散見された。文法・文構造・語彙の数値は低いが、まとめて扱われる事例が多く、また英語力を高めながら文法や語彙を習得するという考えから、シラバスの内容として明記されていない可能性がある。正書法も授業実践に必要な「書くこと」と一緒に扱われている事例が散見され、シラバスには明記されていないが正書法の内容はカバーできているとみなされている可能性がある。

C) コアカリキュラムに含まれていない内容：「その他」について

ガイダンスやまとめ・試験などを除いた内容としては、①外国語の指導法の授業内容（ビデオ視聴や模擬授業も含む）を扱っている事例が65大学中20事例あり、繰り返し扱うことで定着をはかったり深い学びを促したりしている、または①と②を明確に分けずに統合型の授業として設定しているという可能性が考えられる。また、「英語に関する専門的な知識」として、世界の中の英語や英語の変遷を扱っている

事例があった。

D) 指導の工夫

指導の工夫としては、以下のような例が挙げられる。

- ・「絵本を通して読む力をつける」「Small Talkでやり取りの力をつける」「異文化理解について理解したことを発表する」「活動を体験しながら聞く・話す力をつける」「ALTとの書面でのコミュニケーションを行う(書く活動)」といった、背景的な知識理解を深めながら授業実践に直接結びつくような英語力を高める活動を行う。
- ・「小学校で必要な」文法と語彙、英語表現など内容を限定し、集中的に扱う。
- ・「グループで絵本やチャンツをつくり、評価しあう」「グループでプロジェクトに取り組み発表する」といった4技能統合型のグループ活動を入れる。

分析の課題としては、①と同様にシラバスだけでは授業の詳細まではわからないため、例えば「第二言語習得」とだけ書かれていた場合、小学校外国語活動・外国語科とその内容がどの程度連動しているかはわからない。ケーススタディとしていくつかの大学の授業を参観したり、授業で配布している具体的な資料を閲覧したりすることで、詳細な情報を集める必要があるだろう。

資料：分析対象は以下のホームページを参考にし、地域や種別(国立・私立など)に偏りが出ないように配慮して抽出した。

「小学校教員の免許資格を取得することのできる大学」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/03/29/1287044_1.pdf

以上のことから、①外国語の指導法、②外国語に関する専門的事項科目のモデルとして参考にできるようなシラバスのパターンを提示する。

①外国語の指導法

	パターン1：授業実践に必要な知識と指導技術を並行して取り扱う	パターン2：授業実践に必要な知識を講義形式ではじめに扱い、のちに指導技術を扱う
1	知：学習指導要領：目的やその意義 技：中学年と高学年の授業ビデオを視聴	学習指導要領・小中高の英語教育の中の位置づけ
2	知：子どもの第二言語習得のプロセス 技：英語での語りかけ方の実践演習	子どもの第二言語習得のプロセス・発達段階の特徴・多様性への配慮①
3	知：子どもの第二言語習得のプロセス 技：児童の発話の引き出し方・やり取りの仕方	子どもの第二言語習得のプロセス・発達段階の特徴・多様性への配慮①
4	知：子どもの第二言語習得のプロセス・多様性 技：文字言語との出合わせ方	主教材について 国語教育との連携
5	知：主教材とICT 技：授業ビデオの視聴(主教材・ICT)	コミュニケーションの目的・場面・状況 題材・教材の研究
6	知：ALTとのTT・学習評価 技：授業ビデオの視聴(教師の役割と評価)	学習評価と指導計画
7	知：題材の選定・教材の研究 技：設定した題材に沿う教材づくり	授業ビデオの視聴：子どもの第二言語習得プロセスをテーマに(中学年)
8	知：指導計画 技：指導案の作成	授業ビデオの視聴：子どもの第二言語習得プロセスをテーマに(高学年)
9	授業体験：中学年の授業	授業体験：ALTとのTT(中学年・高学年)

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

10	授業体験：高学年の授業	授業体験：評価場面と評価の仕方
11	授業体験：評価場面と評価の仕方	授業体験：中学年と高学年の指導
12	模擬授業に向けて学習指導案・教材の作成	模擬授業に向けて学習指導案・教材の作成
13	模擬授業：中学年の授業	模擬授業：語りかけ方を中心に
14	模擬授業：高学年の授業	模擬授業：やり取りを中心に
15	模擬授業：中学への接続を考える	模擬授業：文字言語の扱いを中心に

②外国語に関する専門的事項

	パターン1：授業実践に役立つ活動と専門的な知識を連動させて単独で指導する	パターン2：専門的知識を生かして異なる教員が指導する（担当①②③④）
1	授業実践に役立つ英語力「聞く」：主教材を使ったリスニング（音声学の基礎）	①授業実践に役立つ英語力を向上させる「聞く・やり取り」
2	授業実践に役立つ英語力「聞く」：主教材を使ったリスニング（音声学の基礎）	①授業実践に役立つ英語力を向上させる「読む」
3	授業実践に役立つ英語力「やり取り」：Small Talk・効果的なインプット（音声学の基礎）	①授業実践に役立つ英語力を向上させる「書く」
4	授業実践に役立つ英語力「やり取り」：活動の中の発話の引き出し方（音声学の基礎）	①授業実践に役立つ英語力を向上させる「発表」
5	授業実践に役立つ英語力「やり取り」：活動の中の発話の引き出し方（語彙・文法）	②英語音声学の基礎（発音の仕方：講義）
6	授業実践に役立つ英語力「読む」：絵本の読み聞かせ・歌や詩の活用（語彙・文法）	②英語音声学の基礎（発音の仕方：演習）
7	授業実践に役立つ英語力「読む」：絵本の読み聞かせ・歌や詩の活用（文構造・異文化理解）	②英語学の基礎（語彙・英文法・文構造）
8	授業実践に役立つ英語力「書く」：ALTとの書面でのやり取り（正書法）	②第二言語習得の基礎
9	授業実践に役立つ英語力「書く」：板書やプリント作成のために（正書法）	③小学校での授業実践に役立つ児童文学（絵本）
10	授業実践に役立つ英語力「書く」：発表原稿の作成（正書法）	③小学校での授業実践に役立つ児童文学（歌）
11	授業実践に役立つ英語力「発表」：子どもの第二言語習得	③小学校での授業実践に役立つ児童文学（詩）
12	授業実践に役立つ英語力「発表」：異文化交流活動（日本紹介・多文化紹介）	④異文化理解のための基礎知識
13	授業実践に役立つ英語力「発表」：絵本を使った活動	④小学校での異文化交流活動（ビデオ視聴）
14	主教材を使ったプロジェクト（4技能統合型活動）	④異文化交流体験（留学生との交流）
15	主教材を使ったプロジェクト（4技能統合型活動）	④授業実践に必要な英語力と知識：振り返りと評価

4.4 まとめ

教科に関する指導法のシラバスの分析から、「模擬授業」の配当時数が多く、「指導技術」(特に語りかけ方)や「指導計画」(特に指導案の作成)に時間を割き、実践的な指導力を身につけることが重視されていることがうかがえた。「子どもの第二言語の習得についての知識・理解」に関する項目は配当時間が低いものの、指導技術を習得する過程で理解が深まるという前提で、シラバスに明記されない可能性があることが予想された。「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」の下位項目「学習指導要領」は、内容の詳細についてもシラバスに明記されている事例が多く、重視して扱われていた。

教科に関する専門的事項の授業では、「話すこと」に関わる項目(やり取り・音声・絵本や歌など)の配当時数が多く、音声インプットを重視した授業実践のために必要な能力を身につけることが重視されていることがうかがえた。「英語に関する専門的な知識」については、まとめて短時間で扱う事例が多く、講義ではなく授業実践能力を身につけることを通して理解が深まると考え、細かく明記されていないのではないかと推測された。逆に、「第二言語習得」「異文化理解」については、詳細なテーマを明記している事例があり、内容が多岐にわたっていることがわかった。

以上、この章では、授業シラバスの中でコアカリキュラムの内容がどのような軽重をつけて扱われているかをみてきたが、今後コアカリキュラムを改訂していく際には、全体的な傾向に配慮しつつ、コアカリキュラムに含まれていない内容の扱いも含めて、内容を精査していく必要があるだろう。

第2章 コアカリキュラムに対応したモデルプログラム

1. 包括的なプログラム

小学校英語教員養成課程コアカリキュラムは、その策定により、教員養成の質的保障と改善に役立てることが目的であるが、課程認定のガイドラインとして適用されてきた経緯もあり、一般には、指導法科目および専門的事項の科目にかかわるものとして理解されてきている。しかし、実際には小学校英語教員養成課程コアカリキュラムは、それら2種類の科目のみで完結するわけではなく、4年間の教員養成プログラム全体に設定されている様々な教養科目、教職科目、実習体験等との関係性を意識した運用が必要である。

本節では、その視点から、本調査・事例の中から、他の科目や教育実習などとの関連性を意識している例をまとめ、教員養成プログラム全体における初等英語のモデルプログラムの位置づけについて示唆を提示したい。

1.1 英語力の増強の手立て

本報告書では、アンケートおよび事例調査から、外国語の指導に必要な英語力が不足しているという声が多く聞かれた。英語力増強を役割の一部としている専門的事項の科目にしても、1コマ足らずであり、英語力の増強には限界がある。また指導法においても、指導技術の演習が主であり、英語力増強に割ける時間は限られている。その意味で、一般教養科目ではあるが、教養英語との連携には意義があり、今後の取り組みが期待される（第1章第2節2.5<1>、第3節3.2<5>参照）。

【英語力向上の取り組みの具体案】

- ・教養英語での英語資格試験の基準を設定
- ・授業外講座を設定
- ・海外研修
- ・英語力向上のための関連専門科目の設定

【解説】

上記の例は、一般的な英語力を高め、間接的に小学校外国語の指導力の向上を図ろうとする取り組みであるが、一方で、小学校外国語を指導するにあたっての英語力は、一般の英語力とは質的に異なる英語運用力が必要である。そのため、第1章第3節3.2<5>で検討したように、運用力を付けるためには、実際の指導場面と脈絡に身を置いて英語を使うことが重要である。今後、教科教育法における指導法演習の中で、合わせて英語力を高める取り組み・工夫も期待される。

1.2 授業参観・実践体験との連携

学生にとって、大学での講義での学習だけでは不十分であり、できる限り実際の学校での外国語活動・外国語の授業場面に身を置いて、授業の実際と児童の様子を観察する機会が不可欠である。

【授業参観・実践体験との連携の具体案】

- ・教職の基礎科目，初等英語関連科目で英語の授業参観を行う

【解説】

大学アンケートの自由記述から、授業参観や実践体験は学期に1度など、回数は限られているものの、教職の基礎科目，初等英語関連科目で英語の授業参観をする例が散見される。さらには、インターンシップやフィールド研究，ボランティアとして公立学校等に赴き、英語の授業を参観したり、支援したりする機会がある大学もある。しかし、それらの実践体験は一般に外国語の授業に特化した体験ではなく、また必修ではないケースもあり、多くの学生が等しく参観や実践体験ができるわけではない。今後、公立学校等での授業参観や実践体験を常態化し、規定の教科教育法と専門的事項の科目と関係づける制度的な取り組みが期待される。

1.3 教育実習との連携

教育実習との連携については、実習の事前事後指導だけでなく、大学入学の早い時期から授業参観するという事例、小学校教員による講義を聞くといった事例がみられた。

【教育実習校との連携の具体案】

- ・1年次から小・中学校で観察実習
- ・実習期間中に外国語の授業を観察してレポート

【事前事後の指導の具体案】

- ・小学校で外国語授業に関する実践指導を受講
- ・事後指導において小学校教員を招いて講義・演習
- ・下級生に向けた実習報告会で報告

【解説】

大学での授業は、いきおい模擬授業が中心となり、児童がどのように反応するのか、実際の教室での授業を実感を持って体験することはできない。その意味で、教育実習は教員養成プログラムにおいて極めて重要な意味を持ち、大学での教科教育法科目・専門的事項の科目との関連性を意識すべきである。教科指導法や専門的事項の科目は、一般に教育実習前に行われるケースが多く、いかにレディネスを高めるか重要である。一種、大学での授業科目は、教育実習での学びの方向性や深まりを左右するとも考えられる。教育実習前に、大学での授業科目で、どのような教育内容を、どのような方法で指導すべきかを検討・改善することが、教員養成プログラムの要素を有機的に結び付け、質を高めるうえで極めて重要である。

あわせて、一部の大学からは事前事後指導での各種の取り組みも報告されており、教育実習を単に体験するだけにとどまらずに、方向づけと省察によって意識化された学びをもたらすことが重要である。

1.4 教職実践演習

教職実践演習は、卒業前にそこまでの学びの履歴をもとに振り返り、教育実践体験や大学での授業科目などを通して、教員としての資質が確実に習得されているかどうかを確認・補完する授業科目である。

【教職実践演習の具体案】

- ・授業の一部で小学校外国語の基本的事項について学ぶ
- ・小・中学校教員を招聘して講演やワークショップ，模擬授業
- ・小学校の公開研究授業を参観した後に討論

【解説】

教職実践演習の事例としては、15コマのうち1コマ程度を割り当てて、小学校英語教育の基本的な内容を扱う、小学校の公開研究授業を参観した後に討論する、現職教員による講演・ワークショップを実施する、模擬授業をして現職教員から指導を受ける、附属学校の公開研究会の授業を参観した後に討論する、など多様な取り組みがみられた。4年間の学びの集大成として、教職への橋渡しとして、教員としての資質・能力の達成度についての確認と省察を行う機会として、今後とも教職実践演習の取り組みが期待される。

おわりに、小学校外国語コアカリキュラムが有効に機能してゆくためには、教員養成の全体的・包括的プログラムの中で、教養科目、指導法科目と専門的事項、教育実習、教職実践演習などの有機的関連性を整え、資質・能力の養成における役割分担、タイミングや有機的な関連性を高める努力が必要である。

なお本調査報告においては、主に小学校免許取得に必要な教育法科目・専門的事項にかかわる教育内容を扱ってきたが、本調査からは、初等教員養成課程の約3割で英語に特化したコースを設けている大学があり（第1章第2節2.5<1>参照）、そのようなコースでは小学校外国語で専科としても教えられるように養成を行っていると考えられる。今後、専科教員に必要とされる資質の養成を目指す場合に、本コアカリキュラムの中から何を発展的に養成すべきなのか、何が足りないかなどについても、さらなる検討が必要であろう。

2. 具体的なプログラム

2.1 指導法に関する科目

<1>シラバス

以下の具体案は、第1章の内容をもとに、15回分の授業の具体を示すことを目的として、独自に作成した提案であり、特定の大学の具体案を紹介するものではない。あくまでも具体案であるため、大学の状況に合わせて適宜修正したり、いくつかの具体案を組み合わせるなどの工夫が求められる。

◆具体案

【①授業実践に必要な知識を前半で扱い、後半で指導技術を扱う具体案】

1	学習指導要領(目標・内容・指導計画)・小・中・高等学校の連携と小学校の役割
2	子どもの第二言語習得・発達段階の特徴・多様性への配慮①
3	子どもの第二言語習得・発達段階の特徴・多様性への配慮②
4	主教材・ICTについて・国語教育や他教科との連携
5	コミュニケーションの目的・場面・状況の設定/題材・教材の研究
6	学習評価と指導計画
7	授業ビデオの視聴(中学年):ALTとのTT・語りかけ方・やり取り・目的・場面・状況の設定
8	授業ビデオの視聴(高学年):やり取り・主教材・ICTの活用・文字言語の扱い方
9	授業体験(中学年):目的・場面・状況の設定・題材や教材
10	授業体験(高学年):やり取り・主教材・ICTの活用・題材や教材
11	授業体験:評価場面と評価方法
12	模擬授業に向けて学習指導案・教材の作成
13	模擬授業と検討会:語りかけ方・やり取りを中心に
14	模擬授業と検討会:文字言語との出会わせ方・読み書きの指導を中心に
15	模擬授業と検討会:技能統合型の活動や発表活動を中心に
評価	小テスト30%, 授業への積極的な参加20%, 模擬授業30%, 期末レポート20%

【解説】

知識の習得を前半で集中的に扱うので、体系的なまとまりとして知識内容を整理して提示することができる。知識の習得を目指す講義と指導技術の向上を目指す実践とで、担当教員を分けることも可能だろう。模擬授業にテーマを設けることで、そのあとの検討会で焦点化した議論が展開できる。知識内容と実践に役立つ技術が相互に補完し合うように、知識と指導技術を有機的に結びつけることで、より大きな成果が期待できる。

【②授業実践に必要な知識と指導技術を融合して扱う具体案】

1	知識: 学習指導要領(目標・内容・指導計画) 指導技術: 授業ビデオを視聴しながら目標や内容がどのように反映されているか考える。
2	知: 子どもの第二言語習得のプロセス(音声への敏感さ) 技: 授業体験(英語での語りかけ方)
3	知: 子どもの第二言語習得のプロセス(言語活動としてのやり取り) 技: 授業体験(児童の発話の引き出し方・やり取りの仕方)

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

4	知：子どもの第二言語習得のプロセス（文字の導入から読み書きへ）・多様性 技：授業体験（文字言語との出合わせ方）
5	知：主教材とICT（Let's Try!や検定教科書、ICTを使用する際の留意点） 技：授業ビデオの視聴（主教材・ICTの活用の具体）
6	知：ALTとのTT・学習評価 技：授業ビデオの視聴（教師の役割分担の例と評価活動の具体）
7	知：題材の選定や教材研究の留意点 技：授業ビデオの視聴（発達段階に適切な題材・教材の具体）・教材づくり
8	知：指導計画の立て方（年間・学年・ユニットの指導計画の留意点） 技：指導計画の具体例を分析する。自分たちの指導案を発表しあい修正する。
9	授業体験：中学年の授業（テーマの例：主体的に聞く活動を中心に）
10	授業体験：高学年の授業（テーマの例：やり取りから発表まで話す活動を中心に）
11	授業体験：評価場面と評価の仕方（中学年・高学年の単元を取り上げて）
12	模擬授業に向けて学習指導案・教材の作成
13	模擬授業：中学年の授業・検討会
14	模擬授業：高学年の授業・検討会
15	模擬授業：高学年の授業から中学への接続を考える授業・検討会
評価	リアクションペーパー（毎授業後の振り返りレポート）30%，授業への積極的な参加20%，模擬授業30%，期末レポート20%

【解説】

1コマの授業の中で、講義で解説した内容について実践（指導技術）を通して理解する（あるいは授業体験をしてから講義で解説するという形式もありえる）という流れになっているので、体験を通して指導内容について理解を深めることができる。「知識」と「指導技術」の時間配分への配慮や、両者が効果的に結びつくように内容を厳選する工夫が必要となる。また、知識項目については予習を重視し、授業では知識内容の確認・議論のみ（反転授業）とし、指導技術の重点を置くといった扱い方も可能だろう。その際には知識内容を体系的に提示するなど、受講生のわかりやすさへの配慮が求められる。

【③授業のイメージを持たせてから知識の習得を目指し模擬授業を行う具体案】

1	学習指導要領（目標・内容・指導計画）・指導者に求められる資質や能力と自己分析
2	授業ビデオの視聴（中学年）：ALTとのTT・語りかけ方・やり取り・目的・場面・状況の設定
3	講義：子どもの第二言語習得（音声への感性・言語活動としてのやり取り）
4	授業ビデオの視聴（高学年）：ALTとのTT・やり取り・主教材・ICTの活用・文字言語
5	講義：子どもの第二言語習得（文字言語との出合わせ方・読む活動・書く活動・発表）
6	授業体験（中学年）：目的・場面・状況の設定・題材や教材
7	講義：目的・場面・状況の設定・題材や教材
8	授業体験（高学年）：やり取り・主教材・ICTの活用・題材や教材
9	講義：主教材・ICTの活用・国語など他教科との連携
10	講義：学校・児童の多様性への対応・評価場面と評価方法
11	指導計画（1時間の授業づくり・年間計画/単元計画）・学習指導案の作成
12	模擬授業：学生が選んだ学年・単元（テーマ）の模擬授業を行った後で振り返りを行う
13	模擬授業：学生が選んだ学年・単元（テーマ）の模擬授業を行った後で振り返りを行う
14	模擬授業：学生が選んだ学年・単元（テーマ）の模擬授業を行った後で振り返りを行う
15	小・中・高等学校の連携と小学校の役割・自己評価
評価	リアクションペーパー（自己分析や授業後の振り返りを含む）30%，小テスト20%，指導案10%，模擬授業30%，期末レポート10%

【解説】

自分に必要な資質や能力は何かを自己分析した上で、映像や体験により小学校外国語活動や外国語科の授業イメージを持たせ、知識の習得を促し模擬授業を行うので、学生のより主体的な参加が期待できるだろう。模擬授業も学生が自分たちでテーマを選び取り組むことで、自分たちの設定した目標に沿った授業内容・評価活動ができたかどうかを判断する機会となり、学びがより「自分事」として意識できる。学生の主体的な学びを深めるために、コースの間にも振り返りの機会を設けたり、学生同士の評価活動を取り入れたりするなどの工夫が求められる。

【④小学校と連携して授業を行う具体案1：小学校での授業観察やゲストスピーカーを招く】

1	学習指導要領(目標・内容・指導計画)・小・中・高等学校の連携と小学校の役割
2	授業観察(中学年)：小学校を訪問し実際の授業を観察する(指導技術・授業づくり)
3	授業観察(高学年)：小学校を訪問し実際の授業を観察する(指導技術・授業づくり)
4	授業者(またはゲストスピーカー)による講義：ALTとのTT・主教材・ICTの活用
5	授業者(またはゲストスピーカー)による講義：発達段階の特徴・多様性・国語教育との連携
6	授業者による授業体験(中学年)：コミュニケーションの目的・場面・状況の設定・題材や教材
7	授業者による授業体験(高学年)：やり取り・主教材・ICTの活用・題材や教材
8	授業者による講義：子どもの第二言語習得(音声への敏感さ・言語活動としてのやり取り)
9	授業者による講義：子どもの第二言語習得(文字言語との出合わせ方・読む活動・書く活動)
10	指導計画・題材の選定・教材研究
11	学習評価
12	模擬授業に向けて学習指導案・教材の発表・検討
13	模擬授業：中学年
14	模擬授業：高学年
15	模擬授業の評価と今後への課題などをディスカッション
評価	リアクションペーパー30%、指導技術に関するパフォーマンステスト(Small Talkややり取りの仕方など)20%、指導案・(模擬)授業30%、期末レポート20%

【解説】

小学校と緊密な連携をとり、授業づくりや指導技術の向上を主眼としているため、学生が児童の様子を把握しながら実践的な技術を身につけることができるだろう。授業観察やゲストスピーカーを招くことで、学生が具体的な児童像を持ちやすくなる。小学校の許可が得られれば、特に優れた模擬授業例などを小学校で実施し、実際の児童の反応をもとに検討会を持つことも可能である。大学での模擬授業を小学校教員に見てもらおうという形式も可能だろう。体系的な知識習得のために、資料の提示に工夫が必要になる。授業観察や授業を行う小学校以外の状況にも対応できるような応用力の育成にも配慮したい。

【⑤小学校と連携して授業を行う具体案2：授業づくり主体・小学校での授業観察と授業研究を融合】

* 授業研究では子どもの第二言語習得・指導技術・授業づくりなどの項目を複合的に扱う。

1	小学校英語教育の現状と課題(指導要領、小・中・高等学校の連携と小学校の役割)
2	授業研究1-1(授業研究1-4の模範授業と同目標の授業を予想的に構想する課題提示)
3	授業研究1-2(グループに分かれて模擬授業1)
4	授業研究1-3(グループに分かれて模擬授業2)
5	授業研究1-4(模範授業参観と授業者による解説と多様性、国語教育や他教科などのコメント)
6	授業研究1-5(模擬授業からの学びについて討議 + コアカリ項目を含め解説)

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

7	授業研究2-1（授業研究2-4の模範授業と同目標の授業を予想的に構想する課題提示） *小学校教員参加あるいは学生からの質疑応答
8	授業研究2-2（グループに分かれて模擬授業1）
9	授業研究2-3（グループに分かれて模擬授業2）
10	授業研究2-4（模範授業参観+授業研究，授業者によるコメント）
11	授業研究2-5（模擬授業からの学びについて討議+コアカリ項目を含め解説）
12	授業研究3-1（授業件3-4の模範授業と同目標の授業を予想的に構想する課題提示）
13	授業研究3-2（グループに分かれて模擬授業1）
14	授業研究3-3（グループに分かれて模擬授業2）
15	授業研究3-4（学校訪問による模範授業参観+授業者との討議，学習評価についてのコメント）
評価	グループ課題60（20×3）%，小テスト20%，期末レポート20%

【解説】

小学校での実際の授業を模範授業（参観ができない場合はビデオ視聴）とし，その授業目標からまず学生がどのような授業展開なのか予想し，自分たちで授業を行ってから実際の授業を参観し授業づくりを学びとる構成で，学生たちは自分たちの授業と模範授業を比較し，授業を見る視点を広げながら，知識や技術を主体的に身につけていくことができるだろう。同じ形式を3回繰り返すことで，段階的により深い学びの機会となるだろう。学生が模擬授業を行う際には，学生のレベルやグループの状況に合わせた支援が必要だろう。小学校との連携としては3つの模範授業の提供，授業解説や授業づくりにおける学生からの質問に対する応答やアドバイス，多様性や国語授業や他教科との関連，学習評価についてのコメントなどが考えられる。

〔コアカリキュラムの項目の扱い方の具体案〕

1回目の授業研究で子どもの第二言語習得のコアカリ項目前半と指導技術の語りかけ方，発話の引きだし方，やり取りの進め方を扱う。学生の主体的学びを生かすため模擬授業の振り返りシートにコアカリ項目についての学びを記入させ，授業研究5回目で討議し，解説する。

- ・1回目の模擬授業の課題：45分の授業案作成とやり取り中心のミニ模擬授業
- ・2回目の授業研究で子どもの第二言語習得のコアカリ項目後半，文字言語との出合わせ方，読む・書く活動への導き方を扱う
- ・2回目の模擬授業の課題：単元作成からの授業づくり。ICTを活用して文字指導を入れた模擬授業
- ・3回目の授業研究で学習評価を扱う
- ・3回目の模擬授業の課題：ALTとのTT授業

【⑥大人数クラスに対応するためインターネットを活用する具体案】

1	小学校英語教育の現状と課題（指導要領，外国語活動・外国語科の概要，小中高の連携など）	
	予習課題 (課題提示・提出や質問をWeb上で)	解説(まとめ)→指導技術・授業づくり (ビデオ視聴や授業体験)
2	子どもの第二言語習得Ⅰ	児童への語りかけ方
3	子どもの第二言語習得Ⅱ	やり取り・発話の引き出し方
4	コミュニケーションの目的・場面・相手意識	やり取り・発表の指導
5	受信から発信，音声から文字へ	文字言語との出合わせ方・読み書きの指導
6	題材の選定・教材研究	発達段階に応じた題材の選定と教材作成
7	ALTとのTT/ICTの活用	TTやICT活用の具体例

8	学習評価	評価場面と評価の仕方を授業ビデオから考察
9	指導計画	単元計画・指導案づくり
10	学校や児童の多様性への対応	インクルーシブな授業（指導法・教材）の具体例
11	国語科など他教科との連携	他教科と連携させた授業の具体例
12	模擬授業と討論会：語りかけ方ややり取りの仕方 （学生同士の相互評価や教師からのフィードバックをWeb上でも行う。以下同様）	
13	模擬授業と討論会：文字指導と発表	
14	模擬授業と討論会：TTやICTの活用	
15	模擬授業と討論会：インクルーシブな授業	
評価	予習課題への取り組み30%，小テスト20%，指導案・模擬授業30%，期末レポート20%	

【解説】

大人数クラスに対応するため、Web上に知識内容に関する予習課題を提示し、授業では知識内容は解説（まとめ）にとどめ主に指導技術・授業づくりの向上を目的とする構成である。Web上で適宜知識に関する小テストを実施し、履修者の知識習得レベルの確認を行うとよい。模擬授業を行う前にマイクロティーチングなどを入れることも可能だろう。模擬授業の際にも、指導案はWeb上で管理・フィードバックを行い、全体で共有すべき留意事項のみ授業内で確認するようにすれば効率的に運営できるだろう。授業後の討論会もあらかじめ評価観点を設定し（第1章 第3節3.2<4>参照）、録画した模擬授業をWeb上で振り返る、相互評価や担当教員からのフィードバックをWeb上でも行うなどの工夫ができるだろう。50人の履修者がいたとしても4（または5）人のグループに分け、25～30分程度の模擬授業を1コマで3グループ合計4回にわたって実施すれば、各人が模擬授業を経験することが可能である。授業開始前に授業の進め方、課題や指導案の提出方法、模擬授業の評価方法や授業全体の運営方法などについて、学生としっかり共有することが重要である。

このように指導法に関する科目では、学生が実際に授業をしている状況を想像して授業者としての自覚を持ち必要な知識や技術を身につけていけるように、可能であれば小学校とも連携して、シラバスの構成を考える必要があるだろう。

※参考になっているテキスト・資料の例（学習指導要領・主教材は除く）

- ・大学独自に作成したテキスト・リソース・ネットワーク
- ・『小学校英語 はじめる教科書』（MPI）
- ・『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』（大修館書店）
- ・『MINERVA はじめて学ぶ教科教育 初等外国語教育』（ミネルヴァ書房）
- ・『小学校英語内容論入門』（研究社）
- ・『コアカリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』（大修館書店）
- ・『小学校英語の教育法 理論と実践』
- ・『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』（三省堂）
- ・『小学校外国語活動 基本の「き」』（大修館書店）
- ・『主体的な学びをめざす小学校英語教育』（教育出版）
- ・『小学校英語教科化への対応と実践プラン』（教育開発研究所）
- ・『新編 小学校英語教育法入門』（研究社）
- ・『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省）
- ・『はじめてのジョリーフォニックス—スチューデントブッカー』（東京書籍）

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

- ・『小学校英語教育—授業づくりのポイント—』（保育出版社）
- ・『英語科教育のフロンティア』
- ・『小学校英語活動アイデアバンク ソング・ゲーム集』
- ・『小学校英語指導案集』（朝日出版社）
- ・『小学校学級担任が進める子どもが楽しむ英語活動—アクティビティ・歌・授業プラン—』（日本標準社）
- ・『英語習得の常識，非常識』
- ・『英語の絵本活用マニュアル』
- ・『Let's Have Fun Teaching English: ここから始めよう児童英語—理論から実践へ』
- ・『Word Book：絵で見て覚える英単語』
- ・『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法』
- ・『新・グローバル時代の英語教育—新学習指導要領に対応した英語科教育法—』（成美堂）
- ・『小学校外国語活動の進め方—「ことばの教育」として』（成美堂）
- ・『英語教員研修プログラム対応「英語授業力」強化マニュアル』（大修館書店）
- ・『オーラル・コミュニケーションハンドブック—授業を変える98のアドバイス』（大修館書店）
- ・『新しい時代の小学校英語指導の原則』（明治図書出版）
- ・『小学校英語教育の基礎知識』（大修館書店）
- ・ *Teaching young language learners* (Oxford University Press)
- ・『小学校外国語活動の進め方』（成美堂）

<2>指導内容

外国語の指導法を指導するにあたって、限られた時間の中でコアカリキュラムの項目を網羅し、かつ指導技術をあげていくための方策は、項目に軽重をつけつつ、1つの授業で複数の項目を扱うことが考えられる。その組み合わせの具体は、前節のシラバスでも見ることができるが、本節でも特に相性の良いものをいくつか具体案として挙げている。また、反転授業として予習で教科書内容をノートにまとめさせ、授業では解説や例示したり、その知識を使って指導技術を磨いたりすることもできる。さらに、小学校において外国語活動・外国語の授業ができるようになることにねらいを絞って、小学校で使っている教材を使い、授業で扱う英語表現や活動を学生に体験させ、授業づくりを軸に必要な知識を解説していくというコースデザインもできる。

項目の軽重を判断する材料の1つが、項目によって身につけやすいものとそうでないものがあることである。本研究で行った学生アンケートによると、【小学校外国語教育についての基本的な知識・理解】及び【子ども第二言語習得についての知識とその応用】については、全体的に効果が見られなかったため、力点を置いて指導する必要があるだろう。多くの学生は現行の学習指導要領に基づいた小学校の授業のイメージではなく10年程前の外国語活動が必修化された頃の授業を受けてきていることを前提として、新たな小学校のイメージを持たせ、そこにつながるように基本的な知識・理解を与えていく必要があるだろう。特に、外国語活動と外国語科の目標の区別の理解が難しいことが示されている。【指導技術】の項目については、「児童の発話の引き出し方，児童とのやり取りの進め方」「文字言語との出合わせ方，読む活動」「書く活動の導き方」などは「外国語の指導法」の授業による効果がみられた。「英語での語りかけ方」は事前テストから高得点だった。これらの知識は身につけられているが、その指導技術が身についたか模擬授業で確認する必要がある。さらに児童を前にした教育実習で実践できるようにする必要がある。【授業づくり】の項目のうち「題材選定，教材研究」「学習到達目標，指導計画」「学習状況の評価」

は事前テストにおいても比較的高得点であり、他の授業でも学べる内容であったことが示唆されている。そのため残る2項目の「ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方」「ICT等の活用の仕方」などに重点を置くことで、指導の効果が期待される。

さらに、知識として身につけやすい、つきにくいというだけでなく実際の指導技術として身につけているかという点も、コアカリ項目の扱いに影響する。実生活の中で英語を使ってコミュニケーションを取った経験に乏しい学生は、言語材料と児童の身の回りのトピックとを結びつけて自然な英語として授業で提示することが難しいことが想定される。また、小学校での外国語活動・外国語の授業を通して受けてきていない学生は、授業のイメージが持てない学生もいるだろう。学生の実態に合わせて、指導技術や授業づくりにはある程度の時間をかけて指導していく必要がある。

◆小学校外国語教育についての基本的な知識・理解

【学習指導要領と他の項目を関連づけて扱う具体案】

- ・実際の指導を見せて、それが指導要領のどれに当てはまるか示唆する。
- ・指導要領の要点を取り上げ、言語習得や外国語教育の先行研究などを関連させる。
- ・指導要領を扱う際は、教科書および*Let's Try!*の具体を見せながら指導する。

【解説】

小学校の現在の外国語活動や外国語の授業のイメージを持たない学生は、学習指導要領を読んでも、それが何を意味するのかよく分からないのが普通であろう。具体的な教材を使って授業で行う活動を実際に体験しながら、授業づくりと学習指導要領を結びつけていくことが必要だろう。また、学習指導要領の背景に第二言語習得理論があることも触れることができる。さらに小学校の学習指導要領だけでなく中・高等学校の学習指導要領も並べてみることで、日本の英語教育の全体像をつかみ、お互いの連携を考えることができる。

【小・中・高等学校の連携と小学校の役割を扱う具体案】

- ・連携の具体例を示し、小中交流の在り方を解説
- ・10年間の英語教育の中で小学校が果たす役割を解説。小学校での音声をしっかり押さえて文字指導に慣れ親しませることで、中学校へのつなぎになり、中学校での文法指導の障害にならないような音声を身につけさせることも大事であることを解説

【解説】

小学校で授業をすることに力点を置くと周辺に追いやられてしまう項目かもしれないが、日本の英語教育の中で、小中高の連携の問題は大きな課題になっている。学習指導要領上は同じ方向に英語力が伸びるように設計されていても、実際の授業が他校種で何を学んできたか、これから何を学んでいくのかを意識せずに指導していると、指導のギャップに児童生徒がついていけなくて英語嫌いになり、学習をあきらめてしまうことになりかねない。10年間の英語教育を見通した上で、小学校の授業が展開できるようにしたい。

連携の具体としては、小中の授業をお互いに見合う、お互いに授業にゲスト・ティーチャーとして参加する、児童生徒の交流の機会を持つ、などが考えられる。物理的に児童生徒の交流が難しい場合でも、

中学生が中学校生活を英語で紹介するところを動画撮影して6年生の中学校生活の単元の授業で児童に見せると、リアルな中学校の様子が分かるだけでなく、中学生の英語を使っている姿を見ることで英語学習への動機づけにもつながるだろう。

【児童や学校の多様性への対応を扱う具体案】

- ・外国語の学習歴の違い、帰国生・外国籍・外国にルーツを持つ児童の母語、日本語、英語の問題にも気づかせる
- ・少人数学級の指導の難しさと楽しさについて具体例を示す
- ・配慮が必要な児童への対応の具体例を示す

【解説】

前章のシラバス分析結果からもこの項目は軽い扱いになっているが、これからますます多様化する社会の中で多様性を認識し、教育の中でどう対応していくかは理解しておくべき項目だろう。地域によっては、外国籍の児童への対応を迫られたり、過疎地では複式学級になっていたり、少人数での授業もありうる。短時間でもこの項目はしっかり扱いたい。多様性の中でも配慮が必要な児童への対応として、文科省が出した移行期の教材 *We Can!* 1・2に、ユニバーサルデザインという考え方が取り入れられていて、文字を書く時の4線は真ん中の間隔が書きやすいように広がっている。

配慮が必要な児童への対応の具体例は、文字を書く欄を大きくしたり、文字が見やすいように拡大コピーをしたりする以外に、できたところをタイミングよく褒める、分からないときは躊躇なく教員や友達に助けを求められるようクラスに教え合いの雰囲気を作る、などが考えられる。文字指導においてはディスレキシア (dyslexia) の学習障害を持った児童もいると考えられるので、書く指導に入る前に文字の認識ができる期間を置き、文字の形を指で作ったり、文字ブロックを並べたりする文字で遊ぶ活動を取り入れたい。bとdを間違える児童に対しては、指で左がbと右がdの形を作って（親指と人差し指をくっつけて丸を作る）、横文字は左から右へ読むのでアルファベットの順番で早いのはbと覚える。手をひっくり返すとp、qの文字ができる。

◆子どもの第二言語習得についての知識とその活用

【児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を指導技術の「英語での語りかけ方」と組み合わせ実践を通して理解する具体例】

- ・児童との触れ合う機会が少ないので児童の発達段階に応じてと言っても理解できない学生が多い
- ・意味のあるやり取りを通して本当のことを発話できるようにするための段階を実例で示す

【解説】

小学校での6年間の各児童の成長は目覚ましいものがある。大学生にとって遠い昔のことであり、その時どのような教師とのやり取りをしていたか記憶している学生は少ないだろう。まずは国語や算数などの低学年、中学年、高学年の授業を視聴することで、教師が発達段階に合わせた語りかけをしていることが分かる。英語でもしかりであり、学習者の理解度に合わせて文を短く切ったり、易しい言葉を使ったりして段階を踏むことが大事である。ここでは、児童の学年というより英語学習時間数を考慮することと、その言葉を理解する手掛かりと合わせて言葉を使うことがポイントである。ジェスチャーや表情

が手掛かりだったり、言葉を使う状況、文脈だったりする。How's the weather? と聞くときには、教師の手や視線は窓の外を指しているし、Close your eyes. で目を指して手で閉じるしぐさをする。よく使う指示表現は慣れてくると英語だけで理解できるようになる。ターゲット表現を導入する際は、その言葉を使う状況がある中で、言葉を使うことと既習の語彙や表現をできるだけ使って語りかけることが大切である。How are you? という教師の質問に、児童がI'm sleepy. と答えたら、教師からWhat time do you get up? というターゲット表現が自然に出てくる。初めての表現にキョトンとしていたら、I get up at six. と言って、起きるジェスチャーと時計を指さす。Do you get up at six? Yes? No? と畳み掛けることもできる。他の児童にも何人か聞いていくと、What time do you get up? の意味が分かり、皆の耳に馴染むようになる。

【受信から発信、音声から文字へと進むプロセスと指導技術を同時に扱う具体案】

- ・ともすると学生は音が十分にインプットできていないのに文字を示そうとするので、モデル授業で体験させる
- ・耳から入り、口から出ていく見えない音声が見える文字に変化すること、そして文字言語は意味を抱え、音も抱えていることを理解させる

【解説】

学生は、英語学習を文字と音声を同時にスタートしていることが多く、その経験から模擬授業などでは、黒板にすぐに文字を書いて読ませようとしたりする。英語の音声がしっかり入っていないために、文字（綴り）音声が結びつけられず英語の音読ができない生徒がいることなどを説明して、小学校では、音声から入り十分に慣れ親しんだ後に、5・6年生で読んだり書いたりする活動が出てくることを理解させたい。

また、読みの技能は文字の形、文字の名前、文字の音読みの認識が必要である。日本語の平仮名・カタカナは文字と音が1対1の対応なので、文字を覚えると日本語が書けるようになるが、英語はそのような対応ではなく、単語に綴ったものに音がついている。そうした日英の文字表記の違いに気づかせていくことが大事である。書く活動は、いきなり単語を何度も書いて練習させるのではなく、「バースデイカードを英語で友達に書こう！」のような、書きたい気持ちを持たせてからお手本を視写させる。

◆指導技術

【児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方の具体例】

- ・教員がモデル、児童の反応を含め実例をだす
- ・どのように発問すれば児童からの発話を引き出せるか学生に考えさせる
- ・児童の関心を起こす工夫、児童が分かる語り掛け、教具の工夫、ターゲット表現を繰り返し聞かせる工夫、適切なリキャスト、英語の自然さ正確さ、インプットからアウトプットへの無理のない流れ

【解説】

当事者意識を持たせるために、学生にグループで教師役、児童役になって実際のやり取りをやらせてみるのは大変有効なやり方である。その後に実際の授業のやり取りを見せることで、児童への発問や発話の引き出し方が見えてくる。まず、本時の表現の導入部分で児童の関心を引き出すために実物や写真、クイズなどを準備し、その視覚教材を使ってわかる語りかけをし、児童とのやり取りを繰り返すことで

ターゲット表現に馴染ませ、児童のアウトプットを引き出すことができるようになる。児童の間違ひには、リキャストで正しい英語を繰り返し聞かせる。

【文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方】

- ・聞いて分かるようになり、自分でも言ってみたことを文字で見て、音が文字化されていることを認識することが文字指導の始まりであることを理解させる
- ・絵本の読み聞かせを通して、疑似読みをしながら、トレース読み、1人読み、そして写して書く、という流れを実践して見せる

【解説】

ABCの順番でなくても、児童の名前に出てくる文字や、身の周りにある文字探しからなじみのあるアルファベットをだんだん増やしていくとよいだろう。ABCの順番でなくても、児童の名前に出てくる文字からでも、身の回りにある英語の文字探しからでも、馴染みのある文字の数をだんだん増やしていくとよいだろう。まずは個々の文字から、HB, NHK, CD, P, EXITなど大文字の形を認識し、次に小文字の形に慣れる。単語絵本の読み聞かせは、教師が読む音があり、それを表す絵があり（意味が分かり）、その音を表す文字があるので、読む・書く指導にはもってこいの教材である。繰り返しの多い絵本は、読んでいくうちに児童がその繰り返し部分を覚えて一緒に言うようになる。今度は先生が読むときに、読んでいる文字をなぞるようにすると、文字と音が結びついてくる。それを積み重ねるうちに、1人で読めるようになる。

◆授業づくり

【題材の選定、教材研究に他教科の学びを持ち込む具体案】

- ・算数、国語の漢字、社会、理科の知識を活用して英語授業内容を膨らませます
- ・What's this? で地図記号、Where do you want to go? で社会科の地図帳、家庭科で料理の材料から料理名を当ててる活動、など

【解説】

小学校では、学級担任がほぼ全教科を教えている特徴を生かして、他教科の既習の内容を授業に取り込むことで、知っていることでも英語で表現すれば新鮮さが生まれる。そして、その英語で分かる体験が動機づけにつながる。算数の時計、おはじき、日本地図、世界地図などの教具を利用できる。国語で読んだ「スイミー」を英語で読んだり、社会で学習した各地の農産物や歴史上の偉人の出身地を英語クイズにしたり、理科で扱った植物の花と実をマッチングするなど、内容を利用することができる。

【学習到達目標、指導計画にバックワードデザインの考え方を使った具体案】

- ・グループで、単元計画から各1時間の授業計画まで作成させる
- ・授業の到達目標を明確化することが、指導と評価の一体化と言語活動の充実につながる

【解説】

学生が1時間の授業計画を立てる時に、それが単元の一部であることを認識させる必要がある。そし

て、その単元が集まって年間計画ができていて、さらに年間計画と学習指導要領は深くつながっていることまで言及すると、最後の到達点と1時間の授業がつながっていることが実感できる。最後の到達目標に向かって1時間ずつの目標を後ろから設定していくのがバックワードデザインである。バックワードデザインを体験する方法として、グループで単元計画を作成させ、各自がその1時間を計画するというのは、大変有効だと思われる。

【ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方の具体案】

- ・ペアで担任役とALT役になり、どのように授業を進めるか経験してもらう

【解説】

ALTとのチーム・ティーチングの主導権を持つのは、T1である日本人教師である。ALTと児童の間を取り持ち、英語の授業を進めていくのは日本人教師なので、学生のうちからチーム・ティーチングの方法に慣れておくことが必要である。

ALTが授業に入ることの利点は、本物の英語に触れ、英語を使う必然性が生まれることだろう。その良さを生かして、日本人教師とALTとの間で、一方が質問し、それに答え、さらにフィードバックを返す、という英語での自然なやり取りを聞かせることで、質の高いインプットができる。その際、日本人教師はALTの話が児童に伝わっているか観察しながら、聞き取りが難しいところはPardon? / Could you say it again?と言って、もう1度言ってもらったり、理解が難しいところはDid you say ~?と聞き直したり、What do you mean?と言って説明してもらったりする。ここで、日本人教師がすぐに日本語で訳すのではなく、できるだけ英語のやり取りで児童の理解に導くことが大事である。また、ALTがいることでより自然に児童からのアウトプットを引き出し、児童は英語でのやり取りの楽しさや達成感を感じることができる。それが、英語への関心を高め、英語学習の動機づけにつながることを期待したい。

【ICT等の活用の仕方と題材の選定・教材研究を組み合わせる具体案】

- ・教材研究の部分と合わせて、*Let's Try!*のデジタル教材の紹介
- ・ネット上のデジタル教材を利用する際にそれが適切な教材かどうか判断する指導も必要

【解説】

平成31年より「学校教育法等の一部を改正する法律」が施行され、これまでの紙の教科書を基本とし、デジタル教科書を併用することができるようになった。今後は教員もデジタル教科書の特質を理解したうえで、その指導技術を身につけ、アナログでの学習との効果を考えて選択して指導する必要がある。ICT活用は授業で教師が指導に使うだけでなく、児童が個々に持って英語音声を何度も聞いて練習したり、主体的に疑問に思ったことを調べたり、記録したり、発表の道具としたり、振り返りに活用したり、とさまざまな活用が考えられる。YouTubeなどネット上のデジタル教材を使用する際は、児童にとって英語使用や内容が適切か、著作権に触れないか、などの確認も必要である。

<3> 模擬授業

模擬授業においては、学習項目の「指導技術」及び「授業づくり」に関する知識をもとに、学生1人ひとりが授業実践を行う機会を確保することが肝要であり、これまでの実践事例を見ると、学習指導案の作成と組み合わせられて扱われることが多い。しかしながら、15回の講義の中で模擬授業に割くことのできる

時間は多くなく、特に大人数クラスにおいては全ての学生が授業実践を行う機会を確保するための工夫が必要である。また、コアカリキュラムに示されているように、模擬授業後の振り返りを踏まえて指導案の改善を行うことも重要である。本項では模擬授業の設定の仕方、大人数クラスでの工夫、振り返りの在り方について具体例を示す。

◆模擬授業の設定の仕方

【指導計画の作成の具体例】

- ・学生が作成した単元計画、本時案を元に模擬授業を行う
- ・学生が作成した単元計画、本時案の検討会を行う

【解説】

後述のマイクロティーチングのように短い時間の活動のみを行う場合を除き、模擬授業に先立ち、指導計画を作成させることがほとんどである。すなわち、指導計画の作成と模擬授業を一体のものとして捉え、指導することが有効である。指導計画の作成においては、題材や言語材料を与えて本時案のみを作成させる場合もあるが、単元計画についても合わせて考えさせることが重要である。例えば、同じI like …を扱う授業であっても、単元の前半か後半かによってその内容は大きく変わってくる。教科書の内容を参考にして単元計画を組み、その上で模擬授業を行う本時を設定することが望ましい。また、児童同士の活動が多くなる単元終末の授業よりも、新出表現や語彙の導入、定着が目的となる単元初頭の授業を本時として設定することにより、授業者に必要な指導技術が求められる模擬授業となる。また、指導計画の作成においては、単元及び本時の目標設定とそれに対応した評価規準（基準）の設定についても合わせて扱うことが肝要である。

学生の作成した指導計画は、授業担当教員が事前に確認して必要に応じてフィードバックを与えることが望ましいが、特に大人数クラスの場合には、授業担当教員の負担が大きく困難である。この場合、学生に指導計画を持ち寄らせて互いにコメントしあう検討会を行うことも有効である。例えば、指導計画の作成に関する講義の翌週を指導案検討会とし、模擬授業の指導計画を作成してくることを課題とする。検討会で学生同士に指導計画を交流させ、それを受けて修正した指導計画を元に翌週の授業で模擬授業を行う。また、学生同士に交流させることにより、他の学生の指導計画の良い点を自身の指導計画に取り入れ、模擬授業に反映させることができるのも利点である。

【テーマ設定の具体例】

- ・コアカリキュラムの学習項目をテーマとして設定する
- ・小学校教員による実際の授業を視聴して模倣する
- ・多くの教科書で扱われている題材や言語材料をテーマとして設定する
- ・外国語活動の模擬授業と外国語科の模擬授業をそれぞれ行う

【解説】

1つ目は、コアカリキュラムの学習項目をテーマとする例である。先述のように、模擬授業はコアカリキュラムの「指導技術」及び「授業づくり」に関する知識と関係が深い。これらの領域に含まれる学習項目をテーマとして模擬授業を行うことで、理論と実践の結びつきをより強めることができると考えら

れる。例えば、「指導技術」の〔英語での語りかけ方〕がテーマの模擬授業であれば、スモールトークや単元初回の活動など、教師による語りかけが中心となるだろう。また「授業づくり」からは〔ALT等とのチーム・ティーチングの在り方〕や〔ICT等の活用の仕方〕などをテーマとして設定できるだろう。

2つ目は、授業観察と模擬授業を連携させる例である。事前に視聴した授業映像の一部、または全部を模倣して、学生が模擬授業を行う。授業展開があらかじめ決まっているので、指導技術に焦点を当ててディスカッションや振り返りを行うことができる。また、視聴した授業を模倣するため、学生も模擬授業に取り組みやすい一方で、映像通りに進まなかった部分に焦点を当ててディスカッションや振り返りを行うことで、現在の自分に不十分な指導技術を意識化することができる。

3つ目は、多くの教科書で扱われている題材や言語材料をテーマとする例である。例えば*What do you want to be? / I want to be...*という表現は全ての教科書で扱われており、教育実習や実際に教員になってからの授業で学生が授業をする可能性が高い。教科書を元にして模擬授業を行う際には、教科書にあらかじめ設定されている活動だけを行うのではなく、その単元の題材を用いる言語活動を学生自身に考えさせることが肝要である。

4つ目は、中学年の外国語活動と高学年の外国語科で、別個に模擬授業を行う例である。外国語活動と外国語科では、児童の発達段階や英語への習熟度、認知特性など異なる点が多く、指導上配慮すべき点も異なってくる。模擬授業を行う際には、対象児童の学年や習熟度を教師役の学生に意識させることに加え、児童役の学生がその学年の児童になりきることを非常に重要である。

◆大人数クラスでの工夫

【ペア・グループでの模擬授業を行う具体例】

- ・ペアまたはグループで学習指導案を作成し、代表者が模擬授業を行う
- ・ペアまたはグループで学習指導案を作成し、全員が役割分担をして模擬授業を行う

【解説】

2～6人程度のペアまたはグループで1つの学習指導案を作成し、模擬授業を行う事例である。例えば、学生を6つのグループに分け、1回の講義で2グループが模擬授業を行うようにすると、計3回の講義で全グループが模擬授業を行うことができる。グループ内の学生1名のみが指導者となる例、複数の学生がリレー形式で指導を行う例、複数の学生に担任教員、ALTなどの役割を与え、チーム・ティーチングを行う例などがある。しかしながら、いずれの方法に依っても、全ての学生が授業者となって実際に模擬授業を行うことは難しい。また、講義時間の都合から45分間の授業全てを模擬的に行うことは難しい場合が多く、後述のマイクロティーチングの形となる場合が多い。

ペア・グループでの協働学習とすることで、より深く、多様な考えのもとに授業を立案する機会を学生に提供することができる。一方で、講義の時間内に指導案検討や模擬授業準備を全て行うことは困難であり、授業外にグループなどで集まって準備を行うことが学生にとって過度な負担となる可能性がある。また場合によっては、一部の学生に負担が集中することも考えられる。課題の設定やグループの分け方に工夫が必要であるとともに、同一グループの学生でも指導案作成や模擬授業への貢献度が異なる可能性があることを踏まえて評価を行う必要がある。

【マイクロティーチングを行う具体例】

- ・与えられた題材や言語表現を用いた10分程度の活動を考え、模擬的に実施する
- ・1授業分の学習指導案を立案し、その一部を模擬的に実施する

【解説】

5～10分程度の活動1つを模擬的に行う活動を「マイクロティーチング」という。学習指導案を作成させるのではなく、題材や言語表現（例えば、What's this? を扱う活動、できることを扱う活動）をテーマとして学生に示して活動を考えさせることで、比較的手軽に実施できる。また、各学生に学習指導案を立案させた上で、指導案中の一部の活動を行わせることもできる。学生1人あたりの時間が短いため、30名程度のクラスであれば、講義2回程度で全員がマイクロティーチングを行うことができる。人数が多いクラスの場合には、学生を5人程度のグループにわけて、1人が授業者、残りの学生が児童役となってマイクロティーチングを行うことも可能である。

学習指導案を作成させない場合、比較的講義の前半に実施できることも利点の1つである。また上述のペア・グループでの模擬授業と組み合わせて、講義前半に全学生によるマイクロティーチング、講義終盤にグループによる模擬授業を位置づけている事例も見られた。

◆振り返り

【振り返りの具体例】【学生相互に評価させる事例】

- ・児童役 of 学生が授業者に対してコメントする
- ・児童役 of 学生が模擬授業を評価する
- ・学生からのコメントを元にディスカッションを行う
- ・模擬授業映像を Web 上にアップロードし、授業者に視聴させる

【解説】

1つ目から3つ目は、児童役 of 学生が模擬授業を評価したり授業者に対するコメントを与えたりする例である。児童役 of 学生は児童の視点と教師の視点の双方をもって授業に参加する必要があるため、より多角的に授業を捉えることができるようになる。模擬授業直後にディスカッションの時間を設けて学生同士に意見交流させる方法や、コメントシートを記入させて授業者に手渡す方法などがある（図1を参照）。また、Web上のアンケートフォームなどに記入させて即時的にコメントを集約することにより、学生からのコメントをスクリーンに映しながらディスカッションを行うことが可能となるほか、コメントを学生全員に配布することが容易となる。いずれの場合においても、授業観察の視点を学生に事前に提示しておくことが有効である。

4つ目は、模擬授業の映像を録画して Web 上にアップロードし、授業者に映像を視聴した上で授業を振り返らせたり指導案を改善させたりする例である。授業の振り返りに際して授業者が自らの授業映像を見返すことによって、より客観的に自らの授業を捉えさせることができる。また、模擬授業直後にビデオカメラから録画データをパソコンに取り込み、スクリーンに映像を映しながらディスカッションを行うことも可能である。

言うまでもないが、模擬授業映像を Web 上にアップロードする際には、学生の肖像権などに配慮する必要がある。動画共有サイトの限定公開の機能を用いて URL を知っている者のみが視聴可能にすること

や、大学のLMSのように教師と学生のみがアクセスできるサイトにアップロードすべきである。その上で、学生には映像やスクリーンショットをむやみに拡散しないように注意を促す必要がある。また授業映像を視聴しての振り返りについても、前事例と同様に振り返りの学生に示すことでより焦点化した振り返りが可能となる。

日付	専攻	学生番号	氏名
----	----	------	----

グループ []

よかった点	改善点・感想など

日付	専攻	学生番号	氏名
----	----	------	----

グループ []

よかった点	改善点・感想など

図1 コメントシートの例

◆まとめ

本項で示した事例は一長一短あり、講義を受講している学生の様子や人数などに応じて、模擬授業の形態を選択することが望ましい。また、複数の事例を組み合わせることもできよう。模擬授業は、講義を通して学んだことが実際に指導場面に生かされているかを評価する場面にもなる。どのような形で模擬授業を行う場合でも、指導法の知識や考え方に裏打ちされた模擬授業でないと、深い学びの機会とはならないだろう。

2.2 専門的事項に関する科目

<1>シラバス

【①授業実践に役立つ英語力の向上と専門的な知識を連動させて単独の教員が指導する具体案】

1	授業実践に役立つ英語力 「聞く・話す」	主教材を用いた活動（第二言語習得：リスニング・スピーキング能力とは）
2		主教材を用いた活動（音声：音素・プロソディー）
3		主教材を用いた活動（第二言語習得：聞くことから話すことへ）
4	授業実践に役立つ英語力 「やり取り」	Small Talk・効果的なインプット（第二言語習得）
5		発話の引き出し方（第二言語習得）
6		ALTとの会話（語彙・文法）
7	授業実践に役立つ英語力 「読む」	音と文字の関係・アルファベットの指導（音声・語彙）
8		主教材を用いた活動（文構造）
9		絵本の読み聞かせ・歌や詩の活用（音声・語彙・異文化理解）
10	授業実践に役立つ英語力 「書く」	ALTとの書面でのやり取り（語彙・文法・正書法）
11		板書・プリントの作成（語彙・文法・正書法）
12		発表原稿の作成（語彙・文法・正書法）
13	授業実践に役立つ英語力 「発表」	子どもの第二言語習得をテーマに
14		異文化交流活動（日本紹介・異文化紹介）をテーマに
15		絵本を使った活動をテーマに
評価（例）	小テスト（「書く」で扱った成果物も含む）40%、「話す・やり取り」のパフォーマンステスト20%、発表20%、期末レポート20%	

【解説】

英語力の向上と継続的な学習方法の習得を主眼とし、その活動内容を題材に専門的な知識を確認していく方法である。学生が授業の具体的なイメージを持ちながら、知識を深めていけるように、主教材やSmall Talkなど実践に活用されているものを扱うとよいだろう。学生の英語レベルに合わせて適宜課題を見直したり、異なるレベルの学生同士で学びあえるような学習環境を設定する必要がある。また、基礎知識を体系的に提示する工夫することで大きな成果が期待できる。

【②専門分野の異なる教員によるオムニバス形式の具体案】

（担当：①英語力 ②英語学・SLA ③文学 ④異文化理解）

1	①授業実践に役立つ英語力：「聞く・やり取り」
2	①授業実践に役立つ英語力：「読む」
3	①授業実践に役立つ英語力：「書く」
4	①授業実践に役立つ英語力：「発表」
5	②英語音声学の基礎（発音の仕方：発音と文字の綴り）
6	②英語に関する基礎的な知識（語彙・文法・文構造）
7	②第二言語習得の基礎
8	②第二言語習得理論の実践への応用
9	③児童文学（絵本）
10	③児童文学（歌）
11	③児童文学（詩）
12	④異文化理解のための基礎知識
13	④主教材での異文化理解の扱いと指導法

14	④小学校での異文化交流活動（指導案の分析やビデオ視聴）
15	授業実践に必要な英語力と基礎的な知識：振り返り
評価（例）	①小テスト・パフォーマンステスト25%、②小テスト25%、③小テスト・パフォーマンステスト25%、④小テスト・振り返りレポート25%

【解説】

深い専門知識を持った教員が担当するので、各分野の知識理解を深めることを主眼としているが、授業実践とどう関連づけるかを各担当教員が意識することでより大きな成果が期待できる。1つの授業を専門分野の違う教員が複数で担当することも可能だろう。また、授業形式や評価に大きな差が出ないように、担当教員間で情報を交換するための定期的な場を設けるなどの工夫が必要だろう。

【③1単位の授業具体案：①の具体案をもとに】

1	授業実践に役立つ英語力 「聞く・話す」	主教材を用いた活動（第二言語習得：リスニング・スピーキング能力とは）
2		主教材を用いた活動（音声：音素・プロソディー）
3	授業実践に役立つ英語力 「やり取り」	Small Talk・効果的なインプット（第二言語習得）
4		発話の引き出し方（第二言語習得）
5	授業実践に役立つ英語力 「読む」	音と文字の関係・アルファベットの指導（音声・語彙）
6		絵本の読み聞かせ・歌や詩の活用（音声・語彙・異文化理解）
7	授業実践に役立つ英語力 「書く」「発表」	ALTへの連絡や板書・プリント作成（語彙・文法・正書法）
8		授業で扱った内容からテーマを選び発表
評価（例）	小テスト（「書く」で扱った成果物も含む）50%、「話す・やり取り」のパフォーマンステスト20%、発表10%、期末レポート20%	

【④1単位の授業具体案：②の具体案をもとに】

（担当：①英語力 ②英語学・SLA ③文学 ④異文化理解）

1	①授業実践に役立つ英語力を向上させる「聞く・やり取り・発表」
2	①授業実践に役立つ英語力を向上させる「読む・書く」
3	②英語音声学の基礎・英語に関する基礎的な知識（語彙・文法・文構造）
4	②第二言語習得の基礎
5	③児童文学（絵本）
6	③児童文学（歌・詩）
7	④異文化理解のための基礎知識
8	④主教材での異文化理解の扱いと指導法
評価（例）	①小テスト・パフォーマンステスト25%、②小テスト25%、③小テスト・パフォーマンステスト25%、④小テスト・振り返りレポート25%

【解説】

③④ともに①②を1単位で扱う例である。時間数が少ないので、内容の焦点を絞り効率的に授業を運営する必要がある。1つの授業を専門分野の違う教員が複数で担当することも考えられる。授業外での課題やそれに対するフィードバック・授業の振り返りや学生同士のディスカッションをWeb上で行う（MOODLE / Google Classroomなどの活用）工夫も検討に値する（指導法シラバスの具体例⑥も参照）。

【⑤専門的な知識を習得する講義と4技能統合型活動を組み合わせた具体案】

1	英語音声学の基礎（発音の仕方：発音と文字の綴り）
2	英語に関する基礎的な知識（語彙・文法・文構造）
3	第二言語習得の基礎
4	第二言語習得理論の実践への応用
5	児童文学（絵本）
6	児童文学（歌・詩）
7	異文化理解のための基礎知識
8	小学校での異文化交流活動（指導案の分析やビデオ視聴）
9	4技能（5領域）の詳細と関係性
10	4技能統合型活動の計画の立て方・活動例の具体
11	4技能統合型の学習活動を計画する（最終的な課題を明確にし、協働学習を取り入れながら、4技能の扱い方を検討する）
12	学習活動計画を全体で共有し、修正する。
13	4技能統合型活動の発表と検討会
14	4技能統合型活動の発表と検討会
15	4技能統合型活動の発表と検討会
評価（例）	小テスト30%、授業への積極的な参加20%、発表30%、期末レポート20%

【解説】

前半で専門的な知識を深め、後半では4技能5領域を個別の授業で扱うのではなく、統合型の活動を設計し体験することを通して、指導者としての英語力の向上も目指している。中学年の外国語活動を発展させて高学年の4技能統合型の外国語科の授業を計画するよう促すことなども考えられる。具体的には、「聞く」（関連表現のインプット）→「聞く・話す」（やり取り）→「聞く・話す・読む」（やり取りに文字を導入）→「書く・話す」（書いたものについて意見交換）→「発表する・聞く・話す」（発表を共有し、意見交換）という流れを計画した上で、例えばWelcome to Japan!の単位では、地域や日本の魅力について教師による例示や資料をもとにグループで話し合い、発表したり、ALTや留学生に対して発表したり、地域を訪れる海外からの観光客向けの簡単なマップ作りなど工夫すれば相手意識をもたせることができるだろう。This is my hero.の単位ならば、自分のヒーローについて話す他の人の例を聞き、ヒーローの資質や行動などについて考えをまとめ、自分のヒーローを発表する。発表した後で、自分と友達のヒーローを比較したり、同じ分野の人物をまとめて本を作る〈歴史上の人物、職業別や国内・海外で活躍する人など〉といった発展的な活動もできる。このような展開を行う場合、協働学習を促すための工夫（役割の明確化・プロセスの可視化など）や評価場面や評価活動の工夫についても解説する必要があるだろう。いくつかの具体案を提示したが、専門的事項の科目では、各専門的内容が授業とどのように関連しているのか（授業にどのように役に立つのか）を意識して内容を精選し、限られた時間内で英語力向上も促せるような活動を入れるなどのシラバスの工夫の必要性がますます高まっている。

※参考になっているテキスト・資料の例（学習指導要領・主教材は除く）

- ・大学独自に作成したテキスト・リソース・ネットワーク
- ・『小学校英語 はじめる教科書』（MPI）
- ・『小学校英語教育法入門』（研究社）
- ・『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』（三省堂）
- ・『小学校教室英語 先生のための英語練習ブック』

- ・『先生のための授業で1番よく使う英会話 ミニフレーズ300』
- ・『新編 小学校英語教育法入門』(研究社)
- ・『Bright and Early』(南雲堂)
- ・『総合英語 Evergreen』(いいずな書店)
- ・『改訂版 キクタン英検2級』(アルク)
- ・『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』(文部科学省)
- ・『小学校英語のためのスキルアップセミナー—理論と実践を往還する—』(開拓社)
- ・『外国語学習の科学』(岩波書店)
- ・『英語学習は早いほど良いのか』(岩波書店)
- ・『英語教師のための第二言語習得論入門』(大修館書店)
- ・『ことばの力学』(岩波書店)
- ・『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波書店)
- ・『「日本人と英語」の社会学』(研究社)
- ・『英語教育幻想』筑摩書房
- ・『MINERVA はじめて学ぶ教科教育 5 初等外国語教育』(ミネルヴァ書房)
- ・『キホンの15フレーズから始める小学校教室英語 先生のための英語練習ブック』(アルク)
- ・『プロジェクト学習の基本と手法』(教育出版)
- ・『小・中学生の英語カルタ & アクティビティ 30』(明治図書)
- ・『小学校教員を目指す人のための外国語(英語)教育の基礎』(明星大学出版)
- ・『小学校英語内容論入門』(研究社)
- ・『英詩理解の基礎知識』(金星堂)
- ・『マザー・グース事典』(北星堂書店)
- ・『小学校英語教育の進め方』(成美堂)
- ・『All English できるアクティブ・ラーニングの英語授業』(学陽出版)
- ・『小学校英語教育概論』(美巧社)
- ・『小学校英語活動アイデアバンク ソング・ゲーム集』(教育出版)
- ・『続 小学校英語活動アイデアバンク チャンツ・ゲーム・コミュニケーション活動・プロジェクト集』(教育出版)
- ・『小・中学校で英語を教えるための必携テキスト』(東京書籍)
- ・『英語の読み書きが困難な児童生徒への指導～音韻認識とデコーディングを中心にした学びのステップ』(ジャパンライム)
- ・『アメリカの教室に入ってみた：貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで』(ひとなる書房)
- ・『発達が気になる子への読み書き指導ことはじめ』(中央法規)
- ・『はじめてのジョリー・フォニックス ティーチャーズブック』(ジョリーラーニング社)
- ・『小学校外国語活動の進め方—「ことばの教育」として—』(成美堂)
- ・『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』(大修館書店)
- ・『プロジェクト型外国語活動の展開—児童が主体となる課題解決型授業と評価—』
- ・『ファンダメンタル英語学』(ひつじ書房)
- ・『Intercultural Communication for English Language Learners in Japan—英語学習者のための異文化コミュニケーション』(南雲堂)

- ・『英語教育論争から考える』（みすず書房）
- ・『How languages are learned』（Oxford University Press）
- ・『小学校外国語活動 基本の「き」』（大修館書店）
- ・『小学生に英語の読み書きをどう教えたらいいか』（研究社）
- ・『英語学習のメカニズム：第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』（大修館書店）
- ・『読み書きが苦手な子どものための英単語指導ワーク』（明治図書）

<2>英語学

【英語学の指導 具体案①】

- ・実践的活動を通して、音声、語彙、文構造、文法などに関する基礎的な事項を身につけさせる

【解説】

教科の専門的事項に関する授業の中で、将来「外国語」を担当することのできる英語力を高めていくことも重要な側面である。音声、語彙、文構造、文法、正書法などを扱う際にそれらの基礎的な知識の理解だけで終わるのでなく、教師の立場で将来英語を用いることを想定した実践的な活動を取り入れることで英語力向上につなげることができる。

実践的活動としては、さまざま想定されるが、例えば、Small Talkや児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩など）などの読み聞かせは、教師が英語を使う必要がある活動である。Classroom Englishは、毎回の授業で教師が使う英語なので必要な場面で使えるようにしておく必要がある。例えば、『小学校外国語・外国語活動研修ガイドブックー授業研究編IIー』に掲載されているClassroom Englishなどの発音練習を行いながら、音声、文法、語彙などに関する解説を行うことが可能である。また、掲載されている英語表現は、YouTubeのMextchannelで音声を聞くことも可能であり、授業外の課題を設定することもできる。

Classroom Englishの1つとして、挨拶の表現であるGood morning.を取り上げる。高橋（2020）は、次のように解説している。

「Good morning. は元々 I wish you a good morning. 「私はあなたにとって良い朝になることを祈っています」という二重目的語構文が慣習化によって I wish you a の部分が省略された慣用表現、I wish はその後 a merry Christmas/ a happy new year など様々な相手の幸を願う表現があるので、I wish は慣用化されて省略され、さらに会話冒頭では冠詞の省略も慣用化されていることによる。朝のあいさつなので1日の初めに顔を合わせたときに使われる。Good より morning に強い強勢が置かれ、Morning だけでも軽いあいさつとして可能。Morning より Good に強い強勢が置かれ、上昇調（rising intonation）で発音されると、（「まれ」）であるが、朝の別れのあいさつになってしまう。」（p. 122）

このような解説は、教師が自ら英語を用いる際に背景的知識として役立つと考えられる。

【参考文献】

高橋潔. (2020). 「文部科学省『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』のクラスルーム・イングリッシュに関する研究ノート」『宮城教育大学 教育キャリア研究機構紀要』第2巻, 121-135.

【英語学の指導 具体案②】

・『小学校外国語・外国語活動研修ガイドブック』の授業研究編Ⅱに掲載されている Small Talk を参照して、音声、語法、文法、談話文法的視点から解説する

【解説】

英語学の実践事例として、Small Talk と関連づけて、英語学的に解説を加えるという方法がある（高橋，2019）。Small Talk とは話すこと [やり取り] に関する言語活動であり、初期の段階では教師が主となってあるトピックについて語りかけ、児童とやり取りをする形式となっている。授業で扱う際には、このような語りかけややり取りを児童と行うことになることを説明することによって、具体的な授業のイメージを持たせながら、英語学について学ばせることができる。

例えば、次は、ある Small Talk の冒頭部分である。

Hello, everyone. My name is Takeshi. T-A-K-E-S-H-I. Takeshi.

Nice to meet you. I'm from Takayama.

I like pizza. Pizza is delicious. But I don't like sweets. I don't like candy.

この英語について、高橋（2019）は、次のような解説を加えている。まず、T-A-K-E-S-H-I. Takeshi. に関して、日本語と英語の音声の違いや、名前を伝えるときの注意点を説明している。

「ここでは日本人教員が日本人児童に名前を伝えているのでこれでかまわないが、英語では CVC（子音・母音・子音）が音節の基本なので、英米人は名前を伝えるとき通例 3 文字ずつ伝える。英語では強勢の位置が重要なので、Takeshi の場合なら、後ろから 2 つ目の母音に強勢を置くのがよい。日本語が CV が基本音節だからと Ta-ke-shi などと英語母語話者に綴りを伝えようと、2 文字ずつ伝えられることに慣れていないので、英語母語話者に伝わらなかったり、誤解されたりすることが多い。電話などで名前を伝えるときには特に注意が必要である。」（p. 113）

Nice to meet you. について、次のように統語論的な解説を加えている。

「It is nice to meet you. の形式主語 It is が省略されている。形式主語 it は to 不定詞 (to-infinitive) を指している。to 不定詞ではなく動名詞 (gerund) にすると、(It's been) Nice meeting you. は別れのあいさつ。」（p. 113）

I'm from Takayama. について、語用論的な点から、次のように説明している。

「名前を名乗ったあと、出身地 (from ~) や自分の好きなものなどを相手に伝えるのは、英語母語話者ではごく普通の紹介事項。日本人の場合、あいさつの後、「よろしくお願いします」といった表現が続く場合が多いが、「よろしくお願いします」に語用論上対応する英語表現は無いため、負の語用論転移 (negative pragmatic transfer) が生じやすい。「よろしくおねがいします」がどのような場合にどのような英語表現になるか、具体的には、高橋（2002）を参照。また、日本人は自己開示 (self-disclosure) を苦手と感じる人が多く、あいさつのあと何を話したらよいのかわからなくなる人もいることにも注意。」（p. 113）

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

また、delicious に関しては、音声面から説明している。

「delicious は de-II-cious で第2音節に強勢があることに注意。（以下、強音節の母音は大文字標記する。）」(p. 113)

最後に、candy については、語彙の面から、日本語と英語の違いについて言及している。

「candy は日本語の「キャンディー」より意味の範囲が広く、甘い菓子一般を指している。」(p. 113)

この事例を応用すると、令和3年度より小学校英語の検定教科書が使用されているが、検定教科書で扱われている英語を参考にして英語学的に解説することで、受講生が小学校外国語科で扱われる言語材料について知識を得るだけでなく、その英語の背景にある音声、語彙、文法などの知識を深めることにつながると考えられる。

【参考文献】

高橋潔. (2019). 「文部科学省『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』の Small Talk に関する研究ノート」『宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要』第1巻, 111-121.

【英語学の指導 具体案③】

- ・日本語と英語の違いに着目して指導する

【解説】

小学校学習指導要領では外国語の目標として、「知識及び技能」に関して「(1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身につけるようにする」(下線追加)と書かれている。このことから、日本語と外国語の違いの観点から、英語学の内容を扱うことが重要である。

例えば、音声の点から、守屋 (2017) は、日本語と英語の音声の違いに着目して、個々の音素や、子音連鎖、プロソディー、注意すべき発音について解説している。日本語の「さ」行音の子音は「さ」「す」「せ」「そ」では [s] であるが、「し」は [ʃi] と発音するため、日本語には [si] は存在しない (p54) という説明は、英語の see と she の発音の違いに気づかせるだけでなく、ヘボン式ローマ字表記を指導する際にも使える知識である。また、田中 (2017) は、文法の点から、複数形の作り方について、日本語と英語の違いを解説している。英語の場合には、girls は、girl + girl + girl… であるが、日本語の場合には異種類のものを含む複数を許容する近似複数をとるため、男の子が含まれていても「少女たち」と言えることや、「太郎たち」という言い方が可能であることを指摘している。

【参考文献】

守屋哲治. (2017). 「英語の音声」酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(pp. 45-54). 三省堂.

田中江扶. (2017). 「英語の文法」酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(pp. 45-54). 三省堂.

【英語学の指導 具体案④】

・正書法について日本語と英語の違いに着目したり、学生が間違いやすいところを取り上げたりして指導する

【解説】

小学校教員として、英語の文字を適切に書けるようになることは重要である。読む活動や書く活動のために、黒板に英単語や英文を書くこともあるし、プリントで提示することもある。また、英語を用いながら指導案を作成することもある。正書法に関しても、日本語と英語の違いに着目したり、学生が間違いやすいところを取り上げたりして指導することが可能である。例えば、大名(2017)や大名・亘理(2017)は、英語の文字や書き方の特徴を日本語との違いの点から解説している。

【参考文献】

大名力. (2017). 「英語の文字」酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(pp. 56-63). 三省堂.

大名力・亘理陽一. (2017). 「英語の書き方」酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(pp. 78-90). 三省堂.

<3>英語文学**【英語文学の指導 具体案①】**

・児童文学(絵本や子ども向けの歌や詩)の朗読活動を取り入れながら指導する

【解説】

朗読活動を取り入れながら指導する。絵本の付属音声CDを用いた音読や、学生同士で読み聞かせを行うなどして、継続的に練習を行う必要がある。特に、押韻や、語句や文に置かれる強弱を適切に発話する練習を行い、英語独特の強勢拍リズムが生まれる読み方を心がけさせる。このような実践的な活動を行うことで、児童文学を教室で使う際に知っておきたい知識や背景を知ることになるであろう。

【参考文献】

林裕子(2019)「児童文学等題材の選定」中村典生(監)鈴木渉・巽徹・林裕子・矢野淳(著)『コアカリキュラム対応 小・中学校で英語を教えるための必携テキスト』(pp.121-127)東京書籍

◆英語文学の指導具体案②

・複数の絵本を示して、内容に基づいてグルーピングをさせる。その上で、児童のための絵本の選択の視点を解説する。音声、語法、文法、談話文法的視点から解説する

【解説】

代表的な児童向けの絵本を学ぶことも有用である。指導においては、複数の絵本を配布し、その内容に基づいて分類させてから、児童のための絵本の選択の視点を解説するなどの事例がある。複数の絵本を手取る中で、学生自身が幼少期に親しんだ英語からの和訳絵本に、原語で触れる機会も生まれ、訳とのニュアンスの違いを味わう経験に資することも期待できる。

【英語文学の指導具体案③】

- ・児童文学（絵本や子ども向けの歌や詩）を通して、言葉の奥深さや多様な文化を指導する

【解説】

竹森（2019）によれば、英語文学を教材とした学習に期待されるものは、語学的側面と文化的側面に大別される。語学的側面とは、文学的姿勢を身につけることにあるという。文学的姿勢とは、言葉を表層的に捉えるのではなく、その向こうにもしかしたら別の意味が隠れているかもしれない、そう考える余地を持ち続けながら言葉に向き合うことを指している。この文学的姿勢が、書き手、話し手の立場や意図をよく考えながら言葉や表現を理解する、あるいは、読み手、聞き手の存在を十分に意識しながら言葉や表現を用いるという態度の涵養にもつながるであろう。

英語文学を教材とした学習に期待される文化的側面とは、文学作品を読むことが文化理解の入り口になるということである。描かれている挿絵を通して、異文化に気づかせることもできる（竹森，2019）。例えば、子どもたちが家の中でくつを履いている挿絵を通して日本との生活習慣の違いに気づいたり、食卓の風景をとおして食文化の違いに興味を持つきっかけになったりすることを養成段階で理解しておくことに意義があると考えられる。

英語文学を教材として扱うことで、外国語や異文化に対する親しみや実感もわいてくるのではないだろうか。

【参考文献】

竹森徹士（2019）「英語文学の理論」鈴木渉・西原哲雄（編）『小学校英語のためのスキルアップセミナー—理論と実践を往還する—』（pp. 136-151）開拓社

【英語文学の指導 具体案④】

- ・国語で扱われている児童文学（絵本や子ども向けの歌や詩）を扱う

【解説】

教科横断の観点から、国語など他の教科などで扱われている文学作品が英語教育の中で扱われることがある。そのような作品を取り上げて、文学の扱い方や異文化理解などの点から指導する事例がある。例えば、友田（2017）は『おおきなかぶ』を取り上げて、文学、比較文化などの点から解説をしている。ほかにも、レオ・レオニのSwimmyやアーノルド・ノーベルのThe Letterなどの作品を扱うことが考えられる。

【参考文献】

友田義行．（2017）．「英語教育と国語教育で扱われる児童文学」酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』（pp. 175-183）．三省堂．

< 4 > 異文化理解

異文化理解の授業では、学習指導要領（文部科学省，2017）における異文化理解のとらえ方を軸に据えた指導、検定教科書や教材の題材を使った指導（異文化交流体験やビデオ視聴も含む）、学生自身の異文化理解に関する知識や態度、価値観をふりかえることを通して考えを深めさせる指導などが可能である。

【学習指導要領における異文化理解のとらえ方を軸に据えた具体案】

学習指導要領で異文化理解に関する事項はどのように解説されているのかを読み合わせを行い、具体例を示しながら解説するとわかりやすい。学習指導要領では、小学校外国語活動・外国語の目的は、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語の4技能の言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地(外国語活動)・基礎(外国語科)となる資質・能力を育成すること、とされている。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景ある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」(前掲、p.67:下線追記。以下同様)とされている。表1は、外国語によるコミュニケーションの見方や考え方を働かせた異文化交流体験の学習場面の一例である。

表1 外国語によるコミュニケーションの見方や考え方を働かせる場面の例

相手	カナダ出身のALT(中国からの留学生やブラジルの背景をもつクラスメートなど)
場面・状況	日本に来たばかりなので、学校や地域のことを知ってもらうための歓迎会をする。
目的	歓迎会を開くために、相手の好き嫌いや、日本(地域や学校)について知りたいこと、今困っていること等を知る質問をし、相手の答えに合わせた工夫を考える。
文化や言語への配慮	・相手に分かる言語でどう表現したらいいのだろう ・言語で伝えきれないことは、どうやって伝えられるだろう(視覚情報・非言語コミュニケーションなど)について考える。
社会や世界、他者との関わり	・身の回りの物でカナダ(中国やブラジル)から来ているものはあるだろうか ・日本とカナダ(中国やブラジル)の関係はどのようになっているのだろうか、などについて調べる。
再構築(意識や行動の変化)	外国語で書かれている学校周辺の地図がなくて困っていることを知って、みんなで協力して外国語の地図を作ることを計画する。

このように実際に異文化を体験する機会は非常に重要だが、地域や学校の状況によっては設定が難しい場合もあるので、そのような場合には教材の選定や扱い方を工夫することが肝要であることを指摘する必要がある。学習指導要領の教材選定の観点には以下のように書かれている。これらの観点や次に続く解説などを踏まえ、適切な教材・題材についてディスカッションをしたり、実際の教材を提示・比較しその適切さについて検討するといった活動ができる。

《教材選定の観点》

イ 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然などに関するものの中から、児童の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点到に配慮すること。

(ア) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てることに役立つこと。

(イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと。

(ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うことに役立つこと。(前掲、pp.133-135)

世界の多様な生活様式やその背景にある歴史や地理・伝統などについて、特に視覚教材（写真や映像）などを用いて提示することで、多様な言語や文化との共通点・相違点を発見し、自分が「当たり前だと思っていること」を再考するきっかけとなる。このように自分の言語や文化を振り返り、批判的・多角的な視点を身につけることができるように、教材を選定・提示することが肝要だ。

（ア）多様な考え方に対する理解を深め公正な判断力を育成するためには、自分とは異なる多様な考え方に対して「どうしてそう思うのだろう」と相手の状況や立場といった背景を考える努力を促し、特に小学校段階では相手に共感できる態度（例：もし同じ立場だったらどう思うだろう）を育てることが肝要だ。このような態度は、公正な判断力（例：学校に行けない子どもたちの教育を受ける権利は尊重されていない）を育成する基盤となり、（ウ）の観点にもつながっていく。

（イ）多様な文化への理解を深めることで、「文化（言語）に優劣はない」という文化（言語）の等位性に気づくことができるようになるだろう。英語は国際語として広く使用されているが「外国語は英語だけが大切だ」（あるいは「英語圏の文化だけがカッコいい」）といった偏った見方を児童が持たないようにすることが大切だ。このことによって、多様な文化の1つである自分の文化（や考え）を発信し、同じように相手の文化（や考え）を受容しようとする相互文化的な交流を目指す態度を養うことができるだろう。

（ウ）国際協調の精神を養うためには、（ア）（イ）で培った多様性への寛容さや共感・言語や文化の等位性への気づきを基盤にして、環境や人権・格差や差別といった国際協調なくしては解決が来ないような地球的規模の課題にも目を向けていくことが必要になる。外国語を学ぶことは、児童の視点を学校や地域といったローカルな事柄から国を超えたグローバルな枠組みへと広げ、両者の関連性を理解し「グローバル」に行動できる人間を育てることにつながる。

ただし、児童の言語レベルや発達段階を考慮し、外国語活動・外国語では、児童の視点を世界へと広げるきっかけ作りや、外国語しか通じない相手に発信するための意味のあるコミュニケーション活動（そのための知識やスキルの習得）に重点を置き、学習内容の深い理解や振り返り活動などは、適切な方法で他教科などの時間も活用し、母語で補う必要があることにも留意しなければならない。

【検定教科書や教材の題材を使って指導する具体案】

学習指導要領の教材選定の観点（ア）（イ）（ウ）を参考に、異文化理解に関連する外国語教育の目標は、以下のようにまとめられる。

- 1) 多様性への対応：自分のまたは異なる言語や文化への理解を深め受容的・共感的態度を育成する
- 2) 理解から発信へ：相手意識をもって発信できる力を育成する
- 3) 国際協調のために：地球的課題に意識を向け、解決に向けて行動できる素地をつくる

これらの目標に沿って主教材を使った具体的な指導法と留意点について解説し、学生を児童に見立て授業を体験させる、あるいは学生自身が授業を計画し模擬授業を行うとすることができる。以下に具体例を示す。

1) 多様性への対応：自分のまたは異なる言語や文化への理解を深め受容的・共感的態度を育成する

外国語活動の主教材である *Let's Try!* では、様々な言語のあいさつ・数の数え方を紹介したり、虹・گریーティングカード・遊び・放課後や週末の過ごし方・かばんの中身・学校生活などが取り上げられている。この発達段階では、体験的活動（あいさつをする・数を数える・遊びをする・カードを作る、など）を通して異なる言語や文化への関心を高めることや、共通点や相違点に気がつけるような言葉がけを

すること（例：日本にも同じように遊びがあるかな？同じ遊びだけど違う方法ですることがあるかな？）が肝要である。留意点としては、児童の異文化に対する否定的な反応（例：「こんなの変」「やりたくない」）を軽視したり拒絶したりするのではなく、「どうしてそう思うの？」といった言葉がけで自分の価値観やものの見方を振り返る機会を与えたり、外国の人から「こんなの変」と思われるような日本の習慣や文化がないだろうかと問いかけたりするなどして、多角的な視点や寛容な態度を身につけるきっかけとなるように支援するとよい。

外国語の主教材（検定教科書）では、世界の子どもたちの生活（学校生活や行事・日課や週末の過ごし方）・世界の祭り・行事・観光資源（世界遺産などの観光地や食べ物・特産品）、海外で使われる日本語、多様なスポーツ・非言語コミュニケーション（ジェスチャーの違い）などがテーマとして取り上げられ、児童の理解を促すために写真や映像が多用されている。こうした視覚資料を有効に活用して、児童と英語でやり取りをしながら興味を引き出し、「外国語でコミュニケーションする相手」をイメージして発信する活動につなげられるよう支援するといいたいだろう。（表2参照）。

表2 主教材を使った具体的な指導法と留意点の例

教科書・単元名	学習内容	具体的な指導法の例	留意点
<i>New Horizon Elementary 6</i> Unit 2 How is your school life? <Starting Out> pp.14-15	France, U.S.A., Japan, Kenya, Bangladesh, Australia, Mongolia など様々な国の子供たちが自分の宝物とともに夏休み・新学期の始まり・学校への行き方・好きなスポーツ・教科・時間割・1日のスケジュール・家の仕事などを紹介するのを見て、該当する写真を選ぶというリスニングタスク。	・リスニングの前に、写真について質問をしたり（What color is the bus?）、どこの国の写真か予想させたり（What country is this?）して、興味を持たせる。 ・全部で8のタスクがあるが児童の実態に合わせて興味のあるものから取り上げる、焦点を絞って聞かせるなどの調整をする（Which picture are you interested in?）。	児童が「その国の子どもたちは全員そうしている」などと提示した資料を一般化しすぎないように、日本国内にも多様性があることを例にして、各国内の多様性にも触れるといいたいだろう。
<i>Here We Go! 5</i> 世界のともだち3 アルシさん p.117	おばあちゃんがインドに住むインド系イギリス人のアルシさんが、自分のヒーローとしてお母さんを紹介する映像を観て、自分のヒーロー紹介と比較したり、クイズを通してアルシさんの文化的背景を知る活動。	・文字を見せる前に映像からわかったことや音声で聞き取れたことなど質問し、興味を持たせる。 ・文字を確認した後で、自分のヒーローとの共通点や相違点などについて質問する。 ・イギリスに住んでいてもインドの文化を大切にしている点に注目させ、児童が大切にしている自分の文化について質問する。	児童がイギリス人＝欧米人といったステレオタイプな見方をしていたら、アメリカやオーストラリアまた日本国内の多様性などの事例をあげて説明するといいたいだろう。

2) 理解から発信へ：相手意識をもって発信できる力を育成する

検定教科書には Welcome to Japan. / I like my town. などの日本、あるいは自分の住んでいる地域を紹介する、という単元がある。自分の文化（地域）について振り返り、その価値を英語で国外の人に発信する機会になるが、1) 自分の文化（地域）を多面的に捉えなおす、2) 相手意識を持って発信する、ことに注意を向けさせたい。日本人が日本の文化を紹介する際、「日本に特有だと思うもの」、例えば、伝統的な行事・遊び・食べ物などを紹介しようと思うかもしれない。多くの検定教科書でも、New Year's Day, Doll Festival, Star Festival, kendema, karuta, sushi, tempura, green teaなどの日本文化の伝統的な側面が取り上げられている。世界で人気の日本の食べ物（sushi, udon）・英語になった日本語（tofu, jyudo, kimono）などに触れている例もある。*New Horizon Elementary 5*では、日本に住む海外出身の人たちに日本文化につい

てインタビューをした内容を取り上げている（「日本のすてき」）。このように「日本の良さ」を再発見し、自文化を多面的に捉える姿勢を育てることは大切である。教科書に載っていないが自分が紹介したいと思う日本の文化は何か、について児童に質問して、それをクラスで共有することで、様々な日本文化の側面が見えてくるかもしれない。しかし留意点としては、上記した通り「日本の文化だけが素晴らしい」といった偏った見方にならないような工夫が必要だ。例えば、初めて日本に来た人から「日本語で書かれた看板が多くて道に迷った」とか、「コンビニは便利だけどゴミがたくさん出る包装が多い」などと言われたことはないだろうか。自分たちの生活を見直すような自文化の捉え直しや、日本の文化だけではなく相手の文化も尊重するような内容も含めて発信する工夫があってもよい（*We have many convenience stores. But we need to reduce garbage./ Sushi is delicious. I like sushi. But I like bibimbap, too.*）。これが、2) 相手意識を持って発信する、ことにもつながる。

発信活動をする際には、どんな相手に向けて何を話したらいいのか考える必要がある。普通のコミュニケーション場面でも、相手との共通点を見つけて話を進めたり、違いがあるけれども相手のものも尊重する姿勢を見せるといったことをよく行っている。上記の日本や自分たちの町の紹介でも、相手はどんなことを知っているのか（知らないのか）、どんなことに興味があるのか、相手の国との共通点を紹介できないかといった「相手意識」を大切にできる工夫ができるだろう。例えば、発信する相手を *Here We Go!* 6「世界の友達1」に出てくるトルコのニライさんに設定し、「世界遺産のあるカッパドキアに住んでいて、ハローキティが好きで、編み物が得意なニライさんのためにビデオレターをつくらしたらどんな内容にするか」についてグループで話し合わせ、発表方法を考えるといった活動ができる。「カッパドキアに似た日本の世界遺産はあるかな」「ハローキティが好きならキティランドを紹介しよう」といった意見が出るかもしれない。相手が同じでもグループによって違う内容になることもあるので、新たな日本の側面を発見する機会にもなるだろう。このように相手意識を持たせる工夫をすることで、言語学習への意欲を高め、より現実感のある言語活動を設定することができる。

3) 国際協調のために：地球的課題に意識を向け、解決に向けて行動できる素地をつくる

この目標は、学習指導要領の題材選定の観点でも取り上げられているが、直接関連するような学習活動が入っている検定教科書は少ない。「小学校段階では難しい」あるいは「母語で（他教科の時間に）する方が効率的だ」といった見方が背景にあるかもしれないが、小学校段階でも地球的課題に意識を向け、外国語で発信するという行動を起こすための素地をつくることは十分可能である。*New Horizon Elementary* 6では、自分の宝物を紹介する単元で「学校が宝物」というブルキナファソの子どもたちやマララ・ユスフザイさんが紹介されていたり、環境を守るためにできることを *We can--.* で表現する活動があったり、食材の輸入先を考え（*Where is the beef from?*）国際相互依存の関係に気づかせる問いかけをしたりといった工夫が見られる。教科書でこうした内容を直接取り上げていない場合でも、題材や教材を工夫することで英語表現は変えずに地球的課題に目を向けさせることができる。例えば、「自分のヒーローを紹介する」「将来の夢を発表する」活動の中で地球的課題に取り組む人を例に上げるなどが可能だ。（*This is Malala. She is my hero. She is brave. / I want to be a JICA staff. I want to make schools in Africa.*）。留意点としては、児童がこうした話題も自分と関連しているという感覚が持てるような工夫をすることだ。ヒーローや将来の夢を紹介するときには、実際にJICAで働いたことのある人の写真を活用することなどができるだろう。

「地球的課題」は他教科でも取り上げられている学習内容である。他教科との連携を考える際に重要なことは、各教科内容が有機的に結びつくことである。そのためには外国語の授業で、ターゲットとして

いる英語の学習内容とかけ離れることがないように厳選した内容を取り扱い、なぜそういう生活習慣があるのか(地理的・気候的条件や歴史的背景など)については他教科の時間(例:社会科や総合学習)を使って母語で深めていく工夫などができるだろう。例えば、*Here We Go! 5 Unit 3: What do you have on Monday?*の授業を行う際には、オーストラリアのBellaさんのMy name is Bella. My favorite subject is Japanese. という自己紹介を聞き、自分も自己紹介をするという活動を行う。総合の時間や社会科の時間では、Bellaさんが住んでいるオーストラリアで日本語学習者が多いのは、多文化・多言語主義を背景に外国語教育が盛んだから、ということなどに触れ、日本の外国語教育と比較してみる、といったことができるだろう。

【学生自身の異文化理解に関する知識や態度、価値観をふりかえることを通して考えを深めさせる具体案】

教師を目指す学生が、自分の異文化理解に関する知識や価値観、態度(ふるまい)を振り返り、自律的に学び続ける姿勢を持つことは、教師の資質の1つとして重要だ。自身の異文化体験について振り返るツールとしてはAutobiography of Intercultural Encounters(表3参照)、異文化理解を促す英語学習テキストとしてIntercultural Communication for English Language Learners in Japan(英語学習者のための異文化コミュニケーション)などがある。どちらの資料も英語で書かれているので、学生の英語力の向上にも寄与するだろう。自分の知識や態度、価値観に気づくことをきっかけに、継続的にまた自律的に知識・態度・価値観を伸ばしていく姿勢を育てることが大切である。

表3 Autobiography of Intercultural Encountersの質問例

This Autobiography has been designed to help you analyse a specific intercultural encounter which you have experienced. You do this by answering a sequence of questions about various aspects of that encounter.	
Title	Give the encounter a name which says something about it
Description	What happened when you met this person/these people?
Time	When did it happen?
Location	Where did it happen? What were you doing there?
Was it... (please tick one or more) <input type="checkbox"/> study - <input type="checkbox"/> leisure - <input type="checkbox"/> on holiday - <input type="checkbox"/> at work - <input type="checkbox"/> at school - <input type="checkbox"/> other -	
Importance	Why have you chosen this experience?
Was it because... (please tick one or more) <input type="checkbox"/> It made me think about something I had not thought about before <input type="checkbox"/> It was the first time I had had this kind of experience... <input type="checkbox"/> It was the most recent experience of that kind . <input type="checkbox"/> It surprised me <input type="checkbox"/> It disappointed me <input type="checkbox"/> It pleased me <input type="checkbox"/> It angered me <input type="checkbox"/> It changed me	
Add any other reactions in your own words and say what you think caused your reaction...	

また、可能であれば大学に来ている留学生や海外出身の地域人材と直接交流する体験的学習の機会を設け、交流が表面的な情報交換に終わらないように、事前学習を課題にしたり、1回きりのイベントではなく継続的に目的を持った協働学習ができるような場を設定するなどの工夫が大切だ。このような体験について上記のAIEを用いて振り返りをすることも有効だろう。

【参考文献】

文部科学省. (2017). 『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 外国語活動・外国語編』. 開隆堂出版
 Council of Europe (2009). Autobiography of Intercultural Encounters <https://www.coe.int/en/Web/autobiography-intercultural-encounters/autobiography-of-intercultural-encounters> *児童向けの資料も掲載されている。

McConarchy, T. Furuya, S. and Sakurai, C. (2019). Intercultural communication for English language learners in Japan. 南雲堂

2.3 英語力向上

英語力の向上は一朝一夕で成し遂げられるものではなく、小学校で英語の授業が行えるだけの英語力を教員養成段階で身につけさせることは非常に重要である。また小学校教員には、一般的な英語力の向上に加えて、授業場面で特に必要な英語運用能力が必要である。しかしながら、外国語の指導法や外国語に関する専門的事項の科目の中で、英語学習に十分な時間を割くことは難しく、他の科目との連携や授業外での取り組みが必要となる部分でもある。本項では、指導法、専門的事項の授業内での取り組みとそれ以外の取り組みに分けて具体例を示す。

◆指導法・専門的事項の科目での取り組み

【指導技術の一環として小学校教員に特有の英語運用能力を扱う具体例】

- ・ Classroom English の演習を継続的に行う
- ・ リキャストの演習を継続的に行う
- ・ Small Talk の演習を継続的に行う

【解説】

小学校の授業における教師の英語使用場面を想定して演習を行う例である。具体的にはクラスルーム・イングリッシュや Small Talk の演習が挙げられる。クラスルーム・イングリッシュは授業中の指示出しに用いる定型発話 (Stand up. / Let's listen once more. / Please come up to the front. など) であり、英語の授業を行う上で欠かせないものである。一方で間違いやすい表現もあり、誤った表現が定型化してしまうと児童に誤ったインプットを与え続けることになりかねないため、注意が必要である。講義での扱い方には、例えばクラスルーム・イングリッシュのテキストなどを講義の教科書に指定して自学を促し、毎回小テストを行うなどの方法がある。ただし、クラスルーム・イングリッシュは暗記しているだけでなく実際の授業で使用できることが肝要であるため、テストによる評価にとどまらず模擬授業などで学生が実際に使用する場面を設定することが肝要である。また、特に間違いやすい表現 (「もう1度」は One more. ではなく Once more. 又は One more time., 共感を表す際は Me too. ではなく I think so too. など) を取り上げて、学生に注意を促すことも効果的である。

リキャストは、児童の発話を修正して正しい発話を促すための訂正フィードバック (corrective feedback) の一種である。訂正フィードバックにはいくつか種類があるが、なかでもリキャストは児童の発話や意思表示を共感的に受け止める意味合いがあり、小学校教員の指導技術として非常に重要である。授業中の児童の意思表示には様々な段階があるが、どの段階においても児童の伝えたいメッセージを教師が推測し、フルセンテンスでリキャストすることで有効なインプットを与えることができる。例えば、What color do you like? という質問に対し、Blue. と単語で反応する児童、I like blue. と文で反応する児童、「青」のように日本語で反応する児童がいる。児童の発話がこのいずれであっても、教師が、Oh, you like blue. のようにリキャストすることが重要である。またリキャストに続けて、I like pink. のように教師自身のことについて言って聞かせることで、児童に言わせたい I like... のインプットを与えることができる。上記の質問に答えられない児童に対しては、Do you like blue? / Do you like red? のように Yes / No

疑問文で尋ねる場合がある。この場合児童の反応は Yes. / No. やうなずき、首振りなどになるが、この場合でも同様に、Oh, you (don't) like blue. とリキャストすることで、インプットを与えることができる。講義で扱う際には、ペアやグループでロールプレイを行うことが有効である。また、模擬授業やマイクロティーチングで単元序盤の導入の場面を取り上げ、児童役の学生に不完全な発話をしてもらうことによってリキャストが求められる場面を作り出すことができる。

Small Talk など児童に英語で語りかける際に必要なのは、まとまった内容のある話を児童が理解できるように話して聞かせる能力である。事前に準備した内容をスムーズに話すことに加えて、児童に使用させたい英語表現をできるだけ多く聞かせることができるように、教師の発話を調整する必要がある。また、Small Talk を行いながら児童の反応をうかがい、話の内容を理解できていないようであれば別の表現で言い換えるなど、児童の実態に合わせて臨機応変に発話内容を修正することが求められる。このように、Small Talk を行うには教師自身の話すこと（発表）の能力が相当に高い必要がある。講義で扱う際には、Small Talk を行う題材や使用する英語表現を事前に提示しておき、準備した上で1分間程度まとまった話をする活動が有効である。その際、4～5人程度のグループで行うことで聞き手のリアクションに対して反応する練習も行うことができる。準備した英語をただ話すのではなく、声色や話す速さ、イントネーションなど、相手に聞かせるために話すことを意識させることが重要である。

また、英語力の向上には継続した取り組みが肝要であることから、これらの活動を1回の講義で集中して行うのではなく、帯活動として継続的に扱うことが望ましい。

【小学校で扱う題材を用いる具体例】

- ・英語の歌や早口言葉の演習を行う
- ・絵本の読み聞かせの演習を行う

【解説】

英語の歌や早口言葉、絵本など、実際に小学校の授業で扱う題材を用いる例である。歌は、英語のリズムやイントネーションを身につける上で効果的である。なかでもマザーグースは押韻詩としての側面があるため、文強勢の練習に最適である。例えば有名なマザーグースに Pat a Cake という歌がある。下に示したように、この歌は4拍子、すなわち1行あたり4拍のリズムになる。強勢が置かれる部分が各小節の最初になるが、英語は等拍リズムのため、各強勢の間は等間隔になる必要がある。このように正しいリズムで歌ったり唱えたりするためには、1行目の pat a cake と同じ時間で4行目の put it in the を言わなくてはならず、練習を繰り返すことで英語らしい音の流れが自然と身につく。また強勢の位置に目を向けさせると、英語の文強勢は基本的に内容語の第1強勢母音につくということがわかる。さらに題材によっては脚韻についても扱うことができる。講義では、例えば毎回授業の初めに時間を取って1曲ずつ扱うなどの方法がとれるであろう。その際にまず教師が歌って聞かせ、学生に真似をして歌わせ、その後歌詞を配るという手順を踏むと、実際の小学校での歌の指導を体験させることができる。

Pat a cake, pat a cake, baker's man.

Bake me a cake as fast as you can.

Pat it and prick it and mark it with P.

Put it in the oven for baby and me.

(強勢が置かれる部分に下線を付した)

第1部 小学校 教員養成課程 外国語（英語）

英語の絵本の読み聞かせを練習するのも、英語らしいリズムを身につける上で有効である。実際に小学校の授業で絵本を読み聞かせる際には英語らしく読む必要があるため、指導技術としても重要な点である。英語の絵本には様々な種類があるが、講義で扱う際には比較的平易で英語のリズムがしっかりしているものを選ぶとよい。例えば、*Brown bear, brown bear, what do you see?* (Martin & Carle, 1984) は繰り返しが多く、扱いやすい。1冊の絵本を繰り返し練習して読めるようになることは学生の自信にもつながる。例えば、3～4種類の絵本から好きなものを選んで練習させ、その後異なる絵本を選んだ学生同士で読み聞かせし合うのもよい。講義で扱う際には、学生に練習させる前に教師がまず読み聞かせを行うことや、練習中に適宜フィードバックを与えることが肝要である。また、児童の気を引くための抑揚のつけ方や声色の変え方、ページのめくり方などは、読み聞かせの指導技術として扱っておきたい。

早口言葉は、例えば久埜他(2008)に集録されている *My mother is making my mittens.* のように同一の子音 (/m/) が繰り返し出てくるものや *She is slicing cheese.* のように類似の子音が出てくるもの (/f/ /s/ /tʃ/) があり、個別の子音の練習に最適である。また *Peter piper*… や *She sells seashells*… のように長いものであれば、個々の子音の発音に加えて前述の文強勢の練習にもなる。「早口言葉」というと早く唱えることが目的になってしまいがちだが、聞き手が聞きやすい速さで個々の子音をしっかりと発音するように指導することが重要である。講義ではいくつかの早口言葉を紹介して自分の苦手な音素の入ったものを練習させる方法や、練習したものをペアで聞き合っただけで発音を改善していく方法などが考えられる。また、学生のスマートフォンなどで自分の発話を録音して聞き直させるのも効果的である。授業外の課題として練習させる場合には、手本となる音源に学生がアクセスできるように配慮する必要がある。これは、文字情報だけを頼りに練習するとどうしても英語らしいリズムが失われがちになるためである。

【指導法・専門的事項の科目で英語資格検定試験の受験を課す具体例】

- ・ e-learning システムでの資格検定試験対策学習を課題とする
- ・ 資格検定試験のスコアを成績評価項目の一部とする
- ・ 資格検定試験のスコアの科目目標点を定める

【解説】

指導法・専門的事項の授業に TOEIC などの資格検定試験を取り入れる例である。実際には講義の時間内に問題演習などを行うのは困難であるため、e-learning システムなどでの授業外学習を課題とする事例が多い。また、学期中に資格検定試験を受験することを単位認定要件としてそのスコアを成績評価に取り入れる事例や、科目ごとに設定された目標スコアを大幅に下回る場合には単位を認定しないこととする事例があった。具体的には、卒業時の目標を TOEIC 570 点とし、専門的事項(2年前期)で 490 点、指導法(2年後期)で 530 点を目標スコアとしている例があった。

このような取り組みにより、講義の時間を割かなくとも学生に英語学習を促すことができる。しかしながら、e-learning システムでは学習への動機づけを維持しづらいことや、そもそも資格検定試験の学習だけでは小学校教員として必要な英語力を身につけることは困難である点には留意すべきである。

◆指導法・専門的事項以外での取り組み

【他の科目との連携の具体例】

- ・ 一般英語科目で小学校英語に関連した内容を扱う

- ・一般英語科目で資格検定試験の学習を行う
- ・教室英語に特化した科目を設ける
- ・資格検定試験対策の科目を設ける

【解説】

先述のように、指導法や専門的事項の科目においては英語学習の時間を確保することが容易でないことから、全学生が必修の英語科目（一般英語科目）の役割は大きい。この科目では一般的な英語力を向上させることが目的となるが、特に小学校英語に関連する内容や指導技術（上記を参照）を扱うことで、より実践的な英語力を身につけることが期待できる。また、指導法の科目で指導技術について学習する際にはある程度の英語力が必要となることから、多くの場合1年次に設定されている一般英語科目において相応の英語力を身につけることは重要である。一方で、例えば小学校教諭免許状の取得が卒業要件の学生のみで構成されているクラスではない場合は、一般英語科目で小学校英語に特化した内容を扱うことが難しい場合もある。また先述のように、指導法や専門的事項の科目で資格検定試験の学習を設定している課程においては、一般英語科目でも同様の内容を扱っている例が多い。例えば一般英語科目を2科目必修とし、片方は英語でのコミュニケーション中心の内容、もう片方を資格検定試験の学習としている例があった。また必修科目ではないが、教室英語に特化した科目や資格検定試験の対策科目を設定している課程もあり、参考になるだろう。

【授業外での取り組みの具体例】

- ・英語力向上講座を開催する
- ・海外研修プログラムを実施する

【解説】

授業外での取り組みとして英語力向上講座と海外研修プログラムの例を挙げる。小学校教諭免許状を取得する学生全員に対する取り組みというわけではないが、特に意欲の高い学生に対しては有効な手立てとなり得る。英語力向上講座では資格検定試験対策講座のほか、特に小学校で英語の授業を行う際に必要な英語力に特化した講座が多い。教員採用試験に合格した学生を対象とし、小学校英語準備講座として指導技術と合わせて扱っているものもあった。海外研修プログラムでは通常の語学研修のほか、提携校を研修先として附属学校での授業を見学できるものや、小学校で実際に英語の授業を行うプログラムも見られた。

◆まとめ

冒頭で述べたように英語力の向上は一朝一夕で成し得るものではなく、学生が継続して英語学習に取り組む必要がある。本項では指導法・専門的事項の科目内外での様々な取り組みの具体例を挙げたが、教員養成段階で扱えるのは小学校で授業を行う上で必要な英語力のうちごく一部であり、実際には教員となって実際に児童とのやり取りを繰り返す中で身につけていく資質・能力も多いと考えられる。したがって、最低限の英語力を教員養成段階で身につけさせておくことだけではなく、卒業後も継続的に自己研鑽を行うための学習動機の向上や、自身の英語力を客観的に捉えるためのメタ認知力の育成も肝要であると考えられる。

【参考文献】

Martin, B. & Carle, E. (Illustrator) (1984). *Brown bear, brown bear, what do you see?* Puffin Books.

久埜百合他 (2008). 『子どもと共に歩む英語教育』ほーぐなん

3. これからの教員養成・採用・研修に向けて

3.1 小学校外国語活動・外国語のモデルプログラムの提案について

小学校教員養成における外国語活動・外国語科にかかわる開設科目は2科目程度であり、きわめて限られている。その意味で、科目担当者は外国語活動・外国語の専門的事項および指導法にかかわる科目を、どのように構成し、指導したらよいかについて入念に授業計画を練り、限られた時間と資源の中で最大限の効果を得られるよう努力を払う必要がある。どんな環境や制度にも適用可能なベストなプログラムの提案は困難であるが、それぞれの環境や制度、目的、学生などに合わせて最適なプログラムを構築するために、多様なアイデアやオプションを提供することは可能である。その趣旨のもと、本章は調査・事例の聞き取りから得られた知見にもとづき、モデルプログラムのための構成要素を多角的に提案した。まず、教員養成プログラム全体における初等外国語関連科目の位置づけを意識して、教育実習や教職実践演習などとの有機的な関連性を勘案した包括的プログラム構築について検討・提案した。次に、シラバスについては、指導法科目のための6種類、専門的事項の科目のための5種類のモデルを提案し、それぞれの特徴や留意点を解説した。また、その指導方法については、コアカリキュラムの項目ごとに事例にもとづき具体的な提案をした。模擬授業についても、指導計画の立て方、テーマ設定、大人数クラス、マイクロティーチング、振り返りなどについて具体的な提案を行った。専門的事項については、英語学および英語文学にかかわって、英語とその背景文化についての知識を授業実践に関連させながら指導するための具体的な例示と提案を行った。また異文化理解については、学習指導要領にもとづき、主教材を使いながらどのような指導方法が可能かを検討し、学生自身の異文化理解観を省察させる方策についても提案を行った。

教職課程コアカリキュラムは、「教職課程で共通的に習得すべき資質能力を示すもの」¹とされ、教員が身に付けるべき資質・能力をリスト化し、網羅的、並列的に示すものである。そのため、現実の大学での教員養成においてそれらの資質・能力群の習得をいかに促すべきか、その方法を示すものではない。とりわけ、教職課程においては座学的に知識について講ずるだけでは不十分であり、知識が教育実践に生きて働くものにならなくてはならない。本章において提案したモデルプログラムが、初等外国語活動・外国語のコアカリキュラムに基づく各大学でのプログラムにおける指導の具体化に役立つことを期待したい。

おわりに、多くの学生にとって、小学校での外国語活動・外国語の指導はイメージを持ちづらく、いきおい、これまでの中学校・高校での英語教育のイメージをそのまま持ち込んで教えようとするのが起こりうる。大学での教員養成は、そうした頑固な指導観を変え、小学生の発達段階に合った指導観を得させるための最後のチャンスであると言ってもよいかもしい。本章で提案するモデルプログラムが、学生に小学校での外国語教育にふさわしい指導力・指導観を会得させる教員養成の手がかりとなることを切に願っている。

3.2 コアカリキュラムからみた教員養成と採用・研修の連携の必要性

本章はコアカリキュラムの視点から大学での教員養成段階でのモデルプログラムを提案したが、最後に養成段階と採用・研修段階との目指す資質・能力面での連携の必要性について述べたい。

まず採用については、自治体による採用試験が行われているが、採用試験で問われる資質・能力は、大学での教員養成プログラムと連動していることがきわめて重要である。コアカリキュラムに示された資質・能力が、採用試験においても検出されていなければ、大学での教員養成プログラムで習得させる

取り組みが実効を上げにくくなる。採用試験の内容と検査方法について、コアカリキュラムとの整合性を意識的に確認することが必要である。自治体での採用試験の内容・方法の策定において、コアカリキュラムを軸とした教員養成プログラムでの改善努力が参照されるよう、行政・制度的な工夫の必要性も指摘しておきたい。

もう一点、英語力の不十分さについては、本事業の結果からも、養成段階では深刻な課題であり、採用段階でも適切なレベルの英語力要件を徹底する努力が必須である。また、一般的な英語力というよりは、小学校外国語活動・外国語の授業を指導する上で必要となる英語力の質を同定し、養成段階でその英語力を養成するよう、あるいは採用段階でその英語力を検出するよう、同じベクトルで改善を図る努力が必要である。

次に、現職の教師に対する研修との関連性と住み分けについても考えてみたい。研修段階においては、対象となる現職教員は、実践体験の積み重ねや児童理解が深まるなど、学生時代とは比較にならない程の児童理解や実践知が身についた状態であり、研修における資質・能力の力点は、教員養成段階とは自ずと差別化が図られるべきである。本事業から、大学で習得が容易な、あるいは困難な資質・能力があることが示唆されているが、現職になってから習得した方がより効率的である資質・能力もあるであろう。例えば、学生時代は、児童理解の欠如から、児童の発達段階や興味関心に合わせた指導を柔軟に行うことは困難であり、現職になってからこそ各種の指導理念や指導技術の習得がはかどり、また主体的に習得することが想定される。また評価分野の資質・能力なども、現実の児童の能力の伸張の様子や個性の理解、指導計画や評価制度などの実際的理解がないと、十分な習得は望めないであろう。

また、教員養成段階で「習得した」と判断できていても、現職として実際にそうした資質・能力が「生きて働いているか」について、再度、研修段階で確認、補強する必要があるであろう（第1章第1節1.6参照）。あるいは、養成段階でそれらの資質・能力をどの程度指導できるかの見極め、取捨選択をし、コアカリキュラムを見直して行く必要性もあるであろう。

自治体では、研修のために教員の資質・能力指標を策定する動きも見られるが、それらと教員養成プログラムのコアカリキュラムとの住み分け・役割分担を適切に行うために、行政と大学が資質・能力指標を相互に調整・すり合わせし、互いの連関性を高めかつ役割分担を図る努力が必要であろう。

以上、コアカリキュラムで示された資質・能力項目の視点から、養成段階と採用・研修段階との整合性や役割分担について述べた。おわりに、本章のモデルプログラムでは、コアカリキュラムの項目をプログラム化する方法、指導方法について具体的な提案を行ったが、養成段階あるいは研修段階において有効に働くプログラムと指導・研修方法は異なることも考えられ、今後、養成段階から研修段階にいたる指導・研修方法のグラデーションを検討する必要についても付記したい。

【参考文献】

教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）『教職課程コアカリキュラム』文部科学省，
https://www.mext.go.jp/content/1421964_2_1_2.pdf